地域の絆づくり促進のための
コミュニティソーシャルワーク実践への
ヒント集

地域での支え合いのしくみを創り出す
ネットワークを構築するために

はじめに

このたび、香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会では、香川県からの委託を受け、「地域の絆づくり促進事業」に取り組みました。この事業の内容の一つとして、今後、コミュニティソーシャルワーク実践者の参考となるものを発刊するということで、この冊子を編集いたしました。

本事業は地域福祉推進を担う人材の養成と、広く県民にその意義を理解いただくとともに、主体者として地域福祉推進に参画いただくことをその目的としています。そうした意味で、この冊子とともに県内で先進的に取り組まれている活動を紹介したリーフレットを別に作成しておりますので、それぞれの地域の中で住民による活動の参考にしていただきたいと思います。

さて、少子・高齢社会の進展による地域社会における住民同士の絆の希薄化が進み、生活課題が多様化してきています。香川県内でも中山間地や離島等では過疎化が進んで集落活動が困難になっています。また、新しい住宅、団地に住む人々とその地域との交流がない、団地などの集合住宅では住民同士も顔を合わすことがない、といったように大都市の問題と思われるような変化が起きています。

このような地域社会の変化によって、日常生活の中で生ずる「生活のしづらさ」、「生活課題」にも世代ごとの認識の違いが生まれ、世代間で共有されず、社会的孤立につながる状況もつくられています。高齢者のみならず誰もが「安心して暮らせる地域社会」、「ひとり暮らしになっても安心できる地域社会の創造」は地域の課題です。

委託事業としては平成24年度だけでありましたが、香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会としては今後とも継続的にコミュニティソーシャルワーク人材養成事業に取り組んで参りたいと思います。

今回の事業に取り組むにあたっては、特定非営利活動法人日本地域福祉研究所理事長の大橋謙策先生をはじめ、主任研究員の高橋信幸先生、國光登志子先生、青山登志夫先生等研究所の全面的なご指導、ご支援を賜りましたことに対しまして厚くお礼を申しあげます。今後とも地域福祉実践に向け関係各位のご理解とご協力をお願いし、ご挨拶といたします。

香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会
代表　越智和子

香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会の24年度事業と今後の期待

特定非営利活動法人　日本地域福祉研究所
理事長　大橋　謙策

香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会が平成24年度香川県の委託を受けて、住民と行政の協働による地域福祉推進のリーダー養成研修を行ったことは全国的に見ても画期的な取り組みである。

香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会はそもそも香川県社会福祉協議会が企画実施したコミュニティソーシャルワーカー養成研修の修了者を母体として組織化されたもので、会員個々人の専門職としての自覚とコミュニティソーシャルワーク機能にアイデンティティをもつ人々が組織した研究会である。

このようないわば任意の団体が県行政から委託を受けて県の政策具現化に向けて協働するということは2000年以降頓に求められている「新しい公共」づくりに向けての一つの新たな試みであり、県の姿勢に対して高く評価したいし、受託をした香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会の対応も評価したい。

従来であれば、社会福祉において地域の問題を扱うのはあたかも社会福祉協議会の“専売特許”のように思われ、その分野の研修は社会福祉協議会の職員のみを対象に行われがちであったが、現在求められている高齢者の地域自立生活支援や地域包括ケアの推進、あるいは障害者の地域移行支援と地域自立生活支援という課題は何も社会福祉協議会のみで解決出来るわけではない。社会福祉法人の経営する社会福祉施設をもっと地域に開き、地域住民が抱えるニーズに応える地域貢献が社会福祉法人及び社会福祉施設に求められている。また、地域包括支援センターも介護予防サービスに忙殺されているという状況があるとしても、その設置に際しての理念である生活困難事例への対応や地域包括ケアの拠点という考え方が今改めて強く求められている。そのような社会福祉の政策動向、実践課題を踏まえると、今求められている仕事の仕方は社会福祉制度に規定された「場」や「枠組み」の中で決められている業務をこなすというだけではなく、住民の生活ニーズに応え、住民の生活のしづらさを解決するソーシャルワーク機能を発揮する仕事の仕方が求められている。その意味では、香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会のように、職域を超えて、コミュニティソーシャルワーク機能にアイデンティティをもつ人々が職種横断的に集い、同じ目的に向かって活動するというのは新しい仕事の仕方であり、そこに着目して香川県が業務委託したことはとても素晴らしいことと高く評価したい。要は、住民に、あるいは行政に求められている機能を理解し、フットワークよく実践してくれる組織であれば、従来の枠組みに囚われず実践して欲しいという考え方の表われということができる。

しかも、今回の受託事業は住民と行政の協働による地域における新たな支え合いの構築にむけての地域リーダーの養成とそのスーパーバイザーの養成という課題であった。高齢者の地域自立生活支援においても、障害者の地域自立生活支援にしても、行政が作る社会福祉制度だけでは対応できない。いわば“ご近所の底力”ともいえる住民のインフォーマルケアがなければ地域での自立生活を支援できないし、支えられない。かつまた、近隣住民のそれらの力と行政が制度的に提供するフォーマルサービス

とが有機的に結びつけられて提供されないと効果も半減する。その意味では、インフォーマルケアとフォーマルサービスとを結びつけるシステム作りも市町で必要になるし、その機能を駆使できる専門的職員も必要になる。わけても、従来の自然発生的な、地縁関係としての地域の支え合いではなく、要介護の高齢者も、障害者も、あるいは一人親家庭をも地域から排除することなく、“であい、ふれあい、ささえあい”の新たな地域を創造することに目覚め、活動に参加してくれる住民の方々の養成・研修が大きな課題であった。県内を６つのブロックに分け、ワークショップ方式の研修をしたのも、地域リーダーになって頂く人々自身が地域の生活のしづらさに気づいて頂き、解決の方向を見いだして頂きたいとのねらいからであった。

これらのねらいがどれだけ24年度の事業において具現化できたかは本報告書を読んで評価して頂きたいが、少なくとも香川県がこのような新しい視点に立って、「新たな公共」の理念に基づく地域づくりを進めようとした点は重ねて評価したい。地域づくりには10年のスパン（期間）が必要であると言われるし、“教育は100年の計”と言われる程人材育成には時間がかかる。それを24年度の活動のみで評価するのにはやや乱暴の嫌いがないわけではないが、時代は“評価の時代”であり、単年度なりの報告をして関係者の評価を受け、次年度以降に活かしていかなければならない。

今回の受託事業に、特定非営利活動法人日本地域福祉研究所が全面的にお手伝いさせて頂いた。６ブロックでの研修、全県レベルでの研修を年間を通して全面的に担うのは日本地域福祉研究所としても始めてのことであり、戸惑いもあったものの、日本地域福祉研究所が掲げてきた“全国の草の根の地域福祉実践の向上”につながる体系的研修支援の機会であり、この事業に関われたのは大きな喜びであった。このような機会を提供して頂いた香川県並びに香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会に対し、心から感謝と御礼を申し上げる次第である。

今回の事業を全面的にお手伝いさせて頂いた日本地域福祉研究所の責任者として、今回の事業の位置づけ及びねらいを期してごあいさつをさせて頂く。

今後とも香川県、香川県社会福祉協議会、香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会が協働して、全国に冠たる“住民と行政の協働による新たな地域の支え合い”に向けて実践を深め、全国発信して頂けることを祈念するとともに期待したい。

2013年３月

目　　次

第１章　コミュニティソーシャルワークとは
（１）今、なぜコミュニティソーシャルワークが必要なのか
（２）コミュニティソーシャルワークの機能

第２章　香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会の取り組み
（１）香川ＣＳＷ実践研究会の目指すもの
（２）平成24年度の香川ＣＳＷ実践研究会の取り組み
（３）香川ＣＳＷ実践研究会の具体的取り組み内容

第３章　地域福祉（ＣＳＷ）実践者としての人材養成プログラム
（１）ＳＴＥＰ１　「地域福祉（ＣＳＷ）実践者養成研修」
（２）ＳＴＥＰ２　「地域福祉（ＣＳＷ）実践者スキルアップ研修」
（３）地域福祉（ＣＳＷ）実践者養成研修全体の総評

第４章　各ブロック年間の取り組み事例
（１）ブロック圏域について
（２）取り組み事例を読むにあたって
（３）各ブロックの取り組み事例
事例１　大川ブロック
事例２　小豆ブロック
事例３　高松ブロック
事例４　中讃東ブロック
事例５　中讃西ブロック
事例６　三観ブロック

■ 香川県内の地域福祉活動
事例１　地域の見守り活動　ー黄色い旗運動 ＭＩＮＡＭＩＮＯ 絆ー
事例２　ふれあい・いきいきサロン　ー東ふれあいクラブー
事例３　さぬき市子育ておうえんひろば　ぴょんぴょんカフェ

第1章
コミュニティソーシャルワークとは

（1）今、なぜコミュニティソーシャルワークが必要なのか

少子・高齢化の進行や働き方などの生活様式の変化に伴って地域社会や家庭の様相は大きく変化し、さらに経済情勢や雇用環境の厳しさの長期化も相まって、孤立死や自殺、ひきこもりなどの社会的孤立の問題、経済的困窮や低所得の問題、虐待や悪質商法等権利擁護の問題など、地域における生活課題は深刻化し、広がっています。このような事柄に対応できる公的なサービス・制度の充実が重要なことはいうまでもありませんが、あらゆるニーズに対応していくことには限界があります。

このような中、「地域の絆やつながり」を再構築し、住民同士が互いに支え合って安心して暮らしていけるまちづくりはますます重要で、昨今の社会全体の課題となっています。

コミュニティソーシャルワークとは、簡単に一言で言うと、「地域において、住民の生活課題やニーズを把握し、解決のために住民が主体となる組織を作り、支え合う活動を支援していく専門的援助技術」です。社会福祉協議会職員をはじめとする地域福祉関係専門職等が、コミュニティソーシャルワーク実践を行うことで、地域の身近な生活課題を発見し、地域住民と行政・専門機関等が協働・連携して対応できる基盤を作る支援をしていくことが、誰もが安心して暮らせるまちづくりへの一歩となると言えます。

（2）コミュニティソーシャルワークの機能

「地域福祉」は、社会福祉六法体制の枠外の「その他の福祉」としての位置づけではなく、属性縦割り社会福祉行政を横断的に再編成する「ソーシャルワーク機能」を軸にした新たな社会福祉の考え方であり、新たなサービスシステムでもあります。コミュニティソーシャルワークは、その新たな社会福祉を切り拓く実践思想であり、住民と行政・地域福祉関係者等の協働による新しい社会システムを創造する地域福祉の中核をなすものです。

しかし、実践にあたっては次のような大きな課題があります。「制度やサービスの狭間にある問題へどう対応するか」「公的なサービスだけでは対応できない生活課題や社会的排除の対象となりやすい人々の課題にどう対応するか」「既存の社会福祉制度では対応できない問題を解決するための新しい福祉サービス開発機能をどう発揮するか」等です。

ここでは改めて、コミュニティソーシャルワークを実践するにあたって発揮することが求められる「コミュニティソーシャルワークの機能」について以下の10項目を挙げておきたいと思います。

①地域にある顕在化している課題の確認と潜在化している課題の発見・掘り起こし機能

・地域の属性を踏まえた住民の日常生活における“生活のしづらさ”、“生活上の不便さ”の発見と把握

・住民座談会等でのワークショップの機能、専門多職種共通アセスメントシートの開発

②地域の生活課題と自分の生活課題との「橋渡し」と住民の認識の共有化機能

・住民が関心をもつ地域の資料づくり

③問題解決に有効な既存のサービスの点検と不足の場合の新しい福祉サービスの開発機能

・ソーシャルエンタープライズ、コミュニティビジネス、協同労働協同組合法の発想

④地域自立支援における生活全体、家族全体を包括するケアマネジメントシステムの確立

・地域包括支援センター機能の見直しと地域主権

⑤地域包括ケアシステムの確立と連絡調整（コーディネート）機能

⑥個別支援計画立案における個別ネットワーク会議の開催と制度的サービスに近隣住民の「ご近所の底力（ソーシャルサポートネットワーク）」を結びつける機能

⑦地域を福祉コミュニティに変容・向上させる機能

・地域の住民の生活観、生活様式における多様性の受容

・地域活動リーダーとコミュニティソーシャルワーク

⑧市町村における地域福祉計画づくりを推進する機能

・住民、行政の多様な知恵に基づく財源の捻出、確保

・地域支え合い体制づくり事業

⑨住民と行政の協働を創る地域福祉プラットホームづくり

・社会福祉法人、社会福祉協議会およびＮＰＯ法人の位置と役割

⑩地域福祉推進に関わる専門多職種の合同研修とコーディネートとしてのコミュニティソーシャルワーク

参考文献：特定非営利活動法人日本地域福祉研究所『コミュニティソーシャルワークの理論』

第２章

香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会の取り組み

（1）香川ＣＳＷ実践研究会の目指すもの

香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会（以下香川ＣＳＷ実践研究会）は、地域福祉関係業務に従事する専門職や関係者等を対象に、日頃の実践活動を通じてコミュニティソーシャルワークの理解と専門職や関係者同士の連携を深めることを目的に平成21年４月に発足し、活動を行っています。

平成23年度は、香川県から「地域支え合い体制づくり事業」の補助を受けて、コミュニティソーシャルワーク実践者養成研修を実施し、地域福祉の中核を担う人材育成及びブロックでの研修会、地域福祉関係者や住民の意識啓発のための研修会等を行ってきました。

平成24年度は、香川県より「地域の絆づくり促進事業」の委託を受け、さらなる地域福祉推進に向け体系的・継続的な研修等を通じての人材育成や地域福祉関係者の顔の見える関係づくりと地域における支え合いのしくみづくりに取り組むこととなりました。

香川ＣＳＷ実践研究会は、23年度からおよそ５年間の計画で、以下のことに取り組み、それぞれの段階での記録や評価を行い地域福祉の推進に取り組んでいきたいと考えています。この冊子を発行する平成24年度末までには、このうちの④までの達成を目標にしていますが、25年度以降も継続した取り組みを行い、以降の目標の達成を目指します。

①ＣＳＷ実践者として核となる人材の養成とスキルアップ
②地域福祉関係専門職や地域での活動リーダーとなる方等へＣＳＷの視点の理解者を増やすこと
③多機関・多職種の専門職や地域福祉関係者同士が地域で「顔の見える関係」でつながること
④互いが協働・連携しチームアプローチができる基盤を固め、地域住民の主体性に働きかける支援法について考えていくこと
⑤地域にある生活課題やニーズをキャッチしていき、アセスメントし、それを解決するための住民同士の支え合いのしくみ（ソーシャルサポートネットワーク）を創り出す実践に取り組んでみること
⑥各地域における実践の成功事例を積み重ねていくこと
⑦実践を通じて、新たな地域福祉の担い手を開拓したり、地域の福祉力を向上させる働きかけを行うこと

（２）平成24年度の香川ＣＳＷ実践研究会の取り組み

香川ＣＳＷ実践研究会では、平成24年度は、研修計画に大きく２つの柱を立て、継続的で体系的に学びを深めて行くと共に、多機関・多職種で連携を図りながら、ＣＳＷの視点をもった人材を増やしていくことを目標とした取り組みを行ってきました。

研修の２つの柱は①「コミュニティソーシャルワーク実践者の養成研修」と、②「香川県内を６つの圏域に分けたブロックごとの研修」です。

①の研修は香川県内の各地域で活動するコミュニティソーシャルワーク実践者を育成し、さらにその人材のスキルアップを図るため、年度内で９月にＳＴＥＰ１として、「ＣＳＷ実践者養成研修」を、11月にＳＴＥＰ２として「ＣＳＷ実践者スキルアップ研修」を開催しました。24年度は、両研修３日間を通しては19名の方に参加をいただきました。この集中研修で、コミュニティソーシャルワーカーとしての資質を身につけた方々が、各地域のブロック研修にも参加し、地域での課題について関係者と協議を深めていくことにもなりました。

②のブロック別研修では、県内を６つのブロックに分け、６月にＣＳＷ実践基礎研修に集まった多機関・多職種の県内の地域福祉関係専門職が課題と感じていることを基に、各ブロックで課題を共有し、解決のための具体的なプログラムを選定し進めていきました。今年度は、２回継続してのブロック別研修会を開催しました。また、研修会そのものの取り組みも重要ですが、それに加えて、研修会を企画・実施するプロセスでの各ブロックで核となっていく人材の開拓や、そこでの顔の見える関係の構築のためのメンバー間での情報や意見交換のできる場の設定、メンバー間での課題意識の共有、ＰＤＣＡサイクルを意識した取り組み内容の決定となども非常に重要になりました。各ブロックの核となったリーダー達が、どのように各地域内で顔の見える関係を築き、「連携」について考え、ＣＳＷの視点を広げていったのかについては、第４章に「ブロックの取り組み事例」として詳しくまとめています。

①、②の研修会等を同時進行させ、人材をリンクさせていくことで、ブロック内でのＣＳＷ実践を行う上で核となる方同士が所属機関や職種を超えて、顔の見える関係を築いていけることもねらいとしました。

１月には、①の研修でＣＳＷ実践者として養成された方と、各ブロック研修でリーダーとなって進めてくれた方々を対象に、ブロックでの取り組みの報告を行い、今後のブロック別研修の進め方について話し合いをする場をもちました。また、各ブロックの取り組みについて日本地域福祉研究所の大橋謙策先生より総括的な助言もいただきました。ここで集まった方々が、今後各ブロックや地域でコミュニティソーシャルワーク実践を行っていく核になる人材になるということで、個人としてまた、所属の組織としてどのような役割を担い実践に取り組んだり、学んでいきたいのかについての協議を行いました。

２月は、これまでの香川ＣＳＷ実践研究会の24年度の研修会に参加頂いた方（福祉保健行政、専門職、地域の福祉関係者である民生・児童委員や福祉委員等）を中心に、これまでの年間の取り組みを踏まえ、改めて「それぞれの立場から進める地域福祉」という観点で話を聞くシンポジウム形式の講演会を行いました。これまで、各地域で

地域福祉に関わってこられた専門職や地域の方々に加えて、新たに地域に目を向けて下さり関心をもっている方々の参加も予想以上にあり、大きな会になりました。

24年度の一年間は、６月の基礎研修にはじまり、地域福祉関係者である受講者が学びを重ね、レベルアップできるように体系的・継続的な研修計画を設定しました。そのことにより、集まるメンバーを固定化させながら互いに学び合い、その輪を少しずつ広げて、コミュニティソーシャルワーカーとしての人材育成と地域福祉関係専門職のネットワーク基盤を固められるよう意識をしてきました。

コミュニティソーシャルワークの機能については第１章（２）に書きましたが、これらの機能を発揮し実践を展開していくには、「コミュニティソーシャルワーカー」と呼ばれる地域の社会資源（人・環境も含む）を調整したり創り出していく人材と、「地域で強みを生かして知恵を出したり、動ける地域福祉専門職や関係者のネットワークづくり」が欠かせません。「研修会等の企画・実施」という手段を使って、香川ＣＳＷが24年度の目標として挙げているこの二つを達成できればと考えました。

平成24年度 香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会　地域の絆づくり促進事業　年間の取り組み

CSW養成研修

ブロック別研修

6月

コミュニティソーシャルワーク実践研修〈全総会〉 6/23(土)

内容	①講義・・・コミュニティソーシャルワークとは ②グループワーク・・・ブロックに分かれ、それぞれ持ち寄った地域の課題の共有、今後の取り組みへの進め方を協議

8月

9月

CSW実践者養成研修（宿泊研修） 9/8(土)～9/9(日)

対象者	社協・包括・行政・施設等職員等

10月

11月

CSW実践者養成研修（スキルアップ・1日研修） 11/18(日)

対象者	社協・包括・行政・施設職員等 昨年度及び今年度のCSW養成研修受講者

ブロック別研修(2回)

大川ブロック（さぬき市・東かがわ市）	9月24日(月)	11月19日(月)
小豆ブロック（土庄町・小豆島町）	9月12日(水)	11月19日(月)
高松ブロック（高松市・三木町・直島町）	9月20日(木)	12月13日(木)
中讃東ブロック（坂出市・宇多津町・綾川町）	9月11日(火)	11月16日(金)
中讃西ブロック（丸亀市・善通寺市・琴平町・多度津町・まんのう町）	9月10日(月)	11月20日(火)
三観ブロック（観音寺市・三豊市）	9月21日(金)	11月19日(月)

1月

ブロック対応策・総括研修会 1/9(水)

① 各ブロックの年間取り組み報告と今後の取り組み方針の協議
② 取り組みに対する助言と総括講義

2月

地域福祉実践シンポジウム・総括 2/13(水)

① シンポジウム
　テーマ：香川での地域の絆づくりを促進するための住民、行政、専門職の役割
②総括講演

3月

成果物①	成果物②
県民向けパンフレット 10,000部 （地域福祉活動事例集） ※香川県内で現在行われている地域福祉活動で紹介したい事例を掲載	活動者向け実践ヒント集 800部 ・ネットワークを作る過程 ・香川CSW実践研究会の年間 の取り組み報告

平成25年度以降に繋がるように・・・

（３）香川ＣＳＷ実践研究会の具体的取り組み内容

各研修会の概要

研　修	日　時	場所	内　容	参　加　者
（1） ＣＳＷ実践研修会 《基礎編》	平成24年 6月23日 （土） 13:00 ～16:30	香川県社会福祉総合センター　7階 第1中会議室	○講義 日本地域福祉研究所 主任研究員　髙橋　信幸　氏 「個別支援と　地域の生活課題をつなぐ　住民活動を創り出すコミュニティソーシャルワークの使命を考える」 ○グループワーク 地域ブロックごとのグループで日頃の地域福祉に関わる業務の中での課題抽出と意見交換	計　71名 病院関係　2 高齢者福祉施設など　9 居宅介護支援事業所　9 障害児施設　1 児童相談所　1 NPO　2 個人　2 地域包括支援センター　10 行政　2 社協　33
（2） 各ブロック研修（2回）	平成24年 9月 ～12月	ブロック研修については第４章「各ブロック年間の取り組み事例」参照		
（3） ①ＣＳＷ実践者養成研修 ＳＴＥＰ１	平成24年 9月8日 （土） 10:30 ～17:30 ～ 9日(日) 8:45 ～17:00	休暇村讃岐五色台	○講義 日本地域福祉研究所 主任研究員　國光登志子　氏 「地域主権時代における自立生活支援とコミュニティソーシャルワーク」 ○ワークショップⅠ～Ⅳ ⅠＣＳＷの視点による 個別アセスメント ⅡＣＳＷの視点による 地域アセスメント１ ⅢＣＳＷの視点による 地域アセスメント２ ⅣＣＳＷ実践のプランニング ○総括助言 ワークショップ・助言講師： 日本地域福祉研究所 主任研究員　髙橋　信幸　氏 主任研究員　國光登志子　氏	計　44名 病院関係　1 高齢者福祉施設など　5 居宅介護支援事業所７ 障害児施設　1 地域包括支援センター　4 社協　26

(3) ②ＣＳＷ実践者スキルアップ研修 ＳＴＥＰ２	平成24年 11月18日 (日) 9:00 ～16:40	香川県社会福祉総合センター　7階 第2中会議室	○全体会 グループコンサルテーションについて 進行・講師： 日本地域福祉研究所 主任研究員　髙橋　信幸　氏 ・事例発表（参加者より）２事例 ○グループコンサルテーション 進行・講師： 日本地域福祉研究所 主任研究員　髙橋　信幸　氏 主任研究員　國光登志子　氏 主任研究員　青山登志夫　氏 各人の事例に基づくＣＳＷプランニングへのコンサルテーション （発表20分、コンサル10分） ○総括シンポジウム 「24年度の香川ＣＳＷ実践研究会の一年の取り組みと成果を考える」 司会：青山登志夫　氏 シンポジスト： 髙橋　信幸 氏、國光登志子 氏 越智　和子 （香川ＣＳＷ実践研究会代表）	計　19名 病院関係　1 高齢者福祉施設など　3 居宅介護支援事業所　3 個人　1 地域包括支援センター　2 社協　9
(4) ブロック別研修・総括研修会	平成25年 1月9日 (水) 9:30 ～16:40	香川県社会福祉総合センター　7階 第1中会議室	○ブロックの年間の取り組み報告 ○グループワーク ・ブロック内で見えてきた課題 ・今後の取り組みについて ○総括 アドバイザー： 日本地域福祉研究所 理事長　大橋　謙策　氏	計　60名 病院関係　4 高齢者福祉施設　6 居宅介護支援事業所　7 障害者施設　1 個人　1 地域包括支援センター　8 行政　2 社協　31

(5) 地域福祉実践 シンポジウム	平成25年 2月13日 (水) 13:30 ～17:00	香川国際交流会館（アイパル香川）3階　大会議室	○ブロックの年間の取り組み報告 ○シンポジウム テーマ「香川の地域の絆づくりを促進するために今後必要な取り組みと住民、行政、専門職それぞれの役割と課題」 ①香川県の単独事業の政策評価 ②ブロックの感想や課題 ③ＣＳＷの今後の展開と地域づくり ④住民と行政と専門職の協働のあり方 ⑤今後の課題 シンポジスト： 日本地域福祉研究所 主任研究員　髙橋　信幸　氏 主任研究員　國光登志子　氏 主任研究員　青山登志夫　氏 香川ＣＳＷ実践研究会 代表　越智　和子 コーディネーター、総括： 日本地域福祉研究所 理事長　大橋　謙策氏 ○総括	計　110名 民生児童委員など　９ 病院関係　４ 高齢者福祉施設など　７ 居宅介護支援事業所　18 障害者施設　２ 地域包括支援センター　６ 行政　３ 社協　61

第３章

地域福祉（ＣＳＷ）実践者としての人材養成プログラム

（1）ＳＴＥＰ１　「地域福祉（ＣＳＷ）実践者養成研修」

課題事例をもとに、グループ毎にＣＳＷの視点からのていねいなアセスメントを行い、プランニングをしていく演習形式での研修会を２日間にわたり行いました。この研修会でのプログラムと、演習内容（シート）を掲載します。

参加者には、事前に課題事例を良く読みこんでもらい、個人でワークシート１－１と１－２を記入して当日持参してもらいました。

＜日　程＞

第１日目（９月８日）

10:30～10:45

開会・オリエンテーション

10:45～12:25

講義Ⅰ「地域主権時代における自立生活支援とコミュニティソーシャルワーク」

講師：特定非営利活動法人　日本地域福祉研究所

主任研究員　國光登志子　氏

13:20～14:50

ワークショップⅠ「コミュニティソーシャルワークの視点による個別アセスメント」

専門職のアセスメント力はアセスメントシートに頼り過ぎると弱まりかねない。このワークショップでは、事例を通して気づきを促す研修方法により「家族全体」を捉える視点を養い、その上で「生活の全体性」や「ストレングス」に配慮しながら、「その人らしさ」に着目した支援計画に結びつけていくための個別アセスメント技法を修得する。

ワークショップファシリテーター：

特定非営利活動法人　日本地域福祉研究所

主任研究員　髙橋　信幸　氏

主任研究員　國光登志子　氏

15:00～17:30

ワークショップⅡ「コミュニティソーシャルワークの視点による地域アセスメント１」

地域アセスメントは、コミュニティソーシャルワーク実践の要である。このワークショップでは、地域アセスメントの基本的技法を学んだ上で、地域に埋もれた社会資源の活用の可能性を見いだす視点を養い、その上で社会関係を図式化するソーシャルサポートマップの技法や個別ニーズから地域へのアプローチを展開していくための地域アセスメント技法を修得する。

第２日目（９月９日）

８:45～11:15

ワークショップⅢ「コミュニティソーシャルワークの視点による地域アセスメント２」

コミュニティソーシャルワークでは、個別ニーズを地域ニーズとして捉える視点が重要となる。このワークショップでは、専門職が向き合っている個別ニーズが、地域の中においてその人や家族だけニーズなのか、同様なニーズを持つ人々が他にもいるのかを検証していくための地域アセスメント技法を修得する。

12:00～15:00

ワークショップⅣ「コミュニティソーシャルワーク実践のプランニング」

このワークショップでは、個別アセスメントと地域アセスメントの統合によって個別支援と地域支援を結びつける視点を養い、個別ニーズに即した地域へのアプローチによって新たな社会資源を開発していくプロセスを学び、実践仮説に基づいたコミュニティソーシャルワーク実践のプランニング技法を修得する。

15:10～16:30

講義Ⅱ「養成研修全体を通じての総括」

講師：特定非営利活動法人　日本地域福祉研究所

主任研究員　　髙橋　信幸　氏

16:30

閉会

※

この研修プログラムは、特定非営利活動法人　日本地域福祉研究所が実施する「コミュニティソーシャルワーク実践者養成研修」のプログラムの内容を香川県版で実施したものです。プログラム内容及び以降記載してある事例とシートについては、日本地域福祉研究所の許可を得ず、無断転載・転用することは禁止します。

課題事例の概要

相 談 者

民生委員Ｆ（Ａ世帯居住地区担当）が地区担当の地域包括支援センターに以下のケースで相談に来た。地域包括支援センター職員は他機関と連携してＡ世帯に対応することとした。

支援対象家族

Ａ（妻・72歳）、Ｂ（夫・80歳）、Ｃ（長男・43歳）

現在の状況

Ａは、５年前から慢性リウマリを患っていた。数ヶ月前から急激にリウマチが悪化し、極度の関節痛から家事は全くできない状態となり、自分でトイレや入浴、布団から起き上がることも大変な状態となってしまった。クリニックへは夫の付き添いでタクシーを利用して受診している。これまでの服用に加え注射治療を開始したが、主治医からは薬の効果は個人差があるため、すぐ元の状態に戻れるかはわからないと言われる。夫のＢは、これまで家のことは無頓着で家事は全くできず、定年後は近所付き合いもなく、外出もほとんどせず日がな一日テレビを見るなどして過ごしてきた。大きな病気はなく身体的には元気だが、Ａが病気になった後も、自分が何かしようとしてもこれまで何もしてこなかったため、何をどうすればよいのか分からないでいる。同居の長男Ｃは、以前勤めていたことはあるが、現在は仕事に就かずに家で過ごしている。家のことはＡに任せていてこれまで何もしてこなかった。同居しているが食事以外はＡやＢとは顔を合わせない状態が続いている。

Ａが病気になった後は、Ｂがコンビニやスーパーの惣菜だけは買ってきてくれており、家族の食事はそれでまかなっている。

家　　族

同居家族以外には、市内に長女Ｄ（45歳）がいるが、10年前に離婚し現在は市営住宅で長男Ｍ（15歳）と二人暮らしをしている。Ｍには知的障害があるため特別支援学級に通っている。長女はほとんど休みなくパートの仕事に出かけており、生計をやっと立てている状況。Ｄは自分たちの生活で心身ともに余裕はなく、これまで実家からの金銭的な支援を受けることもあったが、あまり関わることはできない状況となっている。

生 活 歴

Ａは24歳でＢと結婚し、専業主婦として１男１女を育てる。子どもが小さい頃はＰＴＡ活動に参加したり、手が離れてからは婦人会や町内会などの地域活動へも参加してきた。趣味も多彩で、料理教室や裁縫教室など通っていた。もともと明るい性格で、近所付き合いもよくしてきた。家の中のこともほとんど１人でこなしていたが、リウマチが悪化してからは思うように体が動かず何もできない自分に苛立つことも見られるようになった。

Ｂは40年間市外の精密機器メーカーの工場で勤務し、60歳で定年退職後もパート職員として５年間働いていた。仕事を辞めてからは特に趣味も持たずに、テレビや新聞を見たり、パソコンをしたり、散歩する等してほとんどを家で過ごしていた。会社時代の友人とは退職後も唯一つきあいがあったが、市外に暮らしており、年を重ねるとともに市外への外出も身体的に大変になり、今ではつきあいもなくなった。家のこと

や近所づきあいなどは全て妻に任せてきた。ここ数年は昼間から飲酒することもあり、酔っぱらうとAやCに怒鳴ることもあった。

Cは地元の工業高校を卒業後、手先が器用でもの作りが得意だったこともあり製造業の会社に就職した。しかし、職場での人間関係が上手くいかないことを理由に4年で退職する。その当時、不眠などで精神科へ数回通院したこともあったが続かなかった。その後、仕事を探してアルバイトを転々とするも、定着することはなかった。次第に外出することも少なくなり家で過ごす生活が15年続いている。今のままではいけないと思いながらも、現在では特に仕事を探すこともなく、両親の扶養となって同居している。

経済・住宅状況

Bの厚生年金は月額16万円を受給している。日常の金銭管理はこれまでAが行ってきた。Cには収入がないが、必要時にはAから小遣いをもらって過ごしている。住宅は37年前に3LDKの分譲団地をB名義で購入し、すでにローンは返済している。自宅は5階建て団地の3階でエレベーターはない。住居内には手すりなどの設備はない状況。

地域の状況

S市は1960年代半ばまでは畑作中心の農村であったが、近年は住宅都市として発展してきた。外周部の大型団地建設や住宅地の整備に伴い人口は急増したが、現在は横ばい傾向である。人口84,000人、世帯数は36,000世帯。市の高齢化率は24%。

A世帯が住んでいるK地区は、市内中心部から少しはずれた場所にあり、ベッドタウンとして30数年前に開発された。人口11,000人で4,200世帯あり、高齢化率は28%となっており市内の他地区より少し高い水準となっている。その中で、A世帯が住んでいるO団地は、分譲団地として38年前に開発されたが、山を切り崩して整地したため団地周辺は坂道が多い。団地内の人口は近年減少傾向にあり約2,900人で1,350世帯、自治会への加入率は74%の状況。団地内高齢化率は39%と市内でも高く、自治会内や地区民児協でも高齢化が話題となってきているが、自治会内での福祉活動は特に展開されていない。また、団地内には、住民が利用できる集会施設に加え、スーパーマーケット等の商店が数店舗ある。

市内には総合病院、保健福祉事務所、3カ所の地域包括支援センター、2ヶ所の障害者相談支援事業所、4カ所の特別養護老人ホーム、2ヶ所の老人保健施設などの各種介護保険、障害者自立支援事業サービス事業所がある。

市社会福祉協議会では、各種相談事業や生活福祉資金、ボランティアセンター、日常生活自立支援事業など実施している。地区社協の整備推進が現在の支援課題となっている。

相談の経緯

F民生委員とAとはこれまでも自治会などの活動でよく知る中であった。ある日FがA宅へ訪問すると、リウマチで動けなくなったAと、掃除ができておらず散らかった室内や出来合いの食事、洗濯物が山積みになっている光景を目の当たりにする。AもFに対して、自分が何かできる状態ではないことと、BやCが全く家事ができないため、困っていることを打ち明ける。FはA世帯に対して何らかの支援が必要だと感じ、普段からやりとりのある地域包括支援センターへ相談することにした。

CSWの視点による地域アセスメント

ワークシート2（地域の資源を見出す）

	地域の社会資源		
	活用している	あるが活用していない	確認・開発したい
【フォーマル】法律や制度に基づくもの			
【インフォーマル】法律や制度に基づかないもの			
【インフォーマル】民間市場			
地域のストレングス			

	個別ニーズ	同様なニーズの確認方法
A		
B		
C		

ソーシャルサポートマップ

ワークシート3（既存の関係と新たな関係の共有）

CSWの視点によるプランニング①

ワークシート4（考えられる支援方策）

対象	個別支援プランニング	CSWプランニング
A		
B		
C		
組織間連携		

CSWの視点によるプランニング②

ワークシート5（新たな社会資源の開発）

実践のテーマ			
支援目標（予測される効果）	【個別ニーズに対して】	【地域ニーズに対して】	
連携したい機関・人々	【フォーマル】	【インフォーマル】	
準備作業の内容・期間	【時期】	【作業内容】	【担当】
実践内容役割分担	【実践内容】		【担当】
予算と資金調達方法			

【完成したワークシートとポスター　例】

CSWの視点による個別アセスメント

ワークシート1－2（家族全体のアセスメント）

ADL IADL			
生活歴			
職歴・ 社会的役割			
趣味・特技			
交友・近隣			
サービスの 利用状況			
	A	B	C
ストレングス	・明るい性格、多趣味 ・地域活動に瀬局的に参加 ・家事全般ができていた ・声かけさえあれば、ヘルプを伝えることができる ・サービスを受け入れることができる ・自分が何かできる現状でないということを認識している	・まじめ、健康（飲酒を除く） ・自分の役割が認識できている ・パソコン、徒歩 ・食事の買い出しができる ・通院の介助ができる ・年金16万 ・自分が何かしようとは思うが、何をどうすればよいか分からないと認識している	・身体的に健康 ・手先が器用 ・家族と食事は一緒にとっており、そんなに疎遠な関係ではない ・自分が何かしようとは思うが、何をどうすればよいか分からないと認識している
不足情報	・EVのない3階からどのように外出しているか ・リウマチ以外にも病気があるか ・障害者手帳を取得しているか ・Aの収入はあるか ・ひとりで歩行できるか ・室内の段差はどうか ・団地内の友人、近所の人はどこまで協力してくれるか ・娘との関係はどうか ・夫婦関係・親子関係はどうか	・家事を覚えて協力しようとする意欲があるか ・今後の意向 ・娘や息子との関係 ・飲酒の状況（問題行動など） ・夫婦関係	・家事を覚えて協力しようとする意欲があるか ・本人の意向・希望が分からない ・母親の通院の付き添いや日常的な買物をしようとする意欲があるか ・Dとの関係、親子関係 ・精神面の状況 ・AとBを心配しているか

CSWの視点による地域アセスメント

ワークシート2（地域の資源を見出す）

	地域の社会資源		
	活用している	あるが活用していない	確認・開発したい
【フォーマル】 法律や制度に 基づくもの	・クリニック A ・医療保険 A ・精神科 C ・厚生年金 B ・特別支援学級 M	・介護保険サービス A ・就労支援 C ・障害者自立支援 C, M ・総合病院 A ・市社協 A, B	・シルバー人材センター B ・職業訓練 C
【インフォーマル】 法律や制度に 基づかないもの	・民生委員 A ・地域住民による見守り ・訪問活動 A ・団地住民 A	・自治会 B　・友人 B, C ・ボランティアセンター A, B,C ・婦人会 A ・団地住民 B, C ・サロン活動 B、C ・裁縫教室の仲間 A	・料理教室（団地内の） B ・リウマチの会 A ・男性介護者の会 B ・老人クラブ B
【インフォーマル】 民間市場	・スーパー、コンビニ B ・銀行 B ・タクシー A	・介護タクシー A ・アルバイト先 C ・移動販売 A, B,C	・パソコン教室 ・宅配サービス A, B,C ・居酒屋 B
地域の ストレングス	・集会所、自治会がある ・公共施設の充実 ・団地である ・同年代の人が多い ・市の規模の割には、特養4カ所、地域包括3カ所は多い	・自由な時間の方が多い（団地内） ・家庭状況が把握しやすい（団地内） ・民生委員が調整しやすい（団地内） ・団地の空き部屋を活用しやすい（訪問介護・サロンなど）	

	個別ニーズ	同様なニーズの確認方法
A	・家事をしたい ・介護サービスの利用 ・リウマチの緩和 ・家族に家事の役割を担ってほしい ・住環境を整えたい ・友人・近隣のとの人との関わりをもちたい ・外出支援、化粧など	・民生委員が訪問調査（家庭内の困りごと） ・地域包括に相談 ・リウマチ患者会の開催 ・団地内住環境に関するアンケート ・集会所でのお茶会 ・他地区での取り組みを包括や社協にきく
B	・息子、娘親子が心配 ・家事を手伝いたい ・趣味を持ちたい　・他者との交流を持ちたい ・現状を変えたい（安心したい） ・Aのことが心配⇒何とかしてあげたい	・男性の料理教室の開催 ・同世代の男性の会の開催 ・男性介護者の会の開催 ・趣味の会、ボランティア活動などの登録状況を確認
C	・就労支援 ・ひきこもりから脱出したい ・物づくり ・対人関係を築けるようになりたい	・団地内の未就労者の実態調査 ・保健所、福祉事務所へ精神保健相談 ・物づくり教室の開催 ・住宅改修場所調査

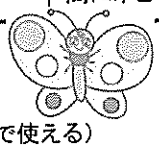
CSWの視点によるプランニング②

ワークシート5（新たな社会資源の開発）

実践のテーマ	いきいき団地お助け隊	
支援目標 （予測される効果）	【個別ニーズに対して】 ・住環境（居住スペース）整備 ・家事援助、受診介助　・お茶会の開催 ・外出支援、同世代交流　・安否確認 ・各教室の開催　・役割の再構築	【地域ニーズに対して】 ・買物支援（宅配、まとめ買いして配る） ・ゴミ出し支援　・掲示板での情報交換 ・coop共済（団地）をつくる ・団地共有スペースの住環境整備
連携したい 機関・人々	【フォーマル】 ・自治会　・婦人会　・警察、消防 ・包括　・老人会　・郵便局 ・学校　・PTA　・行政 ・民生委員　・介護サービス事業所 ・市社協、地区社協　・銀行	【インフォーマル】 ・スーパー　・工務店 ・商店 ・ボランティア団体 ・タクシー会社 ・文化教室

準備作業の内容・期間	【時期】	【作業内容】	【担当】
	9月	いきいき団地お助け隊準備委員会	当事者、若い人
	1月	アンケート実施（問題抽出） アンケート分析（ニーズしぼり込み）	
	4月	団地総会にて問題提起 「いきいき団地お助け隊」提案 ワーキンググループの結成 いきだんお助け隊イメージキャラクター いきだんくん	

実践内容 役割分担	【実践内容】	【担当】
	①広報　①掲示板・チラシの作成、団地内外の情報提供する	①パソコン　B,Cさん
	②家事　②買物、ゴミ出し、受診、外出介助、安否確認	②女性、子ども
	③住環境　③職人や団地内で得意な人が住環境調査、改修する。そうじ、花壇の手入れ、物づくりに関心が強い人	③職人、得意な人
	④催しもの　④定期的に催しものを開催し、交流の場をつくる 課題に応じた催しもの（専門職の講演等）の開催	④関心の高い人、時間にゆとりのある人

予算と資金調達方法	1世帯あたり月100円　集金×1350世帯＝￥135，000 ⇒自治会長が集める （使い道）　※将来的にはボランティアポイント制、通貨（団地内のみで使える） ・事務費　・講演会等専門職への報酬　・外出支援のための車の購入と保険 ・住宅改修（個人部分は2割補助、共用部分は全額） 

プランニングしたことを
広報するポスターを制作

ワークショップの様子

講師の 國光登志子氏の講義

【助言と総括】

特定非営利活動法人日本地域福祉研究所
主任研究員　國光登志子

本研修は開催趣旨に記載されているように、「地域福祉実践の業務に携わっている職員を対象に、コミュニティソーシャルワーク（以下ＣＳＷという）の基礎的な知識と技法を修得し、専門職としてのスキルアップを目的として開催され、44人の参加者を得て２日間にわたり内容の濃い研修となった。アセスメントからプラニングまで４つのワークショップに区切り展開していく演習を通して耳にした参加者の発言等から感じたことを以下に述べる。

１　ＣＳＷの視点における個別アセスメント力の向上へ

（１）　個別アセスメントの確認

ＣＳＷの視点における個別アセスメントは、要支援者の個別ニーズを「求め」と「必要」の一致点として捉えるアプローチが基本である。しかし実態は「求め」に対する精査やアウトカムの見極めが甘かったり、「必要」に対する情報提供や一致点を見出す丁寧なプロセスがどの程度実践されているのか個別事例を検証しながら、より強い一致度に進めていく必要がある。「Ａさんは○○を求めている」、担当者は「Ａさんには△△が必要」と説明し、反対意見も述べられなかったので「一致したもの」と判断し、サービスや支援に結び付けて一件落着となっている実践がまだ多い。要支援者本人の求めと担当者の専門的な角度からの情報提供や説明がスムーズに一致することはまれである。一致の程度も消極的なものから、よく分からないので任せる「一任型」、「諦め型」、試しにやってみようという「お試し型」など多様である。

一致の程度についても、消極的同意からより強い一致へとモニタリングから再アセスメントを進めていかなければインフォーマルサポートへの結び付けも一方的なものになる危険性がある。

（２）家族アセスメントの視点

家族アセスメントの目的は、要支援者に対して家族が自らを犠牲にしてどの程度の支援や協力ができるか見極める古いタイプの家族主義の視点でとらえることでもないし、家族や世帯単位でサービスを定量化するためのものでもない。家族の絆を大切にしながらも，家族ひとり一人が自己実現を目指して生活していくための支援を続け、結果として家族を思いやる気持ちや自発的な家族の繋がりを促進していくなかで、地域における存在感を高めていくことがＣＳＷの家族アセスメントには必要である。近隣から孤立している家族、排除されている家族の課題は、家族の一員による生活のあり様が、「先ずは家族が責任を負うべきである」との考え方から派生しているとすれば、地域アセスメントや福祉教育の課題とも関連付けて考えていかなければならない。

（３）地域アセスメントの課題

ＣＳＷの視点から考えると要支援者・家族が生活している地域社会のアセスメントが必要であることは受講生の大半は理解されていた。人口、高齢化率、地域のフォーマルな社会資源等、公表されているデータには目が向けられていたが、これらの数

値やリストを個々の要支援者の生活にどのように結び付けて考えればいいのか、実感が持てない人もいた。ワークシート２の「地域のストレングス」の欄になると空欄が多くなる。どのような方法でアセスメントするのか、何をキャッチすればいいのか分からないという発言もあり、グループの他のメンバーの発言により気づかされたという意見もあった。地域のストレングスでは、無形の人と人のつながり、動き、変化とそこから得られる安心感、安定感、参加意欲、帰属意識、協力関係などを日々の地域福祉実践活動において常に意図的に情報収集に努める接点を持ち続けていくことが重要である。

2　二日間のＣＳＷ研修修了時の受講生44人のアンケート（香川ＣＳＷ実践研究会作成）から

（１）日頃の実務の進め方を振り返り、ＣＳＷの意義がつかめたプラスの効果

①　日頃の支援に、地域に対するアセスメントの視点が欠けていたことがよくわかった。

②　ケースに対して、本人のニーズや家族の介護力にばかり注目して、それを地域のニーズとして見ていく視点がなかった。

③　家族の生活が何とか立て直せれば、終了としていた自分の支援の考え方が狭いものだったと感じた。

④　地域の社会資源について考えたことはあるが、開発にまで絡めて考えたことがなかった。

⑤　個別支援の意味も分からず、個別支援と集団支援とは全く別のアプローチと考えていたが、個別からＣＳＷにつなげる意味をワークショップを通じて体得できた。

⑥　プラニングにつなげる意味をワークショップを通じて体得できた。

⑦　ワークシートにより、内容が豊富で奥深いプラニングの作成ができるので、アセスメントに活用しやすい。

（２）ＣＳＷの基礎的理解にさらに時間をかける必要があると受け止められる意見

⑧　内容、言葉自体の理解に時間がかかる。解決の多様性に戸惑う。

⑨　事務職と専門職との視点、考え方、捉え方に違いがある。

⑩　ワークショップが続くと、自分の頭の中で整理ができていない場面もあった。

⑪　ソーシャルサポートマップを整理して書くのが難しかった。

⑫　ソーシャルサポートマップ作成の意味が理解できなかった。

⑬　ワークシート記入の際、何を書くのか講師の指示がよく理解できなかった。

（３）ＣＳＷ研修の進め方、時間配分、等に関する意見

⑭　ワークショップに費やす時間が足りなかった。

⑮　参加者の他の地域の取り組み、社会資源の違い、日ごろの工夫など情報交換の時間をより多く取ってほしい。

⑮　地域資源を開発する準備の部分を丁寧に指導して欲しかった。

⑯　後半に行くにつれ難しくなり、ワークシートの後半は書けなかった。

⑰　それぞれの専門性を活かした視点をもっと聞きたかった。

⑱　ワークショップの成果は、他のグループ全ての分を共有したかった。

以上の受講生の意見は、今後の参考にしていきたい。

養成研修参加者のＣＳＷ実践スキルに関する自己評価をみる
－９月ＣＳＷ実践者養成研修参加者へのアンケートから－

特定非営利活動法人日本地域福祉研究所
主任研究員　髙橋　信幸

平成24年９月８・９日両日、香川県坂出市の休暇村讃岐五色台で行われた香川ＣＳＷ実践研究会のＣＳＷ実践者養成研修は、当研究所の通例のＣＳＷ実践者養成研修のカリキュラムを用い、あらかじめ提示されていた事例に基づいて「個別アセスメント」「地域アセスメント」「実践のプランニング」をテーマとした連続する４つのワークショップを中心に展開された。そして、二日間のかなりハードともいえる研修の最後に、30項目の質問からなる「コミュニティソーシャルワーク実践に関するスキルについてのアンケート」を記入してもらい、46人（２日間の修了者は44名）の受講生全員から回答を得た。

このアンケートの質問構成自体は、当研究所の理事であり、現在、教員として日本社会事業大学に籍を置く菱沼幹男の『コミュニティソーシャルワークを展開するスキルと専門職養成』(2008．12文京学院大学人間学部研究紀要）から、本人の了解のもとに借用したものであるが、社会福祉協議会職員を中心としたＣＳＷ実践者養成研修終了直後の受講生が、自らのＣＳＷ実践スキルをどのように振り返り、自己評価したのか、非常に興味深い結果を示している。またこの結果は単にそれのみではなく、ＣＳＷの実践者として今後一層努力すべきことは何なのかを示すものともなっている。

受講生（回答者）の簡単な基本属性は表１のとおりであった。30代・40代で参加者の約７割を占め、平均年齢は女性41.54歳、男性42.45歳で、県内の社会福祉協議会に籍を置く者が６割以上、次いで福祉施設に働く者が26.1％を占めた。役職名では「事務職員」とする者が過半数を占めているが、これは、日常の仕事が事務というよりは、雇用形態として事務職として入職したということであり、この研修への当初の参加資格からみて、実際にはほとんどの人が具体的な相談援助業務を担当しているとみられる。

表１　受講生の基本属性

		人数	%
性別	女性	26	56.5
	男性	20	43.5
年齢	20代	3	6.5
	30代	16	34.8
	40代	16	34.8
	50代	9	19.6
	不明	2	4.3
勤務機関	社会福祉協議会	29	63.0
	地域包括支援センター	4	8.7
	福祉施設	12	26.1
	医療機関	1	2.2

		人数	%
役職名	社会福祉士	4	8.7
	介護支援専門員	5	10.9
	事務職員	15	32.6
	事務職員（管理職）	12	26.1
	保健師	1	2.2
	ＭＳＷ	1	2.2
	ケアワーカー	1	2.2
	地域福祉ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ	1	2.2
	専門員・相談員	6	13.0

アンケートの質問項目及び各項目の「平均点」は表２とおりであるが、質問の30項目は大きくは次の７つの分野に分類される。

Ⅰ　個別アセスメント　質問１～６
Ⅱ　地域アセスメント　質問７～13
Ⅲ　ネットワーク　質問14～23
Ⅳ　サービス開発　質問24・25
Ⅴ　モニタリング　質問26
Ⅵ　福祉教育　質問27
Ⅶ　専門職養成　質問28～30

また、各項目の「平均点」とは、各質問について、「ほとんどできていない」＝1点、「あまりできていない」＝2点、「ややできている」＝3点、「かなりできている」＝4点として平均点を求めたものであり、2点以下の項目は“できていない”事柄、2点を超える項目は“できている”事柄と自己評価されたものとみなすことができる。

表2　質問への回答の平均点

		質　　問	平均点
Ⅰ	1	当事者の持っている悩み、能力をアセスメントしている。	2.37
	2	家族による当事者への支援の状況をアセスメントしている。	2.33
	3	家族以外のインフォーマルな人々による支援状況をアセスメントしている。	1.95
	4	当事者だけでなく家族全体の生活課題をアセスメントしている。	1.98
	5	当事者と近隣住民の関係をアセスメントしている。	1.76
	6	当事者の社会参加や地域での交流の状況をアセスメントしている。	1.83
Ⅱ	7	地域生活支援に活用できる社会資源を把握している。	2.31
	8	個別事例への対応の際に、地域の同様なニーズの把握を行っている。	1.65
	9	職場内の業務として地域のニーズ把握を行っている。	1.85
	10	地域の福祉ニーズを既存の統計データの分析で量的に把握している。	1.61
	11	地域の福祉ニーズをアンケート調査で量的に把握している。	1.59
	12	地域の福祉ニーズを戸別訪問で質的に把握している。	1.28
	13	地域の福祉ニーズを住民座談会で質的に把握している。	1.51
Ⅲ	14	職場内で地域に関する情報を記録し共有している。	2.18
	15	関係機関内で地域に関する情報を共有している。	1.98
	16	個別事例の支援のためにネットワーク会議（地域ケア会議）を行っている。	1.87
	17	当事者の組織化に向けた支援を行っている。	1.65
	18	地域住民との連絡調整を記録している。	2.22
	19	支援ネットワーク形成に必要な関係機関への働きかけを行っている。	1.88
	20	担当ケースの地域の自治会長との関係形成に努めている。	1.85
	21	担当ケースの地域の民生委員・児童委員との関係形成に努めている。	2.44
	22	担当ケースの地域の近隣住民との連絡調整に努めている。	1.93
	23	職場内でチームアプローチが行われている。	2.32
Ⅳ	24	職場内でサービス開発に向けた話し合いをしている。	2.17
	25	新しいサービスや事業を開発するため他機関と連携し検討している。	2.05
Ⅴ	26	当事者や地域住民の声を反映させたサービスの見直しを行っている。	1.95
Ⅵ	27	地域住民が福祉課題を学習する機会を作っている。	2.05
Ⅶ	28	職場内外でスキル向上のための研修を受けている（行っている）。	2.68
	29	職場内でスーパービジョンを受けている（行っている）。	1.66
	30	職場外からコンサルテーションを受けている（行っている）。	1.69

この結果、平均点が比較的高かったのは次の項目であった。

1．職場内外でスキル向上のための研修を受けている（行っている）。　2.68
2．担当ケースの地域の民生委員・児童委員との関係形成に努めている。　2.44
3．当事者の持っている悩み、能力をアセスメントしている。　2.37
4．家族による当事者への支援の状況をアセスメントしている。　2.33
5．職場内でチームアプローチが行われている。　2.32

また、平均点が比較的低かったのは次の項目であった。

1．地域の福祉ニーズを戸別訪問で質的に把握している。　1.28
2．地域の福祉ニーズを住民座談会で質的に把握している。　1.51
3．地域の福祉ニーズをアンケート調査で量的に把握している。　1.59
4．地域の福祉ニーズを既存の統計データの分析で量的に把握している。　1.61
5．個別事例への対応の際に、地域の同様なニーズの把握を行っている。　1.65
5．当事者の組織化に向けた支援を行っている。　1.65

研修参加者へのアンケートであるので、第28項目の研修受講の平均点が高いのは当然ではあるが、他の４項目は、個別アセスメントの分野とネットワーク形成の分野である。それに対して平均点が比較的低い項目は、当事者の組織化への支援を除いてすべての項目が地域アセスメントの分野であるのが特徴的である。ここに、ＣＳＷの視点から見た今回の受講生のソーシャルワーカーとしての得手・不得手が明確にあらわされている。ＣＳＷ実践は個別ニーズを地域ニーズとして捉えかえして、個別課題を持つ住民・家族に対して有効であると同時に、他の地域住民に対しても有効な支援策となるプランニングを考え、実践していくところが大きな特徴の一つである。しかし、ここに示されている結果は、地域福祉（活動）計画策定時などの特別な時期を除いては広範な地域ニーズの把握のための行動はほとんどなされておらず、わずかに経験的に「地域生活支援に活用できる社会資源を把握している」（第７項目、2.31点）のみということなのであろうか。このままでは個々のケースに対応する幅の狭いケースワークに閉じこもってしまう危険性がある。

またネットワーク形成についても、「民生・児童委員との関係形成には努めている」（第21項目、2.44点）ものの、他の住民や専門職・専門機関等との多職種連携はかなり弱いと判断せざるを得ない。

おそらく、こうした地域アセスメントやネットワーク形成の重要性については、研修受講者は十二分に自覚しているはずである。今後のスキルアップとコミュニティソーシャルワーク実践のなかで、こうした点を是非とも克服されるよう期待したい。

（２）ＳＴＥＰ２　「地域福祉（ＣＳＷ）実践者スキルアップ研修」

ＳＴＥＰ１の受講者と、昨年度の「地域福祉（ＣＳＷ）実践者養成研修」受講者を対象にＳＴＥＰ２としてスキルアップ研修を開催しました。

参加者全員事前に、自分の関わる事例をもとにＳＴＥＰ１で学んだＣＳＷ実践のプランニングを行ったものをワークシートに記入して、提出いただきました。

参加者６、７人をひとグループとしてグループ内で各人の提出したワークシートと事例を共有し、日本地域福祉研究所の先生方のご指導のもと事例検討と『地域ケア会議』を想定しての、互いへのコンサルテーションを行いました。具体的な事例をもとに、ＣＳＷの視点でのプランニングの演習を行いました。

＜日　程＞

平成24年11月18日(日)

９:00～９:30　開会・オリエンテーション

９:30～10:30　全体会　事例発表　２事例

【発表者】

高齢者施設　介護支援専門員

（事例１）・高齢で重度の認知症
・身体機能低下の母親と子ども２人の家族
・子どものうちひとりは無職で、母親の年金搾取やネグレクト等の虐待あり
・現在の住所に住民票がなく、行政や地域の支援が受けられにくかった状況

社会福祉協議会　庶務・相談・権利擁護グループ

（事例２）・高齢で認知症があり判断力が低下している母親と知的障害、精神障害のある子ども
・子どもは、就職歴はあるが続かない。就労も含め、日中の居場所がない
・家族の金銭管理が難しい上、よからぬ者が家に出入りしていても断れない
・同居以外の家族はいるが頼れない状況

○司会：特定非営利活動法人　日本地域福祉研究所
主任研究員　髙橋　信幸　氏

○コメンテーター：
特定非営利活動法人　日本地域福祉研究所
主任研究員　青山登志夫　氏
主任研究員　國光登志子　氏

10:45～14:45　グループコンサルテーション

グループ内で参加者が持ち寄った事例をもとに『地域ケア会議』を想定しての意見交換を行う。

15:00～16:30　総括シンポジウム

○司会：青山登志夫　氏

○シンポジスト：髙橋　信幸　氏

國光登志子　氏

越智　和子（香川ＣＳＷ実践研究会代表）

社会福祉協議会職員による
事例発表

グループコンサルテーションの様子

シンポジウムの様子

【助言と総括】

地域福祉（ＣＳＷ）実践者スキルアップ研修から

國光登志子

本研修は今年度９月に実施されたＣＳＷ実践者養成研修受講者または23年度の受講者を対象に、自身が携わるフィールドでの実践事例を基にアセスメントを行い、プランを立てた事例を事前に提出し、参加者同士の意見交換やコンサルテーションを通してスキルアップを図ることを目的として開催され19名の参加を得た。スキルアップ研修受講者だけあって、提出されたＣＳＷの視点から立てたプランは、実践事例を背景としているだけに、研修の為のペーパーワークに留めず、実際にスタートさせ、チエックを経て継続・発展させなければならない課題が盛りだくさん含まれていた。

当該事例をブロックや圏域内でＣＳＷの継続事例として、実践⇒検証⇒見直しを繰り返し、半年後、１年後の次のスキルアック研修で報告され、さらに深い学習へと繋がることを期待する。

提出事例のプラニング例

① 若い障害者がいつでも自由に出入りできる場づくり（２件）
② 高齢障害に関係なく、誰でも気軽に立ち寄れる食堂付き毎日型サロン（２件）
③ 集会所を活用して外出しにくい人のサロンを作る
④ マンションの集会所を利用してサロンを開設する
⑤ 市営団地でうつ病のある人のいきいきサロンを作る
⑥ 地域で孤立している精神障害者を巻き込んだ見守り隊
⑦ 認知症サポートボランテイア団体の創設（外出支援、介護者不在時の見守り、安否確認）
⑧ 老親を介護している稼働年齢層の介護者に対する就労支援
⑨ 老朽化した２棟の賃貸住宅に住んでいる２４世帯がそれぞれ課題を有しているが、この地区を「助け合いのできる、笑顔で暮らせる地区にしていく会」
⑩ 軽費老人ホームに入所している90代の高齢者夫婦と精神疾患の長男の３人が、世帯主の運転免許証返還後も３人それぞれが社会活動を継続していくための支援を開始するための住民座談会の開催
⑪ 認知症になっても一人で安心して暮らせる地域づくり
⑫ 境界性人格障害者を福祉のアンテナ機能で専門家につなげて生活改善を図る連絡協議会の立ち上げ
⑬ 30年前にできた戸建団地〈200戸〉における高齢化、認知症、買物支援、介護予防策を展開するための気軽に集えるサロンづくり
⑭ 高齢の親と生活する精神障害の子供の就労を実現する地域のサポートづくり
⑮ 要介護人工透析患者の安全で安価な通院確保を通して、地域の交通弱者を無くすＮＰＯ活動
⑯ 40代、50代の高次脳機能障害、知的障害、精神疾患を有している人が複数いる世帯のキイパーソン不在をカバーできる地域支援「見守り・お助け隊」立ち上げの計画

新たな社会資源を創出するソーシャルアクションの力を身に付けよう
ー地域福祉（ＣＳＷ）実践者スキルアップ研修からー

髙橋　信幸

平成23年度とその前年度のＣＳＷ実践者養成研修に参加した受講者を対象とした11月のスキルアップ研修には19人が参加し、各々の実践現場から事前に提出して持ち寄った実践事例について、最初に二人の参加者が全体会で発表し、質疑討論の後、三つのグループに分かれたゼミナール形式で他の17人が提出した事例のカンファレンスとコンサルテーションが行われた。この形式はただ単に自分の事例発表が終わればおしまいということではなく、いわばグループ・カンファレンスとして全員で意見を述べ合い、互いにより良い事例解決への取組み方を見出していくという手法である。そうした中で感じたことを２、３指摘しておきたい。

一つは、ＣＳＷ実践における、こうした事例検討の繰り返しの重要性である。医療の専門職養成と比べれば歴然としているが、福祉の専門職養成では実際の臨床例に数多く触れたり、実習したりする機会が極めて少ない。理念や理論は勿論大切ではあるが、それらを基礎として実際の具体的な課題にどのように向き合うのかは、一つとして同じものはないなかで、可能な限り多くの事例を体験し、その中から普遍的な方法を身に付けていく以外にはない。そうした意味で、様々な機会をとらえて初級的なものから上級的な難しいものまで、段階を追ったスキルアップ研修をカリキュラム化していく必要性が高いであろうと思う。

二つめとしては、おそらくはそうした訓練の不足も影響して、提出された実践事例のかなりの支援計画において、地域課題との結びつきが弱かったり、予定調和的に「サロン」活動に収斂したりする例が見られたことである。これまでのソーシャルワークは、しばしば既存の制度やサービスにいかにしてサービス利用者を“はめ込む”か、適合させるかが中心であった。ワーカーもそれが自分の仕事であると考えてきた。しかしＣＳＷの考え方はそうではない。ＣＳＷは、ストレングスの視点を持って、個別課題をいかにして地域課題につなげて支援計画をつくるのか、その時に適切な制度・サービスが欠けていれば、いかにしてそうした不完全な社会資源を改善し、或いは適切なものとして開発するのか、そうしたソーシャルアクションを不可欠のものとしている。

そして三点目として、こうした養成研修の修了者を、ＣＳＷの専門職として各市町社協や福祉施設等に配置し、実践していく仕組みを是非とも実現していきたい。香川県では他の地方に先駆けて、ＣＳＷ実践者養成研修修了者を中心とした実践研究会が組織され具体的に事業が展開されてきている。しかし、各市町の足元を見てみると、地域福祉を中心的にコーディネートする専門職として、ＣＳＷが財政的にも裏打ちされて配置されているとは言い難い。ＣＳＷが活きる地域福祉実践を展開することこそ、これからの地域福祉発展の方向性である。

ケースワークやケアマネジメントを超えるＣＳＷ実践が香川のいたるところで展開され、地域福祉の充実が図られることを願ってやまない。

地域福祉（ＣＳＷ）実践者スキルアップ研修から

特定非営利活動法人日本地域福祉研究所
主任研究員　青山登志夫

今回のスキルアップ研修で提出された事前課題レポートを地域アセスメントにおける「地域の社会資源」の視点から総括してみたいと思います。

コミュニティソーシャルワークにおける地域アセスメントは、「（要支援者の）地域自立生活を支援し実現するための個別問題を含め地域住民がどのような福祉ニーズを持っているかを把握し、解決すべき問題を明確化する」ことを目的にしています。

さらに、「地域社会の特性、社会資源の状況、生活ニーズ」を把握し、地域が持つ力（ストレングス）を見出し、その力を活かした課題解決するための実践＝新たな社会資源づくりのプラニングにつなぐ重要なプロセスとしています。このプロセスがコミュニティソーシャルワークの特徴の一つといえるでしょう。

提出された課題レポートのワークシート２「地域の資源を見出す」において、要支援者によって把握している社会資源は様々ですが、福祉・医療・保健分野のフォーマルな社会資源の把握はどのレポートもしっかりとできています。ただ、活用可能な社会資源を含め把握している社会資源が福祉・医療・保健分野にとどまっているレポートも少なからずありました。本人の地域生活全体を支える公的な社会サービス、例えば、住宅・教育・法律・交通・産業振興・雇用・防災などの幅広い分野の把握が必要で、今後の日常業務において取り組んでほしいものです。

インフォーマルな社会資源では、家族・親族、ボランティアや近隣住民、当事者団体、自治会・町内会など多様な人・組織は把握されており、特に社会福祉協議会や地域包括支援センターからの参加者は日常業務の必要性から、自らの実践フィールド内の社会資源は的確に把握していました。そのうえで、要支援者の経済的な状況もありますが、コンビニ・ファミレス・商店などの食事や食材の宅配状況、福祉事業に参入している企業の安否確認や送迎サービス状況など民間市場の最新情報を蓄積することが、より厚みのある支援につながると思います。

要支援者や家族の個別アセスメントから浮き彫りにされた生活課題は、既存の社会資源で対応できるとは限りません。公的な制度の狭間にある課題や既存制度では支援しきれない課題に対して、新たな社会資源の創設・開発に取り組むことが求められています。

コミュニティソーシャルワークにおける社会資源の把握の特徴は、要支援者の豊かな地域自立生活を支援する「新たな支え合い活動」を創り上げることであり、このプロセツで「開発したい」社会資源を数多く考えることにあります。つまり、個別アセスメントで取り上げた課題解決のための実践仮説を設定し、次のプランニング「新たな社会資源の開発」に至るプロセスとして位置付けています。地域の持つ力（ストレングス）で「開発したい」社会資源を創ろうとする視点を重要視しています。

課題レポートの中には、インフォーマルな社会資源において数多く記載さているレポートがあり、高齢者・障害者の居場所や働く場づくりと見守りネットワークづくりが代表的な社会資源としてあげられていました。しかし、フォーマルな社会資源での「開発したい」ものが少なく、既存の公的な制度への改善や新たな施策提言的なアイデアに乏しく、地域を基盤とするソーシャルワーク実践における「ソーシャルアクショ

ン」が今後の課題であると指摘しておきます。

最後に、コミュニティソーシャルワークにおける地域アセスメントは、①活用可能な社会資源を探す、②個人ニーズが地域ニーズであることを検証する、③ニーズの傾向や動向の分析する、④地域状況を伝える資料として活用する、⑤住民活動の実現と可能性を探る、⑥新規事業を提案する、⑦理想的な「まち」に近づける必要条件を探ることに意義があり、地域福祉の推進に関わる団体や専門職は日常的な業務において、地域社会の社会資源化に取り組むことが求められています。

（３）地域福祉（ＣＳＷ）実践者養成研修全体の総評

國光登志子

平成24年度香川県において取り組まれた「一人暮らし高齢者等対策事業及び地域の絆づくり促進事業」は、香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会の力添えも得て、集中的・重層的に県内６ブロックで取組みが行われた。とりわけ地域福祉活動の中核となる①リーダー養成、②地域支え合いアドバイザー養成・派遣、③ＣＳＷ実践者養成　④ＣＳＷ実践者スキルアップ研修等は、香川県全体にコミュニテイソーシャルワークの視点を浸透させ、実践的取り組みの上に立ったワーカーの資質向上により、居場所づくり拠点の立ち上げ、継続的住民活動の支援へと成果が見えてきた。このような県をあげての重点的な取り組みによる成果が、途切れることなく発展するために各種研修のアウトカム評価を提案したい。

１　ＣＳＷ実践者養成研修受講者の多様な動機

集合型の人材養成研修は、一定数の受講者を集めて、カリキュラムに沿って講義と演習を組み合わせて行うパターンが一般的である。受講者の要件としては、ＣＳＷ実践者養成研修のように「地域福祉実践に携わって３年以上の実務経験者」となっているが、参加者の状況からみると、一つには「地域福祉実践」の幅の広さがある。ＣＳＷの実践に携わっているが壁にぶつかり解決策を見出すことが差し迫っている人、ＣＳＷのねらいを理解して実践活動に参加したいと願っている人、何となくこれからはＣＳＷの重要性が増してくることを想定してこの機会に知識を学びたいと考えた人、県内の各地から参加するので、参考になる情報を仕入れたい人など様々である。このように受講動機が異なる参加者が研修により主催者のねらいとする成果を得るためには、受講要件の絞り込みか、演習等の場面で異なるコースを設定するなどの工夫が必要である。

今年度のＣＳＷの展開においては、基礎編はＣＳＷの基本プロセスに沿って個別アセスメント⇒地域アセスメント⇒プラニングと進めたが、前半での理解が不十分なまま後半に入ると、ついていけなくなりワークの参加度が低下した参加者がいたことも終了時アンケートから発見できた。このような事態を避けるためには、基礎編を一度に連続して学ぶメリットとデメリットを検討する余地がある。前半と後半の間に復習をしたり地元の先輩から補習をうけたりする自己学習の機会を経て後半に入ることも一つの提案である。

２　グループワークのスキルアップ

グループワークでは個人ワークの後に討議や意見交換、パネル作成など組み合わせて採り入れた。プラニング等のディスカッションにおいては、メンバーの積極的な参加の下で、発想の転換や異なった意見を活発に出し合うことが基本であるが、ともすると経験主義に基づく意見に終始しがちである。グループワークを活性化するためには、司会者の進行と参加者の協力が欠かせない。発言要旨の明確化や異なった意見を出しやすく促す会議の司会力アップは、ＣＳＷの実践活動に会議は欠かせないことからも、スキルアップを図っていく必要性を感じた。

第４章
各ブロック年間の取り組み事例

事例１……大川ブロック

事例２……小豆ブロック

事例３……高松ブロック

事例４……中讃東ブロック

事例５……中讃西ブロック

事例６……三観ブロック

（1）ブロック圏域について

香川ＣＳＷ実践研究会では、平成23年度から、全体での研修会に加えて、県内を６ブロック圏域に分けての研修会を行っています。地域の関係者同士が顔の見える関係をつくり、ネットワークを築いていくことをねらい、23年度に引き続いて、24年度も継続的な取り組みを行ってきました。圏域設定については以下のとおりに設定しています。

ブロック（圏域）	市　町　名
大　川	さぬき市、東かがわ市
小　豆	土庄町、小豆島町
高　松	高松市、三木町、直島町
中讃東	坂出市、宇多津町、綾川町
中讃西	丸亀市、善通寺市、琴平町、多度津町、まんのう町
三　観	観音寺市、三豊市

（2）取り組み事例を読むにあたって

各ブロックでの１年間の取り組みの内容とプロセスを報告しています。ここでは、コミュニティソーシャルワークを展開していくために、ブロックでリーダーとなって取り組みを考え、しかけを行ってきたワーカー達が、何をねらって、仮説を立て（適切なアセスメントと分析が必要）、どのようなプログラムを選択して解決へ近づこうとしたのか、また、その過程で「課題や壁」になったことや気づいたことは何かについて詳しく書いてあります。ワーカー達自身がこの過程を振り返り、キーワードを見つけ、図式化して「見える化」することで、ブロック内で自分たちの取り組みの成果や課題の共有を図ることができました。

時に、プランとして練って実施したことでも、そのとおりに展開せず予想と違った結果になることもあります。それでも、そのつまずきの原因を振り返り、ワーカーの反省や感想として残しておくことは、今後の活動の展開にフィードバックするうえでも欠かせないことです。

また、取り組みを行っていく中で、ワーカーが自身の所属する組織の上司や同僚の合意や支援を得ていくための過程や関係者を少しずつ広げて巻き込んでいく過程についても、その手法や苦労について注目していただければと思います。

一年で達成できた成果は大きくはなくとも、記録化していくことが今後のアクションを決めたり、見直しを図っていく上での判断根拠となることは間違いありません。そういう意味でも、ブロックの取り組みを記録することは非常に重要な意味を持っています。

（事例の報告の仕方）

○仮説とそれをもとにした３つの目標の設定

取り組むに当たって、まず、大くくりでの仮説を立て、徐々に具体的な仮説を立てていくことになります。いろいろな仮説が思い浮かぶ中、地域の状況や社会資源などの一次情報をきちんとつかみ、気づきの蓄積をしていく中でいくつかを選ぶことが重要です。その選択した仮説をもとにした目標を立て、その検証を行っていくことが課題解決をしていく上で非常に重要になります。

それぞれのブロックの仮説をもとに、タスク・ゴール、プロセス・ゴール、リレーションシップ・ゴールの３つの目標を立てました。この３つの目標は、取り組み作業の基準となるものであり、また同時に取り組みの評価視点にもなります。

タスク・ゴール	具体的なニーズがプログラムの実施により、どの程度充足できたかに関わる目標
プロセス・ゴール	課題解決に関わる関係者や地域住民の意識や態度が変化してきたかに関わる目標
リレーションシップ・ゴール	地域住民や関係団体、行政と住民組織関係性、関係機関・団体との関係性の変化に関わる目標

○PDCAサイクルを重視

ＰＬＡＮ（計画）、ＤＯ（実行）、ＣＨＥＣＫ（評価）、ＡＣＴＩＯＮ（改善）の視点を持って取り組みを行っています。コミュニティソーシャルワーク実践に向けての具体的なプログラムを選択し実行している時に、うまく進めていくことに目が行きすぎるあまり「目的」が「プログラムを実行すること」になってしまいがちになることを防ぐためです。このサイクルを意識することで、本来の達成したい目標を常に思い出せるようにして欲しいのです。

○行動したことは記録する

仮説を立て、自分たちの行った行動が正しいのかどうかを他の人と共有するためには、記録にきちんと落としていくことが重要です。

記録は、ワーカー自身が自己の実践を点検する資料となります。また、行動や実践につまづいた時には、その原因や根拠を探る材料にもなります。

正確な記録は、スーパービジョンを受ける時や事例検討を行う時の資料にもなったり、ワーカーの業務を第三者に理解してもらうための資料にもなります。

記録をするということがこういった意義と必要性をもっていることをワーカーが念頭に置いておく必要があります。

○「ワーカーの意図・想い」という主観的事柄も記入

ＤＯ（実行）の部分は、経過という客観的事実のみならず、「ワーカーの意図・想いなど」という主観的事柄も区別して記入するようにしています。この部分に、ワーカーが取り組みを行っていく上で学び、気づいたことが表れてきています。この「気づき」をもとに、取り組みを再評価したり、修正をしながらふり返りを行い、今後の取り組みに生かしていくことができるのです。

事例１　大川ブロック

事例タイトル

「地域福祉を支える住民と専門職との連携」
～顔の見えるネットワークづくり～

事　例　概　要

平成24年１月の大川ブロック研修会及び６月の県内全体研修会でのグループワークにおいて、民生児童委員、福祉委員など地域の代表や専門機関・専門職が各々の現在抱えている課題や、知りたい情報などを話し合った。現状として「互いの活動が見えていない。」「皆で集い、話し合う機会が必要。」「自らの強みで、他の弱みを補うことができる。」等の声が多く聞かれた。そこで大川ブロックとしては、これからの地域福祉の推進において必要不可欠である連携、絆づくりを目標に活動していこうと気持ちがひとつになった。

住民数に対して、福祉専門職の人数は少なく、住民の声なきニーズを拾い上げるためには、民生児童委員、福祉委員、自治会長等（以下、「地域の福祉専門職」という。）と、専門機関・専門職との連携が必要不可欠である。相互が連携することで、専門機関・専門職としての役割機能が活かされ、福祉課題を抱えている住民に対して、総合的なサポートが可能になると考えた。

その第一歩として、地域住民と地域の福祉専門職の間に現在すでに築かれている信頼関係に、更に地域の福祉専門職と専門機関・専門職が連携することによって、今より住みやすい地域をつくっていけるのではないかと考えた。相互が連携することにより、住民に対して総合的なサポートが可能になる。そして、一つの事例がその他多くの住民のニーズに応えられるのではないかと、相互の連携を図るひとつのツールとして、地域の福祉専門職が第一次相談受付時に使用できる、相談受付票を共に話し合い作り上げることにした。

地域の福祉専門職が住民からの情報をより正確にキャッチし、専門機関・専門職につなげる必要があることから、最低限必要な情報をキャッチできるように、地域の福祉専門職が使いやすい受付票を作成し、ブロック内での情報収集能力の底上げを図り、地域住民の役に立てる専門機関・専門職となることを目指した。

キ　ー　ワ　ー　ド

住民視点　地域の福祉専門職　専門機関・専門職　ストレングス　連携・協力　受付票

地　域　デ　ー　タ

ますます少子高齢化が進み、住民相互のつながりが薄れ地域課題の複雑化が危惧されている大川ブロック。専門職も少なく、住民との連携無くしては地域福祉の推進は困難な地域。そのような中で、地域を主体とする住民活動や隣近所との付き合いがまだまだ生きている地域環境において、いつまでも安心・安全に住み慣れた地域で暮ら

し続けたいと切に願い、「自分たちのまちは自分たちの力で」「地域のみんなで協力して」との声が多く聞かれている。

項目	さぬき市	東かがわ市
人口	52,639	34,171
高齢化率（%）	29.84	34.3
自治会数	383	188
民生児童委員	115	90
専門相談機関（居宅・包括）	25	16
生活支援センター	2	1

PLAN

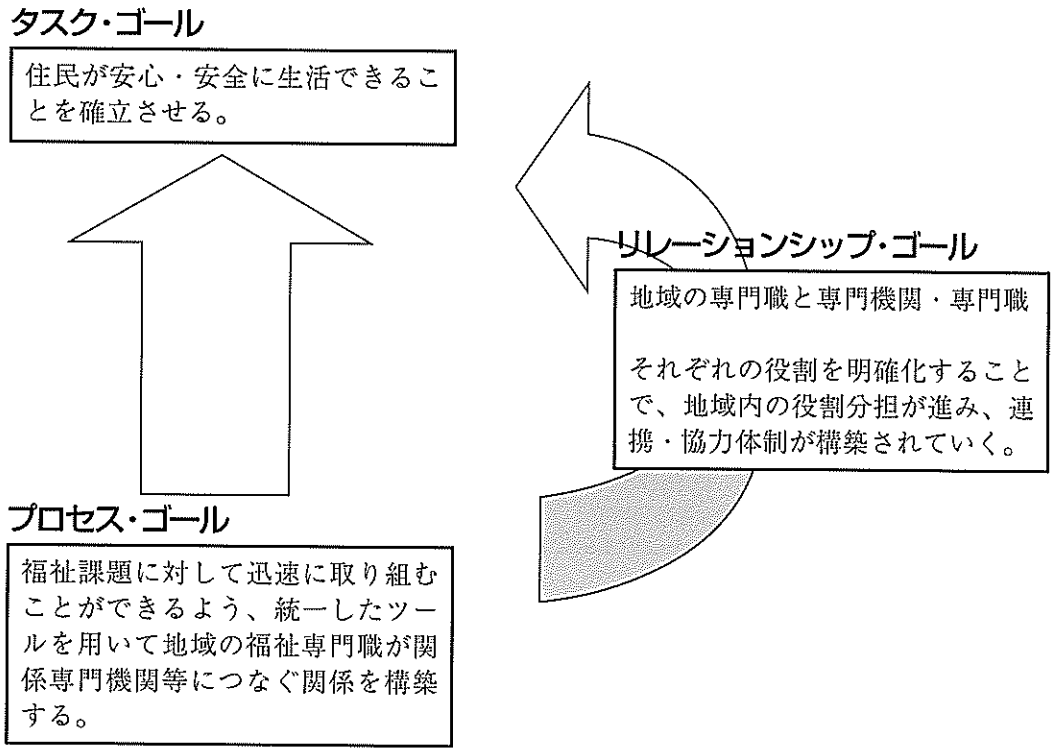
仮説と目標

[仮説]

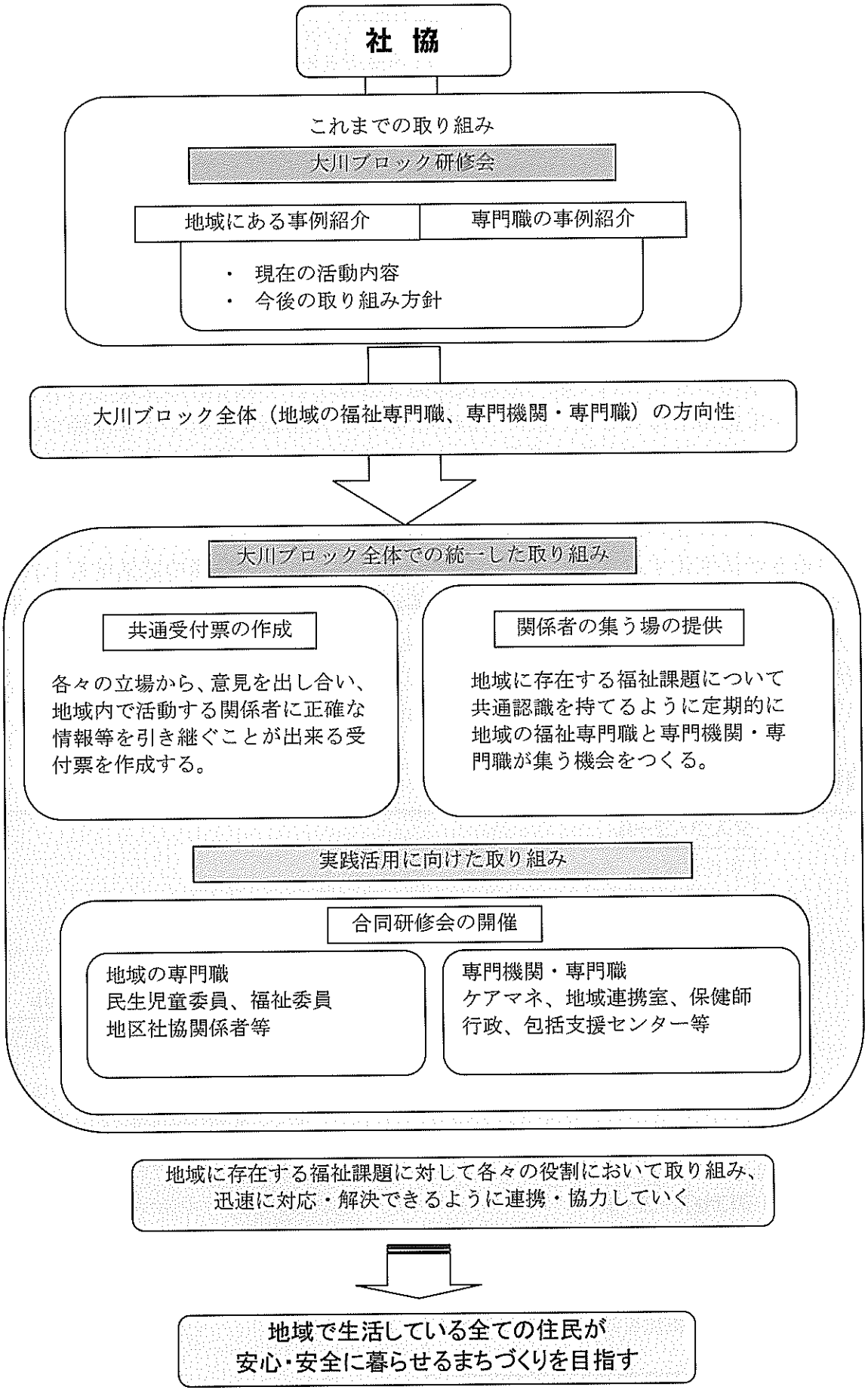
地域の福祉専門職と専門機関・専門職との連携・協力を進めるためのひとつのツールとして、大川ブロック内で統一した受付票を作成し、それぞれの立場でのストレングスを用いて活用することで、互いの強みを活かした情報を共有できる関係づくりが構築され、地域の福祉専門職の活動スキルが高まるとともに適切な情報収集活動が実践でき、その情報を専門機関・専門職につなぐことで福祉課題へのスムースな対応が可能となるのではないか。

この動きが活性化することにより、地域の専門職並びに専門職の認知度も上がり、モチベーション向上の機会となることで、各地域における地域の専門職並びに専門機関・専門職のスキルアップや関係者間の連携の強化が図れるのではないか。さらには、この取り組みが住民に認知されることで、“だれもが安心・安全に生活できるまちづくり”に繋がることが期待できるのではないか。

[目標]



プロセスチャート


社 協
これまでの取り組み
大川ブロック研修会
地域にある事例紹介
専門職の事例紹介
・ 現在の活動内容
・ 今後の取り組み方針
大川ブロック全体（地域の福祉専門職、専門機関・専門職）の方向性
大川ブロック全体での統一した取り組み
共通受付票の作成
各々の立場から、意見を出し合い、地域内で活動する関係者に正確な情報等を引き継ぐことが出来る受付票を作成する。
関係者の集う場の提供
地域に存在する福祉課題について共通認識を持てるように定期的に地域の福祉専門職と専門機関・専門職が集う機会をつくる。
実践活用に向けた取り組み
合同研修会の開催
地域の専門職
民生児童委員、福祉委員
地区社協関係者等
専門機関・専門職
ケアマネ、地域連携室、保健師
行政、包括支援センター等
地域に存在する福祉課題に対して各々の役割において取り組み、迅速に対応・解決できるように連携・協力していく
地域で生活している全ての住民が
安心・安全に暮らせるまちづくりを目指す

DO

大川ブロックＣＳＷの方向性を描く　～課題の発掘・協力体制の構築～

（第１期）

年月日	経過（主な事柄）	ワーカーの関わり（働きかけ）	ワーカーの意図・想い
24. 1. 22	大川ブロックにおいて初の地域の福祉専門職と専門機関専門職と合同での研修会を開催する。 ≪内容≫ ・高齢者・児童・地域分野ごとの事例発表 ・相互の活動理解を目的としたグループ討議	連携により得られる効果は明らかであるが、いかに多くの関係者に共通認識してもらえるかが課題である。そこで、その必要性についてより多くの専門職に共通認識していただきたいと考え、まずは主の関係者・団体役員等を対象とする研修会を開催。	大川ブロックにおいて地域福祉専門職の集う機会がはじめてのことで参加者の関心度は高く、今後においても、集いの機会を望む声も多が聞かれた。一方で、関係者のニーズは高く、より効果的な連携となるよう内容とテーマを明確に持つ必要があると感じた。 日常の動きの中で、大きな負担にならず自然体で取り組める何かしら共通するテーマは無いか？
24. 6. 23	関係団体（県）の開催する研修会へ参加する。 大川ブロックの推進メンバーでの相互の連携を深めたいと考え、研修会に参加する。	推進メンバー間で意見を交わしたが、それぞれの立場や活動環境によってその考え方についても大きな違いを感じた。しかし、どうしたら良いのか動きについて悩んでいた。そこで、つなぐ（絆）をテーマとした内容を広く大川ブロックに提案することした。	推進メンバー内において、地域の中での連携・ネットワークづくりの大切さについては共通認識できていることが大きな収穫であった。 連携を実際的な動きにつなぐために、より具体的なつなぎの“ネタ”が必要…。
24. 8. 15	第１回ブロック研修会に向けての事前打合せ会を開催する。 地域で活動する専門職が、より効果的な活動ができる環境を専門機関・専門職とともに作りたいとの思いで研修内容を検討。	住民との連携なくして地域福祉の発展は無いものとの考えから、スタートラインを地域発に。 地域の福祉専門職と専門機関・専門職相互の連携の必要性については、個々にある程度の認識はあるであろう。それを実際的な動きにつなげるために、共通をテーマに“つなげる”仕組みとして、連携シートを提案。	住民視点を最優先するスタイルで進めるためには、中長期的なプランが必要である。じっくりと積み上げていきたい。 地域の福祉専門職と専門機関・専門職への働きかけが重要であり、明確なビジョンとパワーが必要。なにより推進メンバー内の意識の統一、チームワークが重要ポイント。
24. 8. 29	第１回ブロック研修会に向けての事前打合せ会を開催する。	連携を図るツールとして連携シートを考えたが、団体によっては専用の類似するシートが活用されていたり、シートは存在するも活用されていない事例もある。何より情報管理において、書類の保管や個人情報等の取り扱いについてはルールが必要では無いかの意見で足踏み状態に。 我々は日々個人情報の中で仕事をしているはずなのですが…。	シートの活用ポイントをしっかりとポジショニングしなければ、その機能と役割も見えてこない。 地域環境に違いのある大川ブロックにおいて、共通した連携ツールとしてのシートが活用できるのか？大川ブロックにおける地域福祉活動の推進に向けた方向性を明確に掴みたい…。ビジョンが今ひとつ描きにくい。地域ニーズが十分にキャッチできていないことに不安を感じる。

24. 8. 30	連携シートの具体的な内容研修会にける目標の明確化及び第１回目の研修会における目標到達点の設定について協議	地域の連携フィールドにおいて、シートの活用される位置を明確に示すことで記す内容も見えてくるのではないか、個人情報等の取り扱いについてはＣＳＷとして基本想定内と考え、多様な意見については研修会での協議事項として提案。 シートを使わない現在のやり取りでは、情報不足や整理もままならず、対象者にとっても二度手間となっている部分があると考えられることから、その改善策としても効果が期待できることについても気づいて欲しい。	あくまで、住民視点での連携シートであり、住民専門職が活用できそれを受ける専門機関・専門職がその対応をより効果的に処理できなければならない。シートを理解いただき普及させるなかで、双方に明確な効果も感じていただくことができればシートの評価にもつながるものと期待する。
24. 9. 5	第１回ブロック研修会に向けての事前打合せ会を開催する。	連携により得られる効果、期待される効果は良いものと一応の認識はあるものと考えられるなかで、より強固な関係作りとして、それぞれのストレングスを最大限に活かすことも重要なポイント。メンバーで研修概要・取り組み目標について共通認識し結束力を高めるとともに、研修会の役割分担によりメンバーの士気を高めよう。	幅広く地域福祉に係るスタッフが主体の推進メンバーであり、まだまだその立ち位置での考え方が強い印象がある。もっと住民視点に近づけなければ…。
24. 9. 18	第１回ブロック研修会に向けての事前打合せ会を開催する。	参加者に、研修会に参加しての思いを少しでも強く掴んでいただけるよう意識して、最終打合せ、準備を行う。それぞれのストレングスをうまく引き出せるよう個人ワークシートを投入。	連携をテーマに、より具体的な動きへつなげるための連携シートであるが、まずはその必要性と自分の強みを活かすことについて強く意識づけをすることにポイントを置きたい。
24. 9. 24	今後の地域福祉活動推進に向けた今事業のあり方と、地域を基盤とする専門職相互の連携について意識を高めていただくことを目的に、地域の福祉専門職と専門機関・専門職合同での研修会を開催。	連携の必要性・その効果についての講演にて意識づけを行った上で、連携を図るツールとして連携シートを提案。グループワークにて活用に向けての意見を出し合った。このようなスタイルの研修会は新鮮で、参加者の声も今後につながる評価をいただくことができた。 一方で、地域における関係組織の動きの違いや、シートの必要性を否定する声も聞かれるなど、課題も発見。 これらを整理して次につなげる取り組みを検討。	それぞれの立ち位置で、強みを活かしたシートの活用イメージができていない印象が強い。シートに係る立ち位置で、個々の役割、活用方法が違うことを十分に意識して連携をイメージしてもらえるような説明が必要。 現段階においては、取り組みの将来ビジョンが今ひとつ分かりづらく、プランの見直しが必要。 次回で挽回。

関係者間の合意形成づくり　～統一受付票の作成～

（第２期）

年月日	経過（主な事柄）	ワーカーの関わり（働きかけ）	ワーカーの意図・想い
24. 10. 11	第２回ブロック研修会に向けての事前打合せ会を開催。第１回目の課題を整理し、第２回目の研修会における目標到達点の設定について協議をする。	地域における活動スタイルの違いはあれど、シートの役割・機能をもう少し具体的に理解いただく必要がある。そのためにも将来ビジョンを明確にし、中長期的なプラン内容の見直しをかけた。 今回の研修会における目標点の設定が難しいが、１回目の状況から、２回目はより具体的に連携シートのメリットを実感できる内容を検討する。	もう一度原点に戻り、連携シートを活用することで得られるメリットを強調することで、参加者の理解も進むのではないか…。 もっと身近で気軽に活用できるものであることの意識づけが必要。
24. 10. 22	第２回ブロック研修会における研修内容について事前打合せ会を開催する。	連携の必要性については意識が高まっていると考えることから、実際の動きに繋がるイメージをより具体的に持っていただきたいと考え実際的な手法について検討する。	推進メンバー内でも、研修概要についての理解を深める必要が感じられる。それぞれの地域性や日常業務の違いもある中での調整の難しさを感じるのに、ブロック全体への取り組みにつなげるには、もう少しチームワークが必要。
24. 11. 8	第２回ブロック研修会に向けての最終打合せ、準備会を開催する。	より具体的なシートの活用方法を理解いただくために事例を用いたロールプレイを提案。その中で連携シートはあくまで連携を図る上でのひとつのツールであるので、受付票の作成に意識が傾かないような工夫が必要。	今研修会のテーマである“連携”をより具体的に意識いただき実際の動きに繋がる第一歩につなげたい。
24. 11. 19	地域の福祉専門職と専門機関・専門職合同での研修会を開催する。	地域の福祉専門職、専門機関・専門職の両方の視点（役割）の中で、連携シートの必要性・その効果を強く理解いただくために、３つのステップで意識づけへのアプローチを行った。	十分では無いが、地域の専門職からは「やってみよう！」、専門機関・専門職からは、「専門分野でもう少し連携が必要。」と連携シートと言うツールをネタに、それぞれの意識が一歩前進した印象を受けた。

～受付票の普及～

年月日	経過（主な事柄）	ワーカーの関わり（働きかけ）	ワーカーの意図・想い
24. 12. 3	課題を整理し、より具体的な取り組みに向けての準備を目的に、振り返りと今後の方向性について打合せ会を開催する。	一部ではあるが、受付票をひとつのツールとして理解いただき活用を期待する声が得られたことから、今後はそれを広く地域に広めるための取り組みが必要。より詳細かつ精度の高い情報発信の場として、専門分野ごとに研修会を開催することについて提案。 一方で、現存する類似シートとの住み分けが必要な地域へのアプローチ方法については慎重な対応が必要。	地域の福祉専門職の中でも組織単位、専門機関・専門職でも分野ごとに研修会を開催した方が、より具体的な取り組みに繋がる研修会が開催できると考える。受付票を作成できたことに満足するのではなく、これまでの流れを軽継続し地域に発信していくことが重要！
24. 12. 11	振り返りがある程度整理できたところで、今後の活動プランについての打合せ会を開催する。	今年度の研修会を検証し、地域の福祉専門職と専門機関・専門職個別の対応という方向性の中で、次年度の活動計画の骨子について提案。今後については、市別・小地域での個別研修会を柱とする。	基本、大川ブロック内においても２市に分かれ、その中でもより細分化したグループ単位でのアプローチが有効と考える。これからの取り組みが一番重要であることを、メンバーに認識してもらいたい。

CHECK

ワーカーの動き（アプローチ・仕掛け方）

・職員や関係者等との情報共有の場（会議や打ち合わせ等）を実施した。
・大川ブロックの現状課題（地域と専門職との距離等）を抽出した。
・大川ブロックの現状課題解決に向けて協議する機会を設けた。
・地域の福祉専門職と専門機関・専門職との交流の機会を設けた。
・連携の必要性とその取り組みへの意識づけの機会を設けた。
・大川ブロックで活用できる統一したツールを作成するための機会を設けた。

関係者・関係機関の動き・反応

・連携による効果、その必要性について再認識された。
・少しずつではあるが、各々が持つストレングス（強み）を認識し、他者・他機関との連携に前向きな姿勢が見てとれた。
・実際に統一したツール（受付票）を活用したいと考えている地域の福祉専門職が出てくるようになった。
・定期的に関係者が集う機会を希望する声が多く聞かれている。
・これからの活動で実践してみよう！（地域の専門職）
・専門職間での連携強化が必要（専門機関・専門職）

仮説・目標の結果

仮説の結果		・ツール（受付票）づくりを通して、社協職員、地域の福祉専門職、専門職の意識の中で、相互連携・協力することの重要性について理解されたように見受けられた。 ・相談を受け付ける場合に必要な事項について、「専門職がどんな情報を求めているか」が理解できたことで、地域の福祉専門職の相談受付に対するスキルが少しづつではあるが、向上していくように感じた。 ・地域ニーズは多種多様であり、効果的なＣＳＷを展開するためにも小地域における活動が基本であることを再認識することができた。
目標の結果	タスク・ゴール	・実際に作成したツール（受付票）は、まだ地域内で活用されていないため、結果については判断できていないが、目標達成に向けての第一歩を踏み出せた。
	プロセス・ゴール	・ツール（受付票）を関係者一同で作成した結果、実際の活用前ではあるが、相互に連携する重要性が理解できた。
	リレーションシップ・ゴール	・地域福祉を推進するための各々の役割が明確となり、それぞれの役割に沿って地域福祉に関わろうとする姿勢が見てとれた。

ACTION

今後の進め方

今後については、研修会等を通じて作成したツール（受付票）を地域内で実際に活用しながら必要に応じて関係者同士で改善点等を修正し、より良いツール（受付票）を目指すと共にそれを活用する地域の福祉専門職の輪を広げ、地域全体で住民の声を拾い上げつなげる体制を協力して作っていく。

そのために、平成25年度以降については、ブロックをより小さい単位（市別・学校区等）に細分化したうえで地域の福祉専門職と専門機関・専門職個々の研修会を個別に開催し、それぞれの立場の中での活用方法や役割等について意見を交わしながら相互の連携ツールとしての仕組みを広めていく。

また、地域の福祉専門職と専門機関・専門職の合同の研修会を開催し、専門職同士によるツール（受付票）等を用いた事例検討などの勉強会を実施することで連携ツールの精度を高めるとともに相互の絆をつくり、連携を図る。

これにより、大川ブロックの最終目標である「地域に住むだれもが安心・安全に暮らせるまちづくり」を地域とともに目指していく。

地域の絆シート（仮称）

［おもて］

相談受付日		相談対応者		所属先	
				TEL	

対象者（たいしょうしゃ）		性別	男・女	M・T・S・H　年　月　日生	歳
住　所				自宅電話	
				携帯電話	

対象者とつながりがある家族・親類・近所の住民等の主な連絡先

同居状況	続柄	連絡順位	氏名（しめい）	自宅住所 勤務先・学校名等	自宅電話 携帯電話
○・×					
○・×					
○・×					

通院（持病）の有無	有・無	通院先	
現在、受けている福祉サービス等			

対象者区分		対象者状態			主訴	について

※対象者区分：①高齢者、②障がい者、③児童、④単親、⑤外国籍、⑥その他
※対象者状態（左）：①介護保険、②障害手帳等、③生活保護、④その他
（右）：介護保険認定度、障害の級、その他

・相談内容及び特記事項

本人又は家族の同意
有・無

相談対応者からの引継ぎ状況		
第1次引継ぎ先	第2次引継ぎ先	その他

［うら］

メモ欄

【助　　言】

青山登志夫

大川ブロック研修は「地域福祉を支える住民と専門職との連携」をテーマに、地域福祉活動実践者と専門職が顔の見えるネットワークづくりをめざし、２回にわたり開催されました。特に、地域における連携・協働の基本となる要支援者の情報を共有する「地域の絆シート（仮称）」が提案され、その必要性を確認したうえで提案された連携シートを活用しながら研修を試みたことが、大川ブロック研修の特徴ではなかったと思います。

研修の主テーマである「連携＝ネットワーク」の目的は、要支援者の地域自立生活の達成のために、さまざまな地域福祉実践の機関・団体や組織が協力・連携を図り、地域福祉の推進を高める働きであり、要支援者の地域自立生活の課題解決を目的とするつながりであると考えます。

さらに、一つの機関・団体では実現できない援助の質を他機関・団体、地域住民等のつながりの中で実現しようとするものであり、要支援者への最善の支援にむけて機関・団体、地域住民等の合意を得た連携・協働活動が必要となります。

大川ブロック研修は、地域福祉活動実践者と専門職が一堂に会し、連携の目的と必要性を共有したことに意義があったと考えてよいでしょう。同時に、具体的な事例をふまえた連携シートの作成と活用から、新たな連携方法に気づき共有したことが研修成果であったと実感しました。また、活動実践者と専門職の個々の役割を前提に、地域福祉実践へのモチベーションが向上し、これからの活動への姿勢と取り組みに意欲の高まりも感じられました。

しかし、連携・協働は、要支援者の地域生活の課題解決に立った主体的な参加志向であれば相乗効果がありますが、実践者や機関・団体の都合に立つと責任の拡散、統制的な効率化のみが先行する課題があります。また、縦割りである公的な制度適用を優先する支援では、公的な制度の狭間にある課題には対応できないことが明らかです。

そして、当初は「意見調整型・合意形成型」連携の要素もありますが、目指すのは「解題解決型・当事者支援型」の連携であり、この枠組みには公私の機関・団体の主体的な参加が必要不可欠となります。

こうした連携・協働の課題がある中で、専門機関・団体は自組織の枠組みを広げ、重なりあうことで要支援者の生活課題に対応し、他の専門機関・団体や地域住民を巻き込んだチームアプローチで展開することが求められています。

また、専門職は地域福祉活動実践者の持つ「強み」を理解する必要性があります。つまり、インフォーマル・サポートが持つ「強み」を引出し、地域福祉活動実践者は要支援者を支える「対等なパートナー」と位置づけ、専門職は地域福祉活動を支援する立場になる必要性があります。

最後に、要支援者の地域自立生活の支援には、インフォーマル・サポートとフォーマル・サポートの連携・協働を追求することが求められています。今回の研修成果から「ソーシャルサポートネットワーク」を形成するはじめの一歩になると確信しています。そのためには、地域福祉実践はより身近な地域で展開されることから、東かがわ市とさぬき市のそれぞれ地域が今回の研修手法を応用し継続して、「解題解決型・当事者支援型」の連携を目標に取り組むことを期待しています。

事例２　小豆ブロック

事例タイトル

「地域の絆づくり」

事　例　概　要

昨年の研修会を経て、今年の香川ＣＳＷ実践研究会総会後、小豆ブロックの課題がでてきた。一人暮らし高齢者の増加（認知症含む）、家族が島外に在住、多問題家族の増加。リーダーで、研修会用の事例として多問題家族の事例をあげ、専門職同士が意見を交わし繋がりを持てるように計画をする。９月の研修会では、ワークショップでの時間が少なく、十分な意見交換ができなかった。また、リーダーの勉強不足（打ち合わせ不足）で、ワークショップの進行がスムーズにできなかった事が課題にあがった。事例が実在しているケースであったので、関わっている専門職もおり、色々な社会資源を広げて考える事ができなかったことも反省した。又、事例が複雑だった為、検討課題が多すぎて、グループ内でうまくまとまりがつかなかった。

アンケートでは、参加者同士の意見交換をしたいとの意見が多くみられたので、11月の研修会では、ワークショップをメインにする計画をたてる。今後の研修会での繋がりを生かしたいので、参加者には、名刺を10枚持ってきてもうようにして、グループ内での自己紹介の時に配ることにする。11月の研修会では、意見交換の時間を十分にとったつもりではいたが、実際は時間が足りない状況だった。参加者は事例に対し、真剣に向き合い活発な意見をだす。やはりリーダーの勉強不足は感じられたが、色々な職種の専門職が繋がることができた。今年度の課題を次年度につなげ、もっと専門職同士が密に繋がれるように続けて研修会をしたい。研修会を経て、地域を見る目を養い、１つの事例をもとに自分達の問題として一緒に考え、共通認識を持てたことは収穫であったといえる。

キ　ー　ワ　ー　ド

・小豆島が盛り上がる・福祉関係者が横につながり、ネットワークをつくる

地　域　デ　ー　タ

小豆島は２つの町に分かれている。２町共に、中心部には役場、銀行、スーパーなどが集まっているが、中心部外では、商店はあるものの品数は少なく、乾物が多い。

交通としては、若い人は自家用車で移動できるが、高齢者の足であるバスの便は少ない。

高齢化率が高く、高齢者世帯、高齢者単身世帯が増えている。また、多問題家族も増えてきており、家族の力がなくなってきている。

そのような中でも、地域としては昔ながらの向こう三軒両隣の風習は続いており、隣近所の事は良く知っている。

2町の概要　　平成23年10月1日現在

種　別	小豆島町		土庄町	
面積	95.63	Km²	74.39	Km²
人口	16,367	人	15,700	人
世帯数	7,103	世帯	6,978	世帯
６５歳以上人口	5,846	人	5,174	人
高齢化率	35.71	%	33	%
介護保険	要介護５	１４８ 人	要介護５	９９ 人
	要介護４	１３３ 人	要介護４	１２５ 人
	要介護３	１４９ 人	要介護３	１８５ 人
	要介護２	１７４ 人	要介護２	１７９ 人
	要介護１	１８９ 人	要介護１	１３７ 人
	要支援２	１３９ 人	要支援２	１２１ 人
	要支援１	１４３ 人	要支援１	１６７ 人
身体障害者手帳保持者数	971	人	849	人
療育手帳保持者数	130	人	203	人
精神保健福祉手帳保持者数	91	人	69	人
生活保護受給世帯数	189	世帯	81	世帯
小学校区	4		5	
町内会（自治会）数	33		54	
民生委員児童委員数	56	人	51	人
福祉委員人数	122	人	0	人
外国人登録者数	165	人	82	人
福祉サービスの状況 （特養・保育所など）	高齢者：9 障害者：5 児童：5		高齢者：5 障害者：1 児童：2	
医療 （病院・クリニックなど）	5		6	
サロン数	高齢者：45 障害者：0 児童（子育て含む）：0		高齢者：41 障害者：2 児童（子育て含む）：2	

PLAN

仮説と目標

[仮説]

小豆島内の福祉関係者間のつながりを得るため、研修会を開催する。

生活課題を抱えている地域住民が孤立しないように小豆島の福祉関係者が集まり、日常的な支え合いネットワークを構築して実践していくことを目指し、地域福祉の推進に向けた取り組みをさらに強化する。

[目標]

タスク・ゴール

機関ごとにどのような事を行っているのか、どのようなサービスがあるのかを知る。
今後、様々な相談や問題が発生した場合に、受付した機関内でとどまらせる事なく関係機関につないでいくことができるようにする。
地域と関係機関がつながる事で、横のつながりが強くなる。

リレーションシップ・ゴール

民生委員や、施設職員も参加してくれる事により、施設職員（特に入所施設）今まで見えてこなかった地域の問題や課題、逆に地域の強みも感じることができるようになる。地域に関わる事により地域を意識して活動をする。

プロセス・ゴール

研修会を行うことにより、それぞれの専門は異なるが、１つの事例を元に、自分達の問題として一緒に考え、共通認識を持てるようにする。

プロセスチャート

香川ＣＳＷ実践研究会
↓
小豆ブロックリーダーによる
研修会の声掛け
↓
・行　　政
・施　　設
・民生委員
↓
９月12日研修会
・「地域の絆づくり」講習会
・香川ＣＳＷ実践研究会の説明
・事例による個別アセスメント・地域アセスメント・支援計画
・次回研修会希望のアンケート
↓
11月19日研修会
・香川ＣＳＷ実践研究会の説明
・名刺交換による自己紹介・職種・業務内容の説明
・前回の事例による支援計画の展開
↓
平成25年度以降
住民が最後まで島で過ごせるように
保健・医療・福祉・地域の絆づくり

DO

事　例　の　経　過

（第１期）

年月日	経過（主な事柄）	ワーカーの関わり（働きかけ）	ワーカーの意図・想い
24. 6. 23	香川ＣＳＷ実践研究会総会後の小豆ブロックの顔合わせ 小豆ブロックの課題がでてきた。 ・１人暮らし高齢者の増加 ・家族が島外 ・多問題家族の増加	総会後の研修会に参加していた出席者から小豆ブロックの課題を出し合う。	専門職同士の会、また地域の支え合いが必要と共有した。 まず、専門職の居場所づくりが必要と考えた。
24. 7. 4	小豆ブロックとしてどうするか	小豆ブロックのリーダーを決める。 （総会後の研修会に参加していた出席者に声掛けをする。） これから先、香川ＣＳＷ実践研究会の小豆ブロックとしての活動を一緒にする。	リーダーで多問題家族の事例を選択して、専門職同士の居場所づくり、すなわち絆づくりをする。
24. 7. 23	9月12日の研修内容について	事例を認知症の多問題家族とする。 次回研修内容を参加者からアンケートをとり決める。	リーダーの宿題としてアンケート内容を考えてくる－参加者は何を望んでいるのかを引き出す。 ・参加者をどうするか。 リーダーの中には、地域住民や老人会の役員、自治会長を呼んだらどうか？と言う意見もあった。 まだまだリーダーも未熟な為、うまくまとめられないとの意見もあり、又人数も膨大な為、会場にも困るし、進行にも問題がでる。まずは専門職の参加を優先した。
24. 8. 29	9月12日の研修内容について	・グループ分け （性別・年齢・地域・職場・職種） ・アンケートの検討 （次回研修に向けて） ・当日の準備・役割	・小豆ブロックリーダー同志の絆ができてきた。 ・9月12日の参加者数が55名と多く、福祉関係者の絆づくりに希望が見えた。

（第２期）

年月日	経過（主な事柄）	ワーカーの関わり （働きかけ）	ワーカーの意図・想い
24. 9. 12	9月12日の研修後のリーダーの意見交換・参加者のアンケートについて	・アンケート結果 回収率70% 満足度3.6 時間が足りなかった。 他職種との意見交換がしたいがもっとも多かった。 民生委員の参加もあったが、グループ討議の時、民生委員の意見が少し的がずれる時があった。 どちらかというと、専門職よりは、住民側の立場意見のずれは全体をみようとする専門職の人達に対して、民生委員は個人の苦労話が多く、個人的な話になるところからか、話がなかなかまとまらなかった。	・リーダーが先生との打ち合わせで戸惑ってしまい、うまく進行できなかった。 ・内容が難しすぎた。 （リーダーもついて行けなかった。）
24. 9. 20	11月19日の研修内容について ・場所 ・時間 ・内容 ・案内先	アンケート結果を重視して時間を多くとる為、講義はなく、ワークショップをメインにして、意見交換をする。 事例があった方がいいだろうと考え同じ事例を使う。 ・前回の研修会が表面的な意見で終わってしまった。	・前回の事例が困難すぎたので、島だからできないというのではなく、これがあればいいなという事を考えてもらったらどうか。
24. 10. 11	11月19日の研修内容について ・場所 ・時間 ・内容 ・案内先	意見交換の中身について9月の実施において、お互いの専門職、福祉関係の業務内容を知りたいという事がわかった。	顔をつなぐ為に参加者に名刺10枚を持ってきてもらい、今後連携がとれるようにしたらどうか。つながりを研修会内だけでとどまらせず、次につなげていくため、名刺なら手元に残る。
24. 10. 21	11月19日の研修内容について	・ワークショップの進行について 案１．グループ内で名前、所属、業務内容を発表する 案２．支援計画の中からグループで話合い内容を決める	ワークショップをどのように進行していけばいいのか、意見がまとまらず、越智代表が島に来るのを聞きアドバイスをもらうことになった。
24. 11. 2	11月19日の研修内容について	・ワークショップの進行について 上記２案を実行して、越智代表にまとめてもらう。	越智代表より 個別事例を通して考える。 地域の特性の中でないサービスをつくる。 ・制度外の物が必要 ・今までにないシステムを作る ・ネットワークづくりが大事

24. 11. 19	11月19日の研修後のリーダーの意見交換		・前研修と同じ事例を話し合い名刺交換で専門職が横につながった。 ・機関ごとにどのような事を行っているのか、どのようなサービスがあるのかが見えてきた。
24. 11. 28	・小豆ブロックの取り組みの反省 ・小豆ブロックの今後の課題 ・小豆ブロックの組織化	・アンケート結果 回収率90% 満足度3.7 名刺交換することで同じグループの方の職種について詳しく知ることができたとの意見もあったが、次回も意見交換がしたいとの希望が多かった。	・リーダーの打ち合わせのつめが甘かった。 ・事例が難しすぎた。 ・事例の対象者が地域で解決できない（施設必要）と思われていた。 ・リーダーのＣＳＷ実践の勉強不足を感じた。 ・リーダーのＣＳＷ実践の勉強が必要ではないか。 ・小豆ブロックの組織化よりも先ず会員の組織が必要ではないか。
24. 12. 12	・小豆ブロックの社会資源 ・小豆ブロックの今後の課題	小豆ブロックの社会資源を出し合いながら話しをする。知っているようでよくわかっていない事もあり、確認が必要となった。	福祉関係者の関係は密になったと思われる。 来年度は、会員での勉強会を実施する傍ら、話合いながら次の目標に向かって実践する。
25. 1. 9	今後の取り組み課題と具体的手法 ・小豆ブロックの会員同士の連携の必要性。 ・今の状態をキープしたまま、それぞれの仕事をして、時々問題を持ち寄り、勉強会を開く。	求められているのは地域福祉の担い手である。 共助一育成、協力者の募集をして、地域に入っていく。 会員同士の連携が必要。 小規模でリーダー、会員の勉強会をする。	問題を持ち寄り、話を掘り下げて協議していく事の大切さ。 勉強しながら必要とされるものをつくり実践していく。 一人ひとりの感性をみがく。 １つの事例に対して皆が共通認識を持てるようにする。 専門職としての活動をしながら勉強していく。 集まるだけで心強さを感じた。

CHECK

ワーカーの動き（アプローチ・仕掛け方）

・小豆島内の福祉関係者が一同に集合する研修会を２回開催した
・リーダーを決め、研修会のための打ち合わせ会を実施
・情報共有の場となり、リーダー同志はよりつながりが深くなった
・地域ケア会議の大切さを認識し、個人だけではなく、家族・地域をみる力をつける

住民の動き・反応

専門職と民生委員間の横のつながりができ、自分の立ち位置が分かり、困った時の相談先が増えた

仮説・目標の結果

仮説の結果		・今回の研修では、地域の住民の参加はなかったが、その代表として民生委員の参加があった。施設の職員など民生委員の存在や職務内容まで知らなかった人もおり、自分達がいかに地域を見られていなかったかを改めて認識する参加者もいた。 ・リーダーの勉強不足もあり、グループ内で進行がうまくいかない所もあったが、色々な職種の専門職が集まりそれぞれの視点から意見を交える事で、刺激にもなり視野も広がった。また、名刺交換する事でさらに専門職同士が近づくことができ、横のつながりもできてきた。まだ細部に渡り日常的な支え合いネットワークづくりができてはいないが、事例をもとに地域を見る目を養い、個人ではなく、世帯全体を、そして、地域のニーズを見る目を養った。地域の中には隣近所の付き合いは残っていてそれが強みとなっている所もある。 ・専門職が、今までの固定観念にとらわれず、グローバルな視点から支援をしていくきっかけができた。
目標の結果	タスク・ゴール	・機関ごとにどのような事を行っているのか、どのようなサービスがあるのかが見えてきた。 ・パンフレットだけではわからない部分も情報として分かった。今後、様々な相談や問題が発生した場合に、受付した機関内でとどまらせる事なく関係機関につないでいくことができる。 ・地域と関係機関がつながる事で、横のつながりも強くなる。
	プロセス・ゴール	・研修会の企画・準備にブロックリーダーが集合して話し合いをすることにより、互いの関係が密になり、色々な事例の相談ができるまでになった。それぞれの専門は異なるが、１つの事例をもとに、自分達の問題として一緒に考え、共通認識をもてるようになった。
	リレーションシップ・ゴール	・民生委員や、施設職員も参加した事により、施設職員（特に入所施設）今まで見えてこなかった地域の問題や課題、逆に地域の強みも感じることができた。地域に関わる事により地域を意識して活動をするようになった。

ACTION

今後の進め方

・香川ＣＳＷ実践研究会会員がＣＳＷの勉強会をする
・福祉関係者の関係は密になったので、次は住民が最後まで島で過ごせるように保健・医療・福祉・住民で地域の絆づくりを構築していく。
・そのためには、住民はどうしたいのか、何が必要かなどの地域のニーズと課題を明確にして、共通の目標をもち地域福祉のためにつながっていく。

【助　　言】

髙橋　信幸

二度のブロック研修を進めていくなかで、ブロックのリーダーの方々から「うまくできない」というような自信喪失の声がちらちらと漏れてくることがあり少し心配をしたところであるが、他のブロックと比べてもかなり多様な専門職の方々の参加と、地域住民のリーダーである民生・児童委員の皆さんの数多くの参加があり、結果としては他のブロックに遜色のない成果を上げられたのではないかと思う。ブロックからの報告を見ても、「今後様々な相談や問題が発生した場合に、受付した機関内でとどまらせることなく関係機関につないでいくことができる」、「企画・準備にブロックリーダーが集合して、話し合いをすることにより、互いの関係が密になり、色々な事例の相談ができるようになった」、「施設職員が今まで見えてこなかった地域の問題や課題、逆に地域の強みも感じることができた」等々、かなり積極的な自己評価がなされている。今回の研修会を準備されたリーダーの皆さんは、もっともっと自信をもって前進していただきたい。

ただ、研修のなかで少し反省すべき点があるとすれば、それは、とりあげた事例がＣＳＷの訓練を受けていないほとんどの参加者にとっては難しすぎたということであるだろう。認知症の高齢者と知的・身体の障がいがある孫、以前に不登校になったことのあるもう一人の孫、離婚して全く一緒に住んでいない孫の親（高齢者の娘）という重層的・複合的な幾重もの課題を抱えた事例は、経験豊かな専門職のカンファレンスならともかく、かなり無理があったように思う。ましてやこうした複雑な事例は、個別アセスメントや地域アセスメントでストレングスの視点からも分析を加え、さらには既存の資源にのみとらわれずに新たな社会資源開発も視野に入れた支援のプランニングが求められる。それを９月の１回目の研修事例として取り上げたのであるから、当然にも消化不良を起こしてしまったということだろう。

しかしこうした点はすでにリーダーの皆さんによって自覚され、乗り越えられつつあることが、ブロック報告には明確に示されている。「リーダーの勉強不足もあり、グループ内で進行がうまくいかないところもあったが、色々な職種の専門職が集まりそれぞれの視点から意見を交えることで、刺激にもなり視野も広がった」とし、「事例をもとに地域を見る目を養い、個人ではなく、世帯全体を、そして、地域のニーズを見る目を養った」述べられている。さらには今後に向けて、「会員のＣＳＷの勉強会をする」、そして、「福祉関係者の関係は密になったので、次は住民が最後まで島で過ごせるように保健・医療・福祉・住民で地域の絆づくりを構築する」と明言されている。研修のメインタイトルである「地域の絆づくり」は今年度のみではそこまでは至らなかったけれども、来年度へ向けてその具体的な基盤はできあがり、方向性は示せたということであるだろう。

そして、示された方向性を現実のものとするために、こうした多職種によるブロック研修を新年度以降もぜひとも継続していただきたい。ブロック研修では、地域の課題を明確にして地域の絆を編みあげていくことを目指して、まずは演習的にあまり複雑ではない事例を取り上げて検討するところから始め、次第に参加者が実際に抱えている事例のカンファレンスへとレベルアップしていくのが良いのではないだろうか。その時にはぜひともＣＳＷの視点を活かして個別課題と地域課題を結合し、新たな社会資源を開発することも含め、地域社会を豊かに耕すことを通して個別の生活課題が解決され、暮らしやすい地域が誕生する、そうしたカンファレンスをする本当の意味の「地域ケア会議」へと成長していっていただきたい。

いろいろと悩みながらも２回のブロック研修を準備、運営し、成功させた実績は大きい。このことを糧としてさらに新たな一歩を踏み出す時であろう。

事例３　高松ブロック

事例タイトル

「地域での暮らしを支えるソーシャルワーク実践を行うために」
～専門職同士の顔の見える関係づくりと学び合いから連携について考える～

事　例　概　要

ソーシャルワークを行う各専門職は、同じ分野・種別または機関同士の学び合いや連携は積極的に行っているものの、障害・高齢者・児童というような対象分野別の縦割りでの関わりが中心になっている。

このような中、平成24年度高松ブロックでは、「地域福祉」というキーワードで専門職が集まり、コミュニティソーシャルワークの視点と支援法について学ぶことを通して、多機関、多職種の専門職同士が顔の見える関係を築いていくことを目標とした。高松の圏域が広いことがネックではあったが、まずは核となる専門職がつながること、そのつながりを基に、今後は圏域をさらなる小地域に設定し直し、小地域での住民主体の支え合いのしくみづくりや関係づくり、新たな資源開発を行っていけることを最終目標としている。

キ　ー　ワ　ー　ド

・専門職同士の顔の見える関係づくり
・各機関・職種の専門職同士の役割の相互理解と意識向上
・ＣＳＷ実践活動圏域の設定

地　域　デ　ー　タ

高松ブロック（高松市、三木町、直島町）は、県庁所在地の高松市は、中核都市規模の人口約42万人が暮らしている。

高松市は、人口も微増しているが、世帯数、高齢者一人暮らし等世帯、障害者手帳等保持者数も増えている傾向にある。高齢化率は、県内17市町の中では２番目に低い23.3％（県内平均27％）ではあるが、これも確実に上昇している。一方、過疎化・高齢化が顕著に進む地域も一部あり、塩江町地区では高齢化率が40％を超えている。三木町は、人口２万8,200人、高齢化率24.1％、直島町は人口3,223人、高齢化率31.8％である。

高松市には、地域福祉活動を推進する機関・組織・団体が数多くある。地域の福祉の相談を行う行政機関（福祉事務所、障害福祉相談所、子ども女性相談センター、精神保健福祉センター、保健所、地域包括支援センターなど）、およそ小学校区に１か所程度あるコミュニティ協議会（44カ所）などはもちろん社会福祉協議会（地区社会福祉協議会41地区）、地区民生児童委員協議会、自治会、老人クラブ、婦人会なども挙げられる。また、地域の社会福祉施設がその機能を活かし、地域での住民の生活を支える機能を果たす施設も多い。（居宅介護支援事業所145カ所、障害者相談支援事業所７カ所、子育て支援センター等30カ所）。

PLAN

仮説と目標

[仮説]

高松ブロックでは、高松市だけでも圏域が大きく、地域福祉活動を行う各機関・団体、およびインフォーマルなサービスを把握できている専門職は多くない。まず、ブロック研修で、各機関や団体の専門職が集まって、互いの役割を知ることから始めてはどうか。学びの過程で、自身の機関・団体の求められる役割を再認識し、地域福祉推進に取り組む中で協働できる仲間づくりを行う。さらに、専門職が、それぞれの地域課題を持ち寄り共有することで、個別の課題を共通の地域課題として捉えたり、解決するためのコミュニティソーシャルワーク実践の必要性を感じることもできるのではないか。その後、核になる活動メンバーが見えてくれば、「地域」圏域の設定をさらに小地域にし、そこで集まった人材で地域のニーズキャッチを行う。さらに、住民を巻き込んだ地域での支え合いのしくみを創る具体的手法を共に考え、モデル地域を設定する等して実践をしていけるのではないかと考えた。

[目標]

タスク・ゴール

・個別の課題を地域の課題として共有化する視点を養う。
・ＣＳＷ実践を行う小地域圏域を設定する。
・その地域でまず、専門職のソーシャルサポートネットワークを形成し、地域のニーズや課題を発見するしくみを創る。

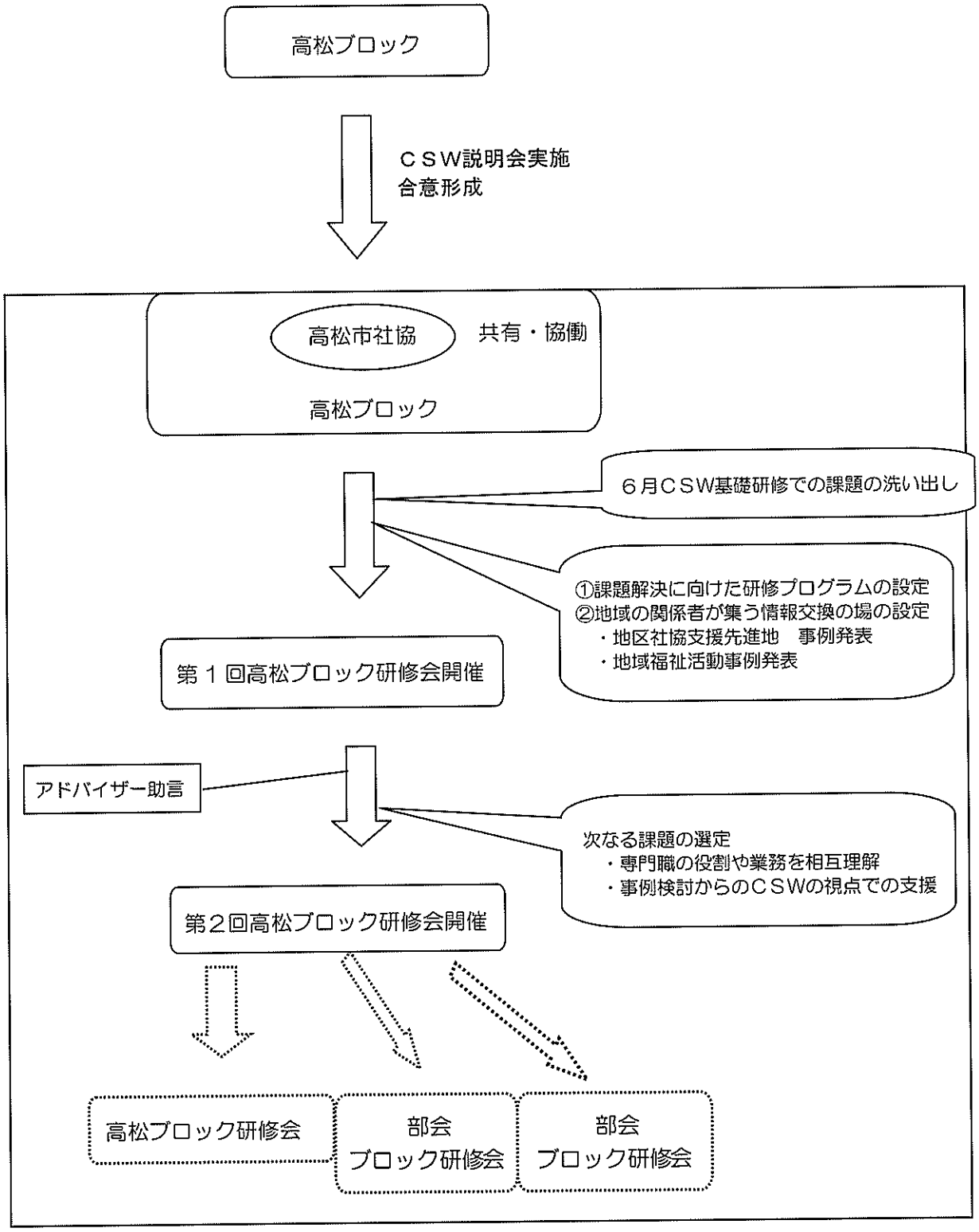
リレーションシップ・ゴール

・専門職同士が地域で横のつながりをもち、顔の見える関係を築くことで、地域での各機関・団体の役割や位置づけが明確になり、連携の在り方が見えてくる。
・地域での課題を共有し、顔の見える関係ができることによって、サポートネットワークの基礎ができる。

プロセス・ゴール

・多機関、多職種の専門職同士が集まることによって地域にある様々な課題に目を向け、解決することに関心をもつ。
・専門職が、制度では解決できない課題に対応する住民主体のしくみづくりが必要だと気づき、何らかの行動をしなくてはという意識をもち具体的取り組みについて考える。

プロセスチャート


高松ブロック
ＣＳＷ説明会実施
合意形成
高松市社協
共有・協働
高松ブロック
６月ＣＳＷ基礎研修での課題の洗い出し
①課題解決に向けた研修プログラムの設定
②地域の関係者が集う情報交換の場の設定
・地区社協支援先進地　事例発表
・地域福祉活動事例発表
第１回高松ブロック研修会開催
アドバイザー助言
次なる課題の選定
・専門職の役割や業務を相互理解
・事例検討からのＣＳＷの視点での支援
第２回高松ブロック研修会開催
高松ブロック研修会
部会
ブロック研修会
部会
ブロック研修会

DO

核となる機関の協働への合意形成

（第１期）

年月日	経過（主な事柄）	ワーカーの関わりと意図・想い	課題や気づき・成果
24. 6. 23	地域福祉（コミュニティソーシャルワーク）基礎研修会とグループワークでの意見交換をする。 ・専門職のＣＳＷの視点を養う ・地域の課題、専門職が感じている課題の確認	・まず、「地域福祉」に関心のある専門職を集め、ＣＳＷの視点を知ってもらい、地域の課題を共有する。今後の、地域福祉活動実践を行う仲間となれる方が見つけられれば…。	・専門職も、地域の中で、今ある社会資源やサービスについて知らない。また、他機関の役割を知らず、横のつながりが薄い、地域へアプローチしていくと拒否されたり、本人に困り感がないという課題をもっていることが共通認識できた。
24. 8. 1	高松市社協職員に香川ＣＳＷ実践研究会事業と取り組み説明会を開く。 ・高松市社協職員の協力を得るための合意形成 ・高松ブロック研修開催の協働依頼	・地域福祉推進のキー機関になるであろう社協の職員に、コミュニティソーシャルワークの必要性について感じてほしい。	・職員一人ひとりが、どのような課題意識をもっているのかがまだ分からない。
24. 8. 14	高松ブロック研修会の案についての打合せ ・研修会内容のプログラム選定 ①地区社協支援の先進事例（松山市社協）報告 ②社協の地域福祉活動事例発表 ・高松市社協の買物支援等 ・松島地区社協の子育て支援活動 ・松山市石井東地区社協の取り組み	・研修会を協働企画することで、社協職員の意識向上をはかりたい。 ・ＣＳＷ実践を行うために「専門職として学ばなければならないことを、自分たちで主体的に考える」ことが重要なカギになることを知ってほしい。 ・まずは、「社協や地区社協の取り組み」の実状と課題を社協職員自身が知ることと、社協以外の方へ社協の取り組みの紹介ができれば。	・「実際地域に出るために何からしたらよいのか分からない」ということで、社協職員自身が具体的にこれから何に取り組みたいのかが見えてきづらい。 ・高松市社協の中からも、ＣＳＷ実践を共に進めていける人材が手を挙げてくれた。高松ブロックの核となるメンバーづくりの第一歩となった。 ・高松ブロック圏域が広いので、参加対象者の中心をどこにするのかの絞り込みが難しい。まずは、社協の内部関係者（社協、地区社協）を中心に、そこにプラスして行政・保健・福祉の相談支援機能を果たしている機関への参加を呼びかけることとした。「高松市のコミュニティ協議会」へもという声も挙がったが、今回は人数が膨大になりすぎることが予想されたため、案内を見送った。
24. 9. 20	第１回高松ブロック研修会および社協職員研修会の開催	・社協職員は、まず身近な取り組みや、地区社協支援をうまく進めている先進地事	・社協以外の参加者は、「個別支援を行うボランティアの育成やコーディネート」

	平成24年9月20日 参加者：54名 病院関係１ 障害児・者施設　２ 高齢者関係　６ 県市行政　４ 包括　４ 地区社協会長等　22 社協　15 テーマ：「地域での支え合いの仕組みづくり～暮らし続けたいと思えるまちづくり～」	例から、地域に入っていく手法を学び、自身の取り組みについて考えてほしい。 また、社協以外の参加者へは、「社協」の存在と役割を伝える機会となったら…。	「地域の今ある課題への支援」など、社協への期待や関心をもって参加していることが、当日の質疑応答の内容やアンケートからも分かった。 ・高松市社協が他の機関と協働して研修会を行うのも初めてで、協働の仕方から戸惑っているが、よい経験としてとらえてくれている。

実践に向けた学びのプログラムの選定や実施を通じての関係づくり

（第２期）

年月日	経過（主な事柄）	ワーカーの関わりと意図・想い	課題や気づき・成果
24. 9. 26	ブロック研修会後の内部会議 ・ブロック研修の反省と、今後の取り組みの方向性について	・研修会で学んだことで、社協が成果として感じたことと、さらなる課題として感じたことをふり返ることが肝心。 ・核となっていくメンバーたちが、自分たちがやりたいことを言い合える場を作りたい。	・社協、他の機関、地区社協もお互いの日頃の活動を知ることができ、その上で連携が大切と感じているが、では「誰と誰が」「なぜ（何のために）」「どうやって」ということが見えづらい。あと一歩踏み込んでお互いを知り合い、話せる関係になれれば。
24. 9. 27	ブロック内部会議 ・ブロック研修会での意見を基に地区社協の一つをモデル地区として選び、その地区の取り組みに参画することを提案する。	・地域のニーズが見えている地区に入っていくことで、専門職自身が実践の中での課題を見つけ、学んでいく取り組み方もいいのでは。	・社協としてモデル地区を選び、地域に入っていくには、検討がいることで、すぐには難しい。まず、地域の他機関や専門職の仕事や役割を理解することから始める。
24. 10. 30	ブロック内部会議 ・第２回高松ブロック研修の具体的プログラムの選定 ①ミニ講義 ＣＳＷの視点について ②グループワーク ・自己紹介 （業務や課題） ・事例検討	・他機関の専門職の業務や、感じている課題について自分の思いを話せる場をもつことで、地域の専門職と顔見知りになりたい。 ・上記のことを行うことで、自身や所属機関の役割を理解し、他機関との「連携」の仕方についても考える機会をもちたい。 ・少人数で個別の事例検討を行いたい。各事例を話し合うことで、地域での共通の課題を見つけたり、新たな視点や、協働して創り出さなければならないサービス	・高松市社協の内部から、２回目のブロック研修会の具体的な取り組み課題について、また、取り組み手法についても案の提示があり、学びの中から自らの課題を見つけようとする主体的な意識を感じた。 ・今回は、専門職のみを参加対象としたが、案内先をどこまでにするのかが難しい…。まず、これまでの研修の参加者を中心に、社協、包括、行政、居宅支援事業所のケアマネ、相談支援窓口担当程度か。高齢者以外の分野

		についても考える機会をもちたい。	は少ないが…。小地域での圏域設定の必要性を感じる。
24. 12. 10	ブロック研修会事前打合せ ・事例検討の進め方についての注意点の共通確認 ・グループリーダーの進め方（視点と時間配分） ・ＣＳＷの視点 ・研修のねらいの意識	・グループワークを行う上で、予測される事柄を考え、ねらいの達成意識を常に持つ心構えをグループリーダーと共有しておきたい。	・事例検討で地域の課題の共有と解決へのソーシャルワークを考えることが研修の柱だが、事例検討を行う前に、短い講義で「ＣＳＷの視点について」を押さえて、検討の方向性の確認をしてもらう位置づけとした。 ・自己紹介には、共通シートを用意し（日頃の業務、地域のニーズキャッチの方法、その中での課題、その課題解決のために自身や機関で現在取り組んでいることや今後必要と思うこと、研修参加理由）、参加者が自身の取り組みや考えを振り返ったり、限られた時間で他の方へ伝えやすいよう考えた。 ・事例ワークシートを作成し、ジェノグラム、エコマップ、制度に当てはまらない困っている状況を簡潔に記入し、当日人数分用意してもらう。
	（研修のねらい） ①他職種・機関の実践や役割を知る ②さまざまな事例をもとに地域のニーズや課題を知り、制度では解決できない課題について考える ③課題を解決するために必要な新しいサービスを企画、実施していくためのソーシャルワークについて考える		
24. 12. 13	第２回高松ブロック研修会を開催する。 平成24年12月13日 参加者：20名 病院関係１ 障害児・者１ 高齢者関係　７ 包括３ 社協８ ①ミニ講義 ＣＳＷの視点について ②グループワーク ・自己紹介（※資料１）（業務や課題） ・事例検討（※資料２） ４人グループで、各事例の概要の報告を行い、その事例の中から深める１事例を選ぶ。それに対する解決へのＣＳＷの視点でのプランニングやアイデアについて議論する。	・少人数で専門職同士が顔の見える状況での情報交換等を行いながら、互いの役割を知り、「協働・連携」について考える機会をもちたい。 ・個別の課題を地域の課題として共通認識した上で、制度で対応できない課題へ対応するためのソーシャルワーク機能についてそれぞれの立場から考えを伝えて欲しい。	・他職種の業務や地域への取り組みが分かり良かったという方が多くいた。 ・グループが少人数であり、全員が十分に意見を言ったり、話し合うことができた。参加者も顔見知りになれる規模であった。 ・事例を出し合うことで、地域に様々な困難事例（多問題家族、本人に困り感がない家族等）があることが共有でき、支援するには「地域の力」が必要との事も分かったが、解決へのＣＳＷプランニングを具体的に行うところまでは難しかった。 ・事例提供者へのアドバイス的なことになり、「誰が」「どうやって」という部分まで話せなかった。
24. 12. 26	第２回ブロック研修後の内部会議 ・今回得たことと課題 ・今後の取り組みと学	・一年間の取り組みでの各機関や個人の変化と、ブロックリーダー個人の想いを伝えあうことで、現状に対す	・社協が、具体的課題を挙げられるようになったり、研修会に参加したことは大きな変化。今後は、組織とし

	びについての方向性	るリーダーそれぞれの評価や課題と思う点を共有したい。	て業務の一環とした位置づけでの取り組みを考えていかなければ。 ・「協働」という観点や、自分の事として考えやすくするためにも、今後の「地域」の圏域設定が必要。 ・今後、地域の関係者（住民）をどう巻き込んでいくか。 ・ＣＳＷとしての資質をもった人材を増やしていかないと、圏域を小地域に設定して実践に向けて学びを深めることが難しい。ＣＳＷの養成との並行が不可欠。 ・一年のブロック研修、ＣＳＷ養成研修を通して、高松ブロックで核になる専門職が見えてきた。今後、その方達とどうつながって、学んでいくか。
25. 1. 9	６ブロック研修報告会 ・県内ブロック一年の取り組み報告 ・グループワーク 高松ブロックでの今後の取り組み方針の決定	・ＣＳＷ役員以外にも核になっていくメンバーが集まったので、それぞれの想いを聞きたい。	・小地域でのモデル地区を設定し、そこで今ある「高齢者ニーズ調査」の結果を受けての取り組みを専門職がまず取り組むチームをつくり実践しては。小さい範囲・分野での取り組みが成功すればそれを発表したり広げて行く。 ・継続して取り組むために、各機関の「業務」としての位置づけが必要。

CHECK

ワーカーの動き（アプローチ・仕掛け方）

・ＣＳＷのキー機関となる市社協へ協力依頼や情報共有の場を設定し協働で進めた。
・ＣＳＷ実践の課題を主体的に考え、気づきを基にした２回の研修会を企画し実施した。
・ブロック以外の研修やＣＳＷ養成研修に参加してくれた方を中心に、ＣＳＷの視点を持って継続的に参加してもらえるよう核になる人材を見つけるよう働きかけた。

専門職の動き・反応

・研修会に参加することで、他の職種や機関が地域でどんな活動をし、課題を抱えているかを知ることができた。年間のＣＳＷの取り組みを通して、顔の見えるつながりが感じられる専門職もいた。
・個別課題を地域の課題として普遍化する視点はある程度持てたものの、自身の事として解決への関わり方や役割を考えるには至っていない。それには、やはり小地域圏域の設定を行う必要性を感じているが、その設定をどうするかについて決められていない。

・「連携」とは、ケースを他の機関へ引き渡すものではなく、専門職が自身と地域のストレングスを生かして対等なネットワークを築いて行っていくものだと気づいた。
・社協職員をはじめとする専門職が、ＣＳＷに対する意識を高め、自分たちが主体的に取り組むべき課題を意識するようになった。

仮説・目標の結果

仮説の結果		・研修会の企画・実施を通して、社協職員の意識が変化し、地域福祉に前向きに取り組める雰囲気ができてきた。 ・他機関、他職種で集まる場をもつことで、互いの組織理解が図れてきた。また、地域課題を住民と協働して解決しなければという思いを共有していることも知ることができた。 ・地域でＣＳＷ実践を進めて行く核になるメンバーが見えてきた。しかし、実践へ向けての小地域圏域の設定や具体的取り組み手法やプログラムを考える段階には至っていない。今後は、圏域をどう設定するのか、その中で、どんな手法でＣＳＷ実践に取り組んでいくのかが課題となる。
目標の結果	タスク・ゴール	・個別課題を地域の課題として捉えることはできつつあるが、「地域のネットワークで解決する」というところに踏み込むことの難しさが分かった。 ・今後学びを深め、実践を行うためにＣＳＷとなれる人材の養成が不可欠ということに気づいた。 ・小地域への圏域設定を行う必要があるが、そこをどんな設定にするのか決められていない。そこを決め、まずは小さな課題を基にネットワークを作り、モデルとして進めることも必要か。また、ネットワークの調整役も必要になる。
	プロセス・ゴール	・多機関、多職種の専門職同士の視点の違いが、互いを刺激し、地域の課題に前向きに取り組む雰囲気ができた。 ・協働で取り組む過程で、核となる社協職員の「地域福祉の担い手」としての意識がより高まった。
	リレーションシップ・ゴール	・専門職同士がつながり連携するにはまず、互いの役割を知ることからという共通認識がもてた。 ・限られた分野ではあるものの、高松での専門職同士の顔の見える横のつながりができつつあり、協働して動いてくれる仲間が見えてきた。 ・地域課題は共有できたが、どう働きかけるのかのプランニングや実行については今後の課題としてある。

ACTION

今後の進め方

・今後もＣＳＷ実践につなげるために、継続して「地域包括ケア」について地域の専門職が学ぶ場が必要である。その際、既存の各専門職の団体（例　ケアマネの連絡協議会など）と協働していくことも視野に入れていくと効果的である。
・圏域設定をどうするかを具体的に考える必要がある。（地域包括支援センターの８圏域？日常生活圏域19？地区社協41？コミュニティ協議会44？）どこに設定したとしても、それぞれでＣＳＷになりうる人材の養成も急務。その人材を増やしていくのと並行して、各圏域ごとでのネットワーク会議と実践を行わなければならない。
・まず、モデル地区を設定し、そこでの取り組みや事例を他の圏域や全体の場で発表して徐々に広げて行くというやりかたをすすめていくことも考えたい。

資料１

自己紹介シート

参加者氏名（　　）所属（　　）

１　日常の業務	
２　地域のニーズキャッチの方法	
３　２を行う中で見えてくる自身が課題として捉えていること	
４　３を解決するために今後必要と考えることは？自分や所属機関が取り組むべきことは？	
５　今回の研修に参加した理由	

資料２

事例の概要

参加者氏名（　　）所属（　　）

対象者		年齢		性別	
【ジェノグラム】		【エコマップ】			
制度に当てはまらない等で困っていることについて　各状況ごとに整理して記入					
（例） 徘徊があり、よく、夕方の時間頃に家を出て行っている。自宅前の道路は夕方の通勤の帰宅時間帯は車通りも多く、非常に危険。					

【助　　言】

國光登志子

高松ブロックは県庁所在地でもあり、地域福祉活動を推進する機関や団体も数多くある。福祉事務所、保健所、精神保健センター、障害福祉相談所、子ども女性相談センターなどの行政・公的機関はもとより、コミュニティ協議会44か所、居宅介護支援事業所145か所、子育て支援センター30か所、障害者相談支援事業所７か所、その他にもＮＰＯや民間による活動拠点は数多くある。それぞれは対象者別分野の縦割りで同一機関内の学びや連携は行われているが、専門職・専門機関に横軸を通す試みは、今回のＣＳＷ実践者養成研修やブロック研修がスタートラインである。専門性を超えて顔の見える関係作りが必要という認識には立っており、ネットワークは小地域でアウトリーチによりニーズを発見しようという方向づけは行われた。

ブロック研修会の準備や運営はＣＳＷ実践者養成研修受講者や市社協のメンバーが行い、個別事例から地域課題を考える取り組みも第２回目のブロック研修では実施されたが、個別事例の問題解決に対する意見交換で終始してしまうと、地域の課題を発見し、地域のストレングスを活かしたプラン作成までいきつかないまま困難事例の共有に止まってしまう。ＣＳＷの視点を見失わない事例検討を同一事例で継続し、地域のインフオーマル支援者の関わりや当事者・家族の変化を検証していく学習方法も具体的取り組みとして提起したい。

事例4　中讃東ブロック

事例タイトル

「専門分野を飛び出し繋がろう！」
～生活課題対応版連携シートの作成プロセス～

事　例　概　要

中讃東ブロックの各市町にも複雑な生活課題を抱えている人が多く存在する。しかもその数は年々増加しているように思われる。問題が複雑多岐になってきている為、専門職単独で或いは同専門分野の者だけでは対応しきれないケースが多い。

また、若年者・高齢者・障がい者問わず、核家族や独居世帯が増加し、地域関係も希薄となり、生活課題の発見が遅れ、代弁して訴えてくれる身寄りもいないという状況へ進みつつある。

各市町には、民生児童委員、地区社協、自治会、介護予防サポーター、福祉委員等様々な組織があり、多種多様な専門職も働いている。それぞれの取り組みは広範多岐に及ぶが、それらが繋がる場は意外にも少ない。それらすべてが繋がり、ケースに取り組める共通のツールが存在すればネットワークの幅が広がっていく。

そこで、どの分野にも共通する生活課題に焦点をあて、問題解決に向かって連携していくためのシートを作成する。それによって、地域の中の専門職が、以前にも増して広い範囲で知識と経験が生かされるようにしたい。

また、個々の地域への関心を高め、制度の枠から取り残されている地域住民を発見し、専門職の「繋ぐ」力によって支援枠に引き入れていくことを目指す。

キ　ー　ワ　ー　ド

連携シート、生活課題
地域関係者と専門職（専門職同士）とのつながり

地　域　デ　ー　タ

1．綾川町	人口	25,000	高齢化率	29％	合併、内陸・山間部に位置
2．宇多津町	人口	18,000	高齢化率	17％	若い世帯の人口増
3．坂出市	人口	55,000	高齢化率	29％	中心部の高齢化・人口減

PLAN

仮説と目標

[仮説]

現時点で、すでに繋がりがある専門職のみで地域連携シートを作ったのでは、連携の幅を広げることに限界が生じる。多方面から専門職・市町の福祉関係者を集めそれぞれの立場に立った関わりの視点を専門職同士で考える場を設定する。各専門職の意見や福祉関係者の意見を融合させれば、どの分野でも共通して活用できる統一されたシートを作成できるのではないか。

[目標]

タスク・ゴール

・地域の特性に応じた、地域全体で共通する生活課題解決の為の連携シートを作成する。
・シートを実用化して地域ケア会議やケースカンファレンスなどを開催し、支援方法を見出していく。

リレーションシップ・ゴール

・専門分野別、団体別の繋がりだけでなく、各所属・団体・分野の垣根を越えた連携づくり。
・シートが新たな社会資源の開発へつなげる。

プロセス・ゴール

・専門職者自身が専門分野以外の問題に目を向け、地域の一員として何ができるのか考える視野を養ってもらえる
・既存シートがある場合、その補助シートとして活用してもらう。

プロセスチャート

1．前置きとして

・シートが生活課題を抱えている方への支援の一助に。
　支援対象者は、一人暮らしの高齢者・障がい者だけとは限らない。
・初回相談受け付けをするのが民生児童委員などの地域福祉関係者を想定し、
　後の働きかけは地域包括センター職員及び社協職員が伴走して動く。
　（最初に包括や社協が情報を掴んでも地域関係者を巻き込む）
・シート自体はシンプルな内容とし、既存シートの補助的なシートにもなれば。

2．連携シートの主な活用場面

生活課題がある人の発見時、通報・相談受付時
○地域福祉関係者（民生委員・福祉推進員等）が支援対象者の発見時
○支援対象者の近所の方や親類の方から地域福祉関係者への通報・相談時
○支援対象本人から地域福祉関係者への相談時
○その他、訪問系サービス提供事業者などからの相談

↓

ここから地域包括・社協が一緒になって働きかける

○訪問時（アウトリーチ）
○本人の承諾（個人情報の管理）
○支援に必要と思われる関係機関への呼びかけ

↓

専　門　職　員　の　情　報　共　有

地域ケア会議

ケースカンファレンス等

各機関の持っている
既存シートへの記入、
互いに情報追加

↓

支援計画（課題を解決するサービスにつなげる）
地域の関わり（特に自治会長）、新たな社会資源への働きかけ

DO

地域福祉関係者及び福祉専門職でシートについて学ぶ・考える・作成してみる

（第１期）

年月日	経過（主な事柄）	ワーカーの関わり（働きかけ）	ワーカーの意図・想い
24. 9. 11	第１回ブロック研修会の開催	連携シート作成の基礎となる「だれと・どこで・何のために」（何のために誰と連携するのか）を研修会参加者に意見を出してもらった。	次回までにシート原案を作成していく過程で、その役割を見出し、目的のあるシート内容となるように導く。
24. 10	各市町それぞれで連携シート原案を作成する作業部会を開催	社協職員以外の関係者も含め、各市町の現状に見合ったシート原案を作成	専門家によって違う角度・視点からから様々な意見を聞くことができた。積極に関わらねばという強い意志だと感じる。
24. 11. 16	第２回ブロック研修会の開催	各市町のシート原案を発表して追加又は削除すべき記入欄を考える。また、シートの必要性を再確認する。	シートの活用場面を抑えることによって、誰が・どこで・何の情報を必要とするのかを分かり得た。
24. 12	各市町社協職員で、再度、シート原案について協議 ※資料１～４参照	３つのシート原案を中讃東ブロックとして１つの原案にまとめる。	シートの実用化の際は、支援対象者と地域関係者や専門家とのつながりをもたせる。 潜在化しているニーズの発見につなげられるようなシートにしたい。

CHECK

ワーカーの動き（アプローチ・仕掛け方）

・様々な団体や専門職が集まる場を設定した。
・講師より、ＣＳＷの役割やシートの基本的な考え方を確認できた。
・自分の地域の実態や性質について改めて考え、実情を認識してもらえるように小部会を各市町で開催し、それぞれシート原案を作成した。
・各自の立場に立った視点で、実際に利用できるシートを自ら考案できるように導いた。

専門職の動き・反応

・まだ実用化できていないので、住民の動きは確認できない。

仮説・目標の結果

仮説の結果		・様々な専門分野や団体が協働して、地域に合ったシート原案を作り上げることができた。 ・生活課題という、共通のテーマについて考えることで、今まで視野に入らなかった専門職の存在を認識した。その繋がりの有効性も感じ取れた。
目標の結果	タスク・ゴール	・各市町で生活課題に対応する連携シートを作成できた。それを社協職員レベルで１つのシートにまとめた。
	プロセス・ゴール	・日頃、感じていた地域の課題について同地域の人たちと共有することができた。また、研修前に比べ、関心をもって地域を見られるよう視野が広がった。
	リレーションシップ・ゴール	・面識のなかった他の分野・職種の専門職者や、以前より広範囲の地域専門職者と、相談し合える関係性が出来上がった。

ACTION

今後の進め方

・すでに連携シート、連携パスを実用化している専門機関関係者会の意見を聞いてから、再度、シートの３原案をブロックで一つにまとめる。
・個人情報やシートの管理を徹底するため、実施要綱を作成する。
・平成25年度で試験的に実用してみてから検証し、実用化に向けてシートの改良を図っていく。多種多様な方々に活用していただきたい。

資料１

連携シートの原案作成にあたって

第1回目研修後、各市町にて3～4名の小部会を開催し、それぞれのシート原案を作成した。
シート利用者をある程度絞らないと作成しにくいと意見があったので、各市町でニーズが
多くあがってきそうなパターンを想定した。

1.　坂出市の場合：地域福祉関係者（民生委員・地区社協）が相談を受けたと想定し、市社協へ

○だれと（どこで）・・・・地域福祉関係者がわかる範囲で記入⇒市社協へシート受け渡し（情報追加）

⇒　さらに市社協が支援してくれそうな関係機関へつなぐ

○何のために・・・・・・主に一人暮らしの生活困難者（家族はいるが疎遠等も含む）の生活課題支援

○出席者からの意見

- 地域福祉関係者が記入するので、初期的な情報のレベル。他の情報を補うのは社協や包括
- 個人情報の問題
- 本人の話をよく聴き、悩みを聞き出すことが重要
- シートが繋がりのきっかけに⇒特に自治会。加入するまでいかなくてもいいが、自治会長に知ってもらうのが大事　⇒　小地域ケア会議へ

2.　宇多津町の場合

○だれと（どこで）、何のために

地域包括支援センターにあがってきた問題を社協につなぐパターンで作成

○出席者からの意見

- シートへの記入欄が狭い。
- 初回のシート記入者の次に関係機関へつないだ後の更新情報を共有するには、どうすればいいのか。

3.　綾川町の場合

○だれと（どこで）・・・・民生委員や介護予防サポーターが日常生活の中で気になる人を発見し、

地域包括支援センターや社協につなぐ

○何のために・・・・地域で生活課題を抱えた人の支援、一人で悩まないように

○出席者からの意見

- 介護保険認定の有無や、緊急連絡先の記入欄が必要ではないか。
- 気軽に記入できるシートがよい。本人に聞かないと得ることのできない情報は書きにくい。
- 家に吊っておいてみんなが記入できるシートがよい。
- シートは最終的に地域包括や社協が管理すればよい。

4.　第2回研修会における各シート原案に対して、高橋先生からの指導

- 生活課題を抱えているのは一人暮らしや高齢者だけではない。（介護保険だけにとらわれない）
- シート上で解決方法は言及しない。
- シートに不足している社会資源は何かを探る役割
- シートの管理徹底

資料２

生活課題対応連携シート坂出版（案）

シート初回記入者（　　所属・氏名　　）　　記入日

対象者の氏名・性別・年齢・住所

相談ルート　□ 本人からの相談　□ 本人以外からの相談

本人以外の場合：相談者氏名、ケースの挙がった原因や経緯
近所からの苦情（ゴミ問題・徘徊）、郵便物がたまっている、家族親類友人より

○本人からでない場合、他の情報記入の本人確認（承諾）

確認者2名（記入者・社協職員）、確認日

※承諾とれない場合は分かる範囲で

○身体的状況（主だったもの）

既往歴、判断能力、意志疎通、各種手帳

○家族の状況及び家族以外の支援者

緊急連絡先

○日常の過ごし方

働いているかどうか

○経済的状況

収入など

○現在受けている治療（病院）、福祉サービスなど

○本人の生活に対する希望・目標など

裏面

○生活課題のチェック（緊急度）

・日常生活（ゴミだし、買い物、調理、洗濯など）
・管理面（金銭管理、公共料金の支払い、整理整頓など
・他者とのかかわり（近所づきあいなど）
・その他

○早急に取り組むべき生活課題と解決に向けて考えられる支援

例
・買い物困難 ⇒ 宅配業者、デマンドタクシー等
・金銭管理 ⇒ 日常生活自立支援事業

地域で活用・連携が考えられる社会資源等

○次にこのシートを支援の為に活用される方（○○様へ）　○○より

受渡日：守秘(サイン)

受渡日：守秘

受渡日：守秘

資料３

生活課題対応　連携シート（宇多津町）

作成日＿＿＿＿＿＿＿＿

対象者氏名	年齢	住所	連絡先

支援ケースとしてあがった原因、経緯

・本人・親類や民生委員より（　　） ・近隣からの苦情・通報（ゴミ問題、徘徊等） ・郵便物がたまっている ・その他（　　）	（具体的な内容）

現在の身体的状況（主だったもの）	家族の状況と家族以外の支援者（民生員等）
・病歴、通院歴 ・判断能力、意志疎通の有無 ・手帳の有無	（氏名等・連絡先）

日常の過ごし方、家の中の状況等	現在受けているサービス・機関（かかりつけ医、介護サービス等）
	（事業所・機関名、連絡先）

今後必要と思われるサービス・支援	金銭面の問題、経済状況

生活課題チェック項目

・ゴミだし	□できる	□補助があればできる	□できない
・調理	□できる	□補助があればできる	□できない
・買い物	□できる	□補助があればできる	□できない
・掃除洗濯	□できる	□補助があればできる	□できない
・整理整頓	□できる	□補助があればできる	□できない
・金銭等の管理	□できる	□補助があればできる	□できない
・近所づきあい	□できる	□補助があればできる	□できない
他（　　）	□できる	□補助があればできる	□できない

本人の生活に対する希望・目標　・・・・・　どのように聞きとるのかが問題となる

まず取り組むべき生活課題と解決に向けての支援者・機関（本人の希望に留意）

（例）　買い物困難　⇒　宅配業者、デマンドタクシー
（例）　金銭の管理　⇒　社協の日常生活自立支援事業

○　初回シート作成

シート作成者氏名		所属	
連絡先			

○　次にこのシートを対象者の為に活用される方（　～　　様へ）　　～より

資料４

＊気になる人シート＊

シートNo,

綾川町（案）

記入日　　年　　月　　日

記入者

私のなまえ	
私の住所	
緊急連絡先	

ちょっと気になること/感じたこと

解決・未解決

かかりつけ病院・医師	

介護認定　有・無	有　・　無
介護保険利用	有　・　無

家族の気持ち

私の気持ち

シート記入の了承
（ 可 ・ 不可 ）
シート自宅掲示の了承
（ 可 ・ 不可 ）
シート連携の了承
（ 可 ・ 不可 ）
その他

○☆　　様のつながり☆

シートNo,

綾川町（案）

H　年　月　日記入

≪お話した人≫
なまえ
（　　）

家族
なまえ

緊急連絡先

☆家族の気持ち☆

地域包括支援センター
なまえ

綾川町社会福祉協議会
なまえ

民生委員・児童委員
なまえ

介護保険申請
有・無

介護保険利用
有・無

病院名

主治医

連絡先

ケアマネージャー　有り

ケアマネージャー　無し

なまえ
（　　）

（　　）・・・職種・本人との関係等

【助　言】

髙橋　信幸

中讃東ブロックが掲げたテーマは「生活課題対応版連携シート」の作成を通じて、「専門分野を飛び出して繋がろう」と設定された。保健・医療・福祉の連携、そのために共通に使えるツールとしての「連携シート」づくりを目指そうとしたものである。

これに似たものに、筆者が昔在籍していた地方の福祉行政で、「統一福祉台帳」なるものを作成して福祉情報を一元的・包括的にまとめようとした動きがあった。役所の中の組織そのままに縦割りの状態にあった医療（国保・老人医療）情報、年金（国民年金）情報、生活保護・障がい者福祉・高齢者福祉・児童福祉などの福祉情報、各種検診などの健康づくり情報を、住民基本台帳をベースにして一つの台帳にまとめ、各々のセクションのワーカーや保健師などが庁内で連携していく基礎的な資料・ツールにできないだろうかという発想であったと思う。今だったらその気にさえなれば、これらの情報をデータベース化して各々のセクションからの情報をオンラインで結べば常に最新情報に更新し、利用できるであろうが、当時はまだそうした環境は全くなく、常に最新状態の「統一台帳」を手作業で維持することはほとんど不可能に近く、実現しなかった。また、仮に実現したとしても、この膨大な情報をどこが責任を持って所管し、かつ、個人情報が漏洩しないようにどのように保護しつつ活用ができるのか、非常に大きな問題があったであろう。そして、個人情報を統合化して一元管理することの問題の是非は、今では当時よりももっともっと重要視される課題となっている。

しかし、フェイス・シートは共通なのに、分野ごとに記録シートが分かれていると、必要な情報に漏れのないようにそれらを横に結び付けていくのは、今に至るも実際のところなかなか骨の折れることである。ましてや、保健・医療・福祉のそれぞれの専門職同士、さらにはそれらと住民との間を結んでいくとなると、日常的に使用する言葉や概念の意味するところの微妙な違いや専門用語、必要とする情報の違いなど、「連携」をつくるどころか、その逆になってしまいかねない。そこで、中讃東ブロックは（私に言わせれば“古くて、新しい”課題である）連携シートづくりをテーマにしたものと思われる。

連携シートづくりを目指したこうした趣旨・動機は非常によくわかるのではあるが、その後の具体的な進行と今後の方向性については、以下に2、3指摘をしておきたい。

第1に、研修の中でも指摘したように、「誰と・どこで・何のために」連携するシートなのかを、もう一度全体で確認し、統一的に共通認識を持つべきであろう。11月16日の第2回ブロック研修会では坂出・宇多津・綾川から連携の相手も含めてそれぞれ異なるイメージで設計されたシート原案が提示された。現在はこの三原案を中讃東で一つにまとめる方向性は出されてはいるが、やはりもう一度「誰と・どこで・何のために」連携するシートなのかをしっかり確認しないと、統一的な連携からはどんどん離れていってしまうのではないだろうか。前述の「統一福祉台帳」は、各々のセクションのワーカーや保健師などが庁内で連携していく基礎的な資料・ツールにしたいという目的があった。中讃東ブロックの連携シートは、「言葉の違う」専門多職種同士の

連携や、住民リーダーとの連携をつくり出す基礎的なツールであってほしいし、高齢者に限らず、地域で暮らしにくさを抱える人々の課題解決に役立つものであってほしい。

第2に、目指すべき連携シートは、まずは中讃東ブロックの中でテスト的な試用期間を経て修正を加えるにしても、目標としては香川県全県で、そして四国全体で、さらには日本中で使用に耐ええるようなものとして完成度を高めることを目指してほしい。何回も指摘しているように、保健・医療・福祉（これからは司法や更生保護、教育も含まれていくであろう）を横に貫く共通言語を持った統一的な連携シートの必要性は古くて新しい課題であり、今に至るも未完の課題である。誰もがその必要性を認め、部分・部分では実現しつつも、包括的なものは存在しない。ぜひとも中讃東ブロックの実践の中から創りだしていただきたい。

第3に、連携シートをどのように設計するのかだけではなく、どこがどのように責任を持ってそれを管理し、運用するのか、その運営体制についてもぜひとも併せて研究するべきである。これも上述のとおり、「個人情報を統合化して一元管理すること」は非常に大きな問題であり、責任を伴う。このことを除いては、どんなに完成度の高い「連携シート」も実用化されないであろう。

ともあれ、こうした課題を中讃東ブロックの皆さんは今後どう発展させていくのか。25年度、26年度の展開が楽しみである。

事例５　中讃西ブロック

事例タイトル

顔の見える専門職間の連携から、困難事例など、日常的に課題を共有化できる機会をつくり、地域ケア会議をめざす

事例概要

中讃西ブロックは、定住自立圏域構想があり、丸亀市が中心市を宣言。近隣の１市３町が提携している。医療・保健・自立支援協議会など県・行政サイドのゆるやかな連携は以前からあるが、社協（５ヶ所）・社会福祉法人（39ヵ所）・包括支援センター（５ヶ所）・医師会（仲多度・善通寺市・丸亀）などにおいては、中讃西でつながりの場はなかった。

生活課題を抱えている地域住民が孤立しないように、日常的なつながりを強め、お互いの支えあいの中で安心した生活を続けられることのできる地域社会を、住民や行政、関係団体とともに作っていくことが、ますます重要となっている。そのような中で、地域福祉実践を担う関係者が、地域における様々な課題を共有し、日常的な支えあいネットワークをつくり、実践していけるしくみづくりを通して、課題に対して共通の視点をもった地域ケア会議ができることを目指し、２回のブロック研修を開催することとした。

キーワード

顔の見える関係づくり

共通する生活圏域において、今後どのような連携が必要か？

地域データ

中讃西は、瀬戸内海・飯野山・土器川・満濃池・などの豊かな自然に囲まれた地域で、丸亀城・総本山善通寺・金刀比羅宮・桃陵公園・満濃池など、伝統や文化が日常の風景や生活に溶け込んだ地域です。

対象地域	丸亀市	善通寺市	多度津町	琴平町	まんのう町
人口規模	110,631	33,698	23,603	10,146	19,942
世帯数	43,438	13,025	9,791	4,356	7,174
65 歳以上高齢化率	22.53%	26%	26.8%	32.32%	30.29%
老人福祉施設・事業所数	74	36	11	13	28
障がい者関係施設事業所	24	7	1	1	1
児童関係施設・事業所	35	9	9	5	8

PLAN

仮説と目標

[仮説]

中讃西は、医療や生活圏は共通部分が多い。また各市町に同様の資源が多く、専門職は多いが、選択できる資源が少ないという地域課題がある。専門職が既存の福祉サービスだけでは解決できない個別の困りごとを、住民を含めた地域の課題として認識できる場がないために、サービス開発につながっていないのではないかと仮説をたてた。まずは５つの社協が連携し、コアになることで、多機関の専門職との日常的なネットワークを活かした呼びかけ役、コーディネーター役となり、ソーシャルワークの機能を活かし、共有化できる場をつくる。そして、そのことを通して、各市町において、地域ケア会議の土台となる専門職も連携した、住民との協働での課題解決プロセスを構築できるのではないかと考えた。

[目標]

タスク・ゴール

個別課題における困りごとを共有化する場をつくり、地域ケア会議を開催する。
連携をすることの必要性を感じ、顔の見える関係づくりをする。

リレーションシップ・ゴール

・地域内での「社協」の役割や位置づけが明確になり、社協と専門職とのよりよい関係が構築される。
・相談支援の専門職が互いに集い、課題を共有化し、連携をしやすい風土をつくる。

プロセス・ゴール

・社協間で、顔を合わせる機会をつくるため、５社協間で、ブロック研修に向けて協力体制をつくる。
・各社協のネットワークから、相談支援の専門家がいる部署、関係機関へ案内状を発送し、周知広報する。連携を深めるきっかけづくりとする。

プロセスチャート

6月総会での気づき

・5つの市町が集まると関係者が多い。まとまるかな？
・多機関のメンバーが、定期的に集まることは
　まだむずかしいな…お互いの状況わからないし…
・CSWの視点が共通認識されてないかも…
・事例検討ができる条件が整っていない（信頼関係・様式・視点など）

★できることから始めよう！
・5つの社協が集まろう！
・今年は社協がコアメンバーとなり、研修を企画する。

5つの社協が、はじめて集まった！

7/17　社協職員情報交換会（1回目）

・情報交換・課題と思っていること
・相談支援体制
・ニーズキャッチの仕方

8/2　社協職員情報交換会（2回目）

・昨年、中讃西ブロックの事業所一覧を作ったね～
・日ごろのネットワークを活かす
　（案内、シンポジストの選定、依頼）
・共通のワークシート作成（課題をわかりやすくする）

●主体的に動けるようにした

●ソーシャルワーク機能に注目しシンポジウムを企画

9/10　第1回 中讃西ブロック研修会　開催

・6名のパネリスト（MSW・障がい・ケアマネ・保健師・SSW・社協）
・他職種・他機関から、80名参加

「連携が必要」が共有化された

・具体的な医療との連携のコツを知った。
・CSWがわからないから来たという人あり。
・「つないで終わりではない」問題の背景に目を向ける。
・もっと他機関の役割・現状を知りたい。

10/15　社協職員情報交換会（3回目）

・連携が必要！を実感できるには?
・「連携してよかった」を多職種・他機関でどのように実感するか？
・参加者の生の声を聞いてみる。

第2回目ブロック研修の企画は・・・

・ゲーム感覚で名刺交換・事業所の紹介などできるアイスブレイクを取り入れる。
・日ごろ抱えている「どうにもならない課題の解決のヒント」をみつけるため、困っている事例を持ち寄り、事例検討する。

「えっ事例だすの」に一工夫！
CSWの基礎研修を受けていない方も多い中讃西。①ワーカーとしての困ったことを中心に書く。②制度では解決できないことに注目できるシートを作成。

11/20　第2回 中讃西ブロック研修

「地域の暮らしを支えるソーシャルワーク機能」

《感想より》
・解決できない困りごとがあったから参加した。
・同じような困りごとを抱えていた。
・地域の人との関わり方がわからない
　事例検討を通し、個別の課題を共有化できた。

12/14　社協職員情報交換会 ふりかえり

・事例検討を継続したい。
・地域の課題として課題を認識するにはどうするか？
・チームアプローチのイメージをどうやってつくるか？

DO

専門職のネットワークづくりに向けて相談支援にかかわる専門職を知ろう。

（第１期）

年月日	経　過 （主な事柄・働きかけ）	ワーカーの意図・想い	決まったこと・成果・課題
24. 6. 23	香川ＣＳＷ総会・研修会へ参加 ①困っていること ②あったらいいなサービス ③地域の事例について意見交換をする。	参加者が中讃西ブロックの研修会開催に向けて協力メンバーとなるよう地域の課題ついて考え、ブロック研修の内容を見い出したい。	一番つながらなくてはいけないのは、社協職員。社協で集まる機会を持ち地域での課題・今抱えている問題について意見交換の機会を持つ。
24. 6. 23	社協職員情報交換会事前打合せ会	中讃西ブロックの各社協の職員が集まることで、地域や社協の課題を共有できる。 各市町からのブロック研修のコアメンバー体制を作りたい。 長期的に専門職がつながることで、どうにもならない課題の解決のヒントがある場がつくれたらいいなあ。	社協職員が中讃ブロック研修会でのコアメンバーとなり体制をつくる。 中讃西として、日常的な支え合いネットワークづくりのために今からすべきことを市町社協のメンバーからの意見を集約し、研修内容に反映させる。
24. 6. 24	各社協の事務局長等へ趣旨の説明を行い、日程調整と職員の参加を呼びかける		
24. 7. 17	中讃西ブロック社協職員情報交換会（第１回） 事業趣旨について説明し、自己紹介の後、各社協の強み、課題について話し合い、ブロック研修に向けての研修テーマ及び概要を決める。	テーマをもって取り組んでいけるよう各社協の課題について話し合い共通理解を進めたい。専門職のネットワークづくりのための研修内容としたい。事例検討は、できる条件が整っていないように感じる。（事例検討ということだけで拒絶反応？どんな研修会かわからないので事例提出してもらえるのか？様式や事例出し方をきちんと決めたほうがいいか？）	中讃西ブロックの社協職員が集まり意見交換したのは初めて、課題が多く、研修テーマを絞り込めなかった。 地域ケアシステムに向けて、まず地域のニーズ発見のしくみづくりが必要（気軽に相談できる窓口／ニーズを受けとめるしくみ／情報を共有するためのツール（インテークシートなど）／地域で気になる人を把握するシステム）
24. 8. 2	中讃西ブロック社協職員情報交換会（第２回） 前回のまとめ、振り返り。研修会の運営方法（研修内容・パネリスト・案内）今後の日程、役割分担を決める。	社協に地域のニーズはあがってきているのか？社協が相談援助の専門家として地域から見られていて、また地域とつながっているのか？相手の活動を理解して連携できているのか？中讃西地区の社協職員の協働により、この研修会の運営を行い成功させることを共通認識させたい。	相談支援援助の専門職の方々に各自の活動内容についてのパネルディスカッションをする。パネリストは６名、普段各市町社協が関わっている相談支援の専門職について、つながりを生かし選定する。パネリストが効率よく話せるように共通ワークシートを作成する。専門職の方々にコミュニティソーシャルワークについて理解してもらう機会とする。
24. 8. 21	各社協へ案内状、要綱、チラシを配布し、各社協通じ市町内の関係機関・団体へ案内を依頼する。	各社協の持っているネットワークを利用し案内することで、つながりが深まり参加者が増える。	案内先は、地域福祉にかかわる専門職及び相談支援業務にかかわっている人。各市町社協で決める。案内状は持参するなどして参加を促す。

24. 8. 21	パネリストへの依頼及び打ち合わせ	共通ワークシート（※資料１）により、限られた時間の中で自分の職務・考えを発表できる。研修会及びパネルディスカッションの意図をパネリストに知らせる。	共通ワークシートは、資料として当日のレジュメに掲載。また、参加者にも様式を配布し自分の業務との比較ができるよう記入してもらう。
24. 9. 9	打ち合わせ会	講師の先生と資料の確認・研修会の運営の打ち合わせ。	パネリストへの質問票を参加者へ配布する。
24. 9. 10	中讃西ブロック研修会（第１回）琴平町公会堂にて開催 参加者数　80名 テーマ「地域の暮らしを支えるソーシャルワーク機能」 ・講義 ・パネルディスカッション パネリスト６名 （ＭＳＷ・障がい者相談支援専門員・包括ケアマネ・保健師・スクールＳＷ・社協職員） ・アンケート	達成目標として、①参加者がコミュニティソーシャルワークへの理解を深める。②専門職の実践にから多様なニーズや発見のヒントを得る。③顔の見える連携の必要性を理解し、今後の業務に生かせる。とした。	連携は、つないで終わりではない。連携という言葉を使っているだけで連携している気もちになってしまっていないか？地域での連携がなければ地域での暮らしを支えることができないということは共通理解できている。ソーシャルアクションをおこし、ネットワークをつくっていくことが専門職の役割。

専門職同士の顔の見える関係を作ろう

（第２期）

年月日	経　過 （主な事柄・働きかけ）	ワーカーの意図・想い	決まったこと・成果・課題
24. 10. 9	打ち合わせ会 社協職員情報交換会で協議する内容について事前に打ち合わせる。	第１回目では、「連携が必要」ということを職種間で共有した。今後の具体的な連携に向けての研修内容を企画するために、あらかじめ役員同士で内容を検討しておく。	第１回目は、参加者同士のかかわりがなく受け身の研修であったため、ゲーム感覚のアイスブレイクを取り入れ、事例検討を行う。参加者同士が身近に意見交換できる研修会にする。
24. 10. 15	中讃西ブロック社協職員情報交換会（第３回）ブロック研修第１回のアンケート結果及び成果・課題と第２回の研修テーマなど企画概要	役員会でのたたき台と社協職員参加者の生の声を聴き、第２回の企画を話し合う。お互いの事例を出し合うことで、他市町の事業について知ることができる。	グループワークでは、視点がぶれないようにまた、具体的な連携のヒントが見つけられるようにミニ講義を位置づけ、その後、事例検討のグループワークをする。
24. 10. 25	事例ワークシート参考様式（※資料２）作成	参考様式を示すことで、研修会に参加しやすくなるのではないか。	ジェノグラム、エコマップ、困っている内容について簡潔に記入できる様式にした。
24. 10. 29	各社協へ案内状、要綱、チラシを配布し、各社協通じ市町内の関係機関・団体へ案内を依頼する。	事例提供と研修会への参加意識を高める。	前回と同様の案内方法。前回参加者や各社協のネットワークにより案内する。

24. 11. 18	打ち合わせ会 講師の先生と研修会の運営の打ち合わせ。	グループワークをどのように進めるかどんな事例が集まるのか当日でないとわからない。事例発表のワークシートを作成することでグループワークの意見交換が活発になる。	講師の先生の指導によりワークシートを作成。事例の概要、解決すべき課題、解決方法への提言について話し合う。
24. 11. 20	中讃西ブロック研修会（第２回）琴平町公会堂にて開催 参加者数　28名 テーマ「地域の暮らしを支えるソーシャルワーク機能」 ・アイスブレイク ・講義 ・グループワーク ・事例検討 （各自が持ち寄った事例） ・発表 ・講評・まとめ ・参加者へのアンケート	達成目標は、①参加者が他の専門職の実践通し参加者自らの実践を振り返り、②地域で共通した課題に気付く。③顔の見える連携により、地域課題に対応できる新しいサービスを構築していくコミュニティソーシャルワークの視点を持つ。とした。	同じような課題で困っていたことが事例を通して分かったが、地域としてその課題をどう受け止めて解決していくのかまでのグループワークには至らなかった。アイスブレイクの効果や４，５人の少人数での事例検討だったので参加者同士がなごやかに意見交換でき参加者の満足度は高かった。このような事例検討を繰り返し実施していくことや市・町レベルでの会議も必要ということが見えてきた。
24. 12. 14	中讃西ブロック社協職員情報交換会（第４回） ・成果と課題について	参加者のアンケートを回覧し、本年度の研修を振り返り話合う。成果・課題についてまとめ、今後の方向性や社協が中心となり取り組むことへの共通認識を持つ。社協の職員がつながれるように。組織として参加するようにすすめられたという話を聞き、連携が少しずつ進んでいることを感じる。	集まる機会ができよかった。ワークシートにより事例検討できた。地域でよく似た事例があり、地域の課題として取り組む必要あり。今後も繰り返し行っていくことで、何か一緒にできるのではないか？事例検討は、他の専門職の方の考え方も聞けて勉強になった。顔見知りになったので、今後職務上の連携がしやすくなった。 事例検討を行う際の個人情報の出し方について検討する余地あり。
24. 12. 22	打ち合わせ会 本年度の事業の評価、課題について意見交換する。	課題をひとつひとつクリアしていくことが大切。	社協への期待は大きい。職員がＣＳＷの資質を身に着ける。
25. 1. 9	各ブロックの取り組み報告会	中讃西ブロックの取り組みについて報告する。他ブロックの手法、成果を知り今後のブロックでの取り組みについて考える。	

CHECK

ワーカーの動き（アプローチ・仕掛け方）

・５社協で、集まる機会をつくり、現在の課題、社協の現状について共通理解を図った。
・相談支援機関への連絡調整を通じ、専門職同士の出会いの場を設定した。

専門職の動き・反応

・社協内部において…総務・地域・介護の各担当に、ブロック研修の参加を呼びかけた。地域福祉を社協全体として取り組める雰囲気ができた。
・今まで、近くて遠い関係機関に声かけできる機会になった。
（地域包括支援センター、保健師、子ども関係の相談専門員　など）

仮説・目標の結果

仮説の結果		・「コミュニティソーシャルワーク」が何か？理解するきっかけになる場ができた。 ・事例を持ち寄る場ができた。
目標の結果	タスク・ゴール	・地域での連携がなければ、地域での暮らしを支えることができないことを確認できた。１回目は80名という参加者数であった。 ・２回目では、顔の見える関係作りを具体化し、経験できた。
	プロセス・ゴール	・５つの社協が集まる機会を４回開催した。その機会を通し、社協の役割・機能から考えるニーズキャッチ、相談を受けたときどのように動いているかなど共有化する機会となった。 ・普段のネットワークを広げるきっかけとなった。
	リレーションシップ・ゴール	・社協の役割・機能を広く、アピールすることができた。 ・一人ひとりの生活課題を抱えた人への支援だけで対応できない課題があることがわかった。

ACTION

今後の進め方

・事例検討の場をくりかえすこと。（他機関・他職種間での連携）
・関係機関が役割・機能を理解し、個別の課題を地域の課題へ普遍化できる機会が必要。（問題の糸口を具体的に整理し、実践の場を経験する）
（コアメンバーをつくり、プロジェクトを企画・実践・評価などプロセスを経験する機会・場）
・障がい分野における自立支援協議会との連携
・コーディネーター役として、社協に対しての期待あり。社協組織内でどのように対応？
（社協間でのつながりのため、継続した情報交換会の実施／アイスブレイクなどスキルの勉強／現場担当者が出られるしくみづくり）
・コミュニティソーシャルワークの視点を勉強する人を増やす。（人づくり・場づくり）

資料１

共通ワークシート　　中讃西ブロック研修会　9月10日

＊この資料に基づいて、一人10分程度　お話いただけたらと思います
＊当日の資料となります

所属 ＿＿＿＿＿＿＿＿

職名 ＿＿＿＿＿＿＿＿

資格 ＿＿＿＿＿＿＿＿

氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿

1	日常の業務 (簡潔に！)	
2	日常のニーズの把握の方法は？ (ニーズキャッチ)	
3	アセスメントをどうしているか？ (アセスメントシートはあるorない)	
4	中讃西での 連携の必要性について どう思うか？	
5	現在、連携できていると思うか？	
6	どういう、連携を望むか？	
7	6)の質問について、そのために必要なことは何か？	
8	今後どういうことをかんがえたいか？	
9	その他	

資料２

事 例 の 概 要　(所属　　氏名　　)

支援対象者		年齢		性別	
エコマップ		ジェノグラム			

困っている状況について各状況ごとに記入	
(　　状況)	(　　状況)
(　　状況)	(　　状況)
(　　状況)	(　　状況)
(　　状況)	(　　状況)
(　　状況)	(　　状況)

【助　言】

高橋　信幸

やはり「専門職間の連携」づくりをテーマの中心に置いた中讃西ブロックの場合は、9月10日と11月20日の2回のブロック研修への数多くの専門職・民生委員・町内会リーダーの方々の参加もさることながら、その準備や振り返りのためにそれらに前後して4回にわたり開催された「社協職員情報交換会」にかなり大きな意義があったように思われる。

というのも、ブロック報告の中に「中讃西ブロックの社協（2市3町）職員が集まり意見交換したのは初めて」という、当事者の驚きと感激（？）に満ちた記述があり、香川ＣＳＷ実践研究会のすばらしい取組みをかねがね見聞していた筆者としては「えっ、ほんとうに?!」という驚きを禁じ得なかったからだ。専門職間のネットワークをつくろうというとき、定住自立圏域構想のもと行政の提携が進められているというなかで、「社協（5ヶ所）・社会福祉法人（39ヶ所）・包括支援センター（5ヶ所）・医師会（仲多度・善通寺市・丸亀市）などにおいては、中讃西でつながりの場はなかった」（「ブロック報告」から）というのは、にわかには信じがたい思いもする。しかしだからこそ、まずはできることから始めようと5つの社協職員の集まりを持ったのであろう。

そうした意味では、専門職間の連携、多職種間の連携の基礎的な基盤として、まずはブロックの社協職員間の連携をつくろうとしたものであろう。5つの社協の職員がこのブロックのコアメンバーとして研修を企画するための開催した4回の情報交換会は、概ね成功したといえるのではないだろうか。9月10日の第1回研修会の6人の多彩な分野のパネリストは、各社協の日頃の活動ネットワークを生かして選出され、多くの職種機関から約80人もの参加者を集めることができた。この成果は11月20日の第2回研修に反映され、1回目の「受身的な研修」から一歩前に出て、参加者が具体的な事例を持ち寄って互いに検討する企画も立てられた。事例を出すことに苦労された参加者もいたようであったし、ＣＳＷ研修を受けていない参加者にあっては必ずしも深めたカンファレンスができていたとは言い難いグループもあったが、それでも当日のアンケートから「解決できない困りごとがあったから参加した」「同じような困りごとを抱えていた」等の感想が寄せられ、12月の昨年最後の社協職員情報交換会で「事例検討を継続したい」或いは「地域の課題として課題を認識するにはどうするのか」という意見が出されたことは貴重である。ＣＳＷ実践の研修を続け、ブロックの社協職員を中心とした専門職の資質を向上させていく努力を今後ともぜひ継続していただきたい。

このように中讃西ブロックの取組みは一定の成果を収めることができたのは間違いないが、さらにここからもう一歩前進し、ブロックの専門職間の連携を実のあるものとしていくために、福祉行政のワーカー、地域包括支援センターの専門職との連携づくりを提起しておきたい。

11月の第2回ブロック研修参加者25人のうち、地域包括支援センターに所属する職員は2人の介護支援専門員が参加したのみで、社会福祉士も保健師も参加がない。ま

た、ブロック内の福祉事務所や町役場の福祉課に至っては一人の参加もない。「地域での暮らしを支えるソーシャルワーク機能」を掲げたブロック研修としては、はなはだ心もとないとは言えないだろうか。地域の絆を創り出し、暮らしを支える責任が真っ先にあるのは市町村であり、行政と民間、住民の連携と協働、福祉行政と地域包括支援センター、保健所と、社会福祉協議会、社会福祉法人事業所、医療機関などの専門機関・専門職と、地域に暮らす人々との連携と協働がなければ、それらは有効には成立しえない。社会福祉協議会職員や地域の福祉施設職員がここまで積極的に福祉コミュニティづくりに動いているのに、このブロックの行政の眼は一体どこに向けられているのか。また、今回のブロック研修企画の中心的なコアメンバーであった社協職員の方々は、どこまで積極的に行政や地域包括に働きかけたのであろうか。

特に地域包括支援センターについては、香川県の場合、ほとんどが行政の直営とのことであるが、この機関が文字どおりに地域住民の生活を包括的・総合的に支援していく中心機関となるように、社会福祉協議会を中心として地域の民間機関や住民がもっともっと介入していくことが必要ではないだろうか。現在の地域包括支援センターはその設置根拠が介護保険法にあるとはいえ、地域の様々なインフォーマル資源とのネットワークづくりや、高齢者に限らないワンストップの相談支援体制づくりが求められており、その延長上には地域福祉、コミュニティソーシャルワーク展開の中心的な機関として成長していく方向性すら見て取ることができる。ＣＳＷ実践者が積極的に関わり、連携していく、そして、地域包括支援センターの専門職の方々もＣＳＷ実践者になっていくことが求められるであろう。

中讃西ブロックの今後の取組みを興味深く見守らせていただきたい。

事例6　三観ブロック

事例タイトル

「定期的に集まる場を作り、地域を支える意識を共有化する」
～会議の定例化を目指して～

事例概要

地域には様々な課題があり、住民と専門職が共有することで地域を良くする活動を行っていかなければならない。

そのような中で、三観ブロック（三豊市・観音寺市）は、昨年まで行われていた様々な研修で顔を合わせていた社協職員・施設職員・行政職員などが、その後も日常的に交流を続けていたこともあり、今年度の取り組みとして、まず専門職が集まる場（会議）の定例化を目指して取り組むこととした。

また、地域で行われている具体的実践や、この集まりがきっかけで始まることとなる新たな取り組みについての情報共有を行ったり、それぞれの実践に関わっていったりすることを目指してブロック研修などに取り組んだ。

キーワード

専門職等の連携、情報の共有、集いの定例化、インフォーマルな活動
香川県一人暮らし高齢者等対策事業（声かけ見守り・居場所づくり）
認知症デイケア

地域データ

三観ブロックは、三豊市、観音寺市で構成されている。両市とも平成の大合併を経験しており、合併の枠組みにあたっては紆余曲折があった。

三豊市は7町合併、観音寺市は1市2町が合併と、両市とも比較的規模の大きい合併であったため、合併後の町づくりについては、現在も動き続けている現状がある。

同ブロック内でも沿岸部、平野部、山間部と多様な自然環境があり、また有人島も有しているなど多様な地域環境であることから、地域の状況は様々である。

また、人口は減少傾向にあり、高齢化率は高い。

項　目	三豊市	観音寺市
人口(住基)	70,142 人	63,790 人
高齢化率	30.4%	27.8%
自治会数	540 自治会	267 自治会
地区社協数	24 地区	13 地区
民生委員児童委員数	152 人	122 人
主任児童委員数	14 人	23 人

PLAN

仮説と目標

[仮説]

地域福祉に関心のある三観地域の関係者同士が集う場をつくり、定例化することで、お互いが情報交換できたり、課題の共有ができるのではないか。

また、課題を解決するための新しい実践がうまれるのではないか。

そこで、研修などの集まりや日常の交流に重点をおいて取り組み、顔の見える関係を目指した。

[目標]

タスク・ゴール

・三観地域の地域福祉関係者が集まれるようになる。
・複数の機関で関わった実践がはじまる。
・実践を共有する。

リレーションシップ・ゴール

・ブロック会議等の研修を定期的に開催することで、新たな参加者を迎えることができ、繋がりの輪が広がる。
・地域住民との関係が深まる。

プロセス・ゴール

・参加者が自主的に「つながる」ことを意識し行動する。
・地域の課題を連携によって解決するという意識が定着する。

プロセスチャート

三観ブロック参加者　６月　ＣＳＷ実践研修会《基礎編》
この研修参加者が中心となって定期的に集まるなどの活動を続けていこうと確認

お互いが連絡を取り合い、情報交換などがはじまった。
（課題や取り組みたいことが漠然と見えてくる）
介護予防サポーターフォローアップ研修を活用できないか協議

三観ブロック会議 → 三豊市・三豊市社協

要援護高齢者を支えるしくみを考えていきたい。
インフォーマルなサービスを知りたい。

三豊市社協・デイケア

認知症デイケアの取り組みがはじまる

三観ブロック研修（第１回・第２回）
参加者が増える。実践者（ボランティア）も参加。新たな取り組みについて共有。

集う場が継続されるよう働きかける。

「声かけ見守り」４チーム
「居場所」２か所
ブロックメンバーに情報提供。

三豊市・福祉関係者の連携等研修会
参加者がさらに増える。「声かけ見守り」「認知症デイケア」の活動報告と、次年度以降の、「私たちの」活動について話し合う。**⇒定例化することで一致。**

DO

ＣＳＷ実践研修～第１回三観ブロック研修まで

（第１期）

年月日	経過（主な事柄）	ワーカー（実践研究会）としての関わり	フォロワーの反応
24. 6. 23	ＣＳＷ実践研修会 参加者と情報（思い）を共有する。 ・インフォーマルな活動についての情報共有が出来ていない。 ・高齢者（特に元気な若年層）の居場所が無い。 ・地域で孤立・孤独の問題を抱えている人への対応が少ない。 ・専門職等が「地域」をくくりとして集まる機会が無かった。	参加者の話を聞いて、三観地域の課題を整理。 ・参加者に対し、これから継続して三観ブロック会議へ参加・協力を依頼する。 ・今回は高齢者分野からの参加者が多かった。また、社協以外からの参加者が半数である。参加者がまずつながることを目指す。	・三観ブロック会議参加を承諾（集まることに抵抗は無かった）。 ・お互い知らないことが多いと感じた。 ・それぞれが抱える課題は似ている。 ・お互いが顔の見える関係になれば支援に役立つかもしれないと実感できた。
24. 7. 17	三豊市介護予防サポーターフォローアップ研修打ち合わせ会 研修のテーマを「一人暮らし高齢者等の声かけ見守りグループ結成」にすることが決まる。	高齢者の孤立・孤独の問題を抱えている人への対応が課題にあることを説明。 ・声かけ見守り事業は「連携」のきっかけになる。	県の『一人暮らし高齢者等対策事業』を活用すれば、地域のニーズに応えることは出来るが、他のサービス等との連携ができていなかれば効果的ではない。 ・情報発信。
24. 8. 1	三観ブロック会議 参加者：６／23研修に参加したメンバー ・研修の振り返りと今後取り組みたい課題について話し合う。 ・ブロック研修テーマを『「絆づくり」実践への計画作り』とする。	それぞれの課題をもう一度出してもらう。 ・課題を解決するために連携を深めていくことは有効であると説明する。 ・それぞれが抱えている課題の共通点を探る。	・高齢者の見守りや居場所づくりの活動が広がって欲しいし、広がるように協力したい。 ・今後は具体的な実践事例をブロックで作りたい。
24. 9. 21	第１回ブロック研修 社協：11名 行政：３名 福祉専門職等：５名 合計：19名	【内容】 ・実践活動に向けての具体的一歩についての講義 ・グループワーク（ワーカーの強み弱み～支えが必要な人について～本人の暮らす地域について、ワークシートを使って作業） 講義・グループワークを進める中で、三観ブロックの現状や今後必要なことについて確認できた。 【アンケートから】 ・課題を整理することができた。 ・三観地域で行われているインフォーマルな活動の実践事例を知りたい。	

第１回三観ブロック研修～第２回三観ブロック研修

（第２期）

年月日	経過（主な事柄）	ワーカー（実践研究会）としての関わり	フォロワーの反応
24. 10	ブロック会議メンバーの西香川病院職員より、認知症デイケア利用者で活動性の高い方が活動できる場を地域に求めたいと相談を受ける。公民館での活動が出来そうなので、話し合いの場を設定する。	研修や会議を重ねてきた結果として相談が始まった。新しいサービスがスタートする過程を実践事例として三観ブロックで共有したい。 単に活動場所を見つけるだけではなく、地域に認知症の理解を求めるなど、地域課題にも対応した取り組みとしたい。	
24. 11. 9	公民館との打ち合わせ ・受け入れはOK。 ・花壇等の清掃や植替えなどを依頼。 ・細かいことは今後詰めていく。	それぞれの思いと立場は理解した上で、前向きに進めるよう提案。 ・活動を進めるに当たり障壁となることをお互いが理解する。	公民館 ・地域で同様の活動をするグループへの配慮が必要。予算が無い。 デイケア ・認知症の症状を理解してもらい、接して欲しい。
24. 11. 12	三観ブロック会議 ・第２回ブロック研修の進め方を確認する。 ・アンケートの結果から、実践事例の紹介をプログラムに盛り込む。	講師のアドバイスやアンケートの結果から、インフォーマルなサービスを行う実践者にも参加してもらうようにした。	地域の方と接する機会は、自分たちでは作りづらかったので、参加してもらって話をしたい。 サービスを見に行きたい。
24. 11. 14	三豊市介護予防サポーターフォローアップ研修（声かけ見守り事業実践予定者に対する研修）	・多少混乱があった。 ・活動グループごとに個別対応が必要。粘り強く関わっていく。 ・意識の高い住民が集まっているので、必ず実践に繋げなければならない。	一人暮らし高齢者に対する取り組みが必要であることは一連の研修を通じて理解できている。やり方がわからなかったので今回の研修をきっかけに具体的に取り組むことが出来そうだと感じた。
24. 11. 19	第２回ブロック研修 社協：７名 行政：４名 福祉専門職等：５名 地域住民等：６名 合計：22名	【内容】 ・連携事例・実践例紹介 居場所づくり、声かけ見守り、デイケアの取り組みについて紹介 ・実践への計画作りについての講義 ・意見交換会 ある施設では、ＣＳＷの一連の研修をきっかけとして「地域に出ていく」実践を行うようになった。施設の会議室を地域に開放したり、職員の特技を活かして地域（サロン）へ出向く。地域の方に来てもらう（支援してもらう）だけではだめ。 ある在介では、訪問ボランティアがマンネリ化している。施設でボランティア登録しているのでリストを共有できないか検討してみることに。 小地域ではあるが、高齢者の見守り活動が定期的に行われている事例が紹介され、支援者側の関心が集まっていた。	

研修後から現在まで（三豊市の取り組み）

（第３期）

■　高齢者見守りチーム　　４チーム結成され、社協職員がサポートしている。

■　居場所づくり事業　　２か所はじまり、情報提供している。

■　公民館での活動　　定期的な活動になる。公民館活動に、清掃に参加している方だけでなく、デイケア利用者が誘われて参加できるようになった。一方で、多くの交流が生まれたことで認知症に対する理解をさらに深めていく必要ともなり、同テーマの講座開催について公民館と話し合いを行っている。

『三豊市・福祉関係者の連携等研修会』

２回のブロック研修を実施したことにより、参加者の意識が高まっている背景があることや、高齢者の見守り活動の状況、また25年度の取り組みについての協議の場として、追加の研修会を企画した。

開催日　：　平成25年２月22日（金）
場　所　：　三豊市山本町保健センター
主　催　：　三豊市社会福祉協議会
内　容　：　報告「地域福祉実践の取り組みについて」
　　高齢者見守りチーム代表者から報告
　　講義「地域福祉実践者との連携について」
　　講師／國光登志子　氏
　　次年度に向けての意見交換会

■その他、参加者の所属する施設が地域とのつながりを求めて具体的に動き始めたり、参加者がお互いに相談できる関係になり、25年度以降も、このような集まりを継続したい（定例化）することで意見はまとまっている。

CHECK

ワーカーの動き（アプローチ・仕掛け方）

・ブロックメンバーへは、電話・メールなどを通じて、連絡調整や情報の提供に努めた。
・意見を聞き、それぞれの参加者・施設の主体的な動きを支えるよう努めた。
・ブロックメンバーはある程度絞りつつも、会を重ねるごとに少しづつ理解ある参加者を増員していった。

ブロックメンバー・住民の動き・反応

・ブロックメンバーは通常業務がある中、会議等で集まる際には、日程調整をしていただき参加していただいた。一方で、研修や会議に参加する難しさがあることを感じた。
・連絡を取り合ったり研修等で話をすることで、インフォーマルな活動の重要性がお互い確認でき、また、なんらかの形で協力し合わなければならないという雰囲気が出てきた。

・会議の定例化については一致しており、さらにブロックメンバーそれぞれが主体的に動くという意識が生まれている。

仮説・目標の結果

仮説の結果		・定例的に集まると自然と情報の共有や協力関係が出来上がり、些細な相談などをお互いが出来るようになった。 ・課題が見えてくると、新たな実践がはじまった。
目標の結果	タスク・ゴール	・２回のブロック研修とそれに向けての会議や調整を行い、また３回目の研修を実施したことで、ブロックメンバーの意識は高まり、集まりの定例化は実現すると思われる。 ・社協と認知症デイケアとの実践をはじめ、それぞれのメンバーがお互い協力し合い実践がはじまっている。 ・研修だけではなく、メール等で実践の経過を報告等で共有化できている。
	プロセス・ゴール	・ブロックメンバーそれぞれが自主的に会議に関わってくれるようになってきた。 ・施設等の課題が地域での課題として捉えることができるようになった結果、ブロックメンバーと連携して解決しようとする行動に繋がってきた。
	リレーションシップ・ゴール	・それぞれの会議や研修ごとに意志統一を図っていたので、新たな参加者とのずれも比較的少なく、徐々にではあるが参加者が増えてきている。 ・研修ごとに地域の実践者にも参加してもらうようになり、ブロックメンバーと地域住民が直接話し合うことも出てきた。

ACTION

今後の進め方

・ブロックメンバーの多くは、今年度の研修に継続的に参加していただくことができ、参加者の意識は比較的高まっていると感じる。集まりを定例化し、地域の課題に取り組んでいきたい。
・新たな実践としてはじまった認知症デイケアと公民館との取り組み事例などについては、この定例会の中で継続的に関わっていきたい。
・定例会の目的をさらに具体化する必要があるのではないかと思われる。最後の研修時に次年度の取り組みとして、「地域ケア会議」を意識した活動や、この定例会のメンバーが具体的に活動してみてはどうかなどの意見が出た。
・三豊市と観音寺市という大きな市で構成されたブロックであったが、市担当課との協議などでは、両市それぞれとの関わりも必要であったので、取り組みによっては、ブロックで実施したり市単独で実施するなどの工夫も必要と感じた。
・ブロックの中でさらに部会制を敷き実施したいとの意見もあった。
・会議の定例化について、ブロックメンバー共通の意志として決定できていることに活があると思うので、今後も、それぞれのメンバーが主体的に取り組む集まりとして継続していきたい。

【助　　言】

國光登志子

三豊市、観音寺市をエリアとする三観ブロックでは、６月に開催されたＣＳＷ研修会の参加者が修了後、三観ブロック会議を立ち上げた。目的は、抱えている課題は似ているが、お互いに知らないことが多いことが明らかになり、課題の整理や情報交換と実践への具体的な取り組みを検討しようということであった。課題としては、①インフォーマルな活動は行われているが、お互いに知らないことが多く情報の共有や連携のネットワークがない、②行動できる若年高齢者や認知症の人の居場所がない、③地域で孤独・孤立している人への対応が少ない　④専門職といわれる人たちが地域をベースに集まる機会がなかった等が挙げられた。ブロック会議のメンバーは社協職員、行政、福祉専門職地域住民等で構成され、ブロック研修の企画・運営についてもこの合同ジョイントチームであるブロック会議により進められていることが特徴的である。

９月21日の第一回ブロック研修、11月19日の第二回ブロック研修では、三観地域福祉サービスの現状や今後必要なサービスについて確認し、インフォーマルな実践活動の実態を明らかにすることを確認した。病院のデイケア利用者で軽度の認知症の方の社会活動の場づくりについて、ブロック会議でプロセスを共有し、ブロックの事例として継続して関わることに決定。２回の活動実績に対するモニタリングやチェック機能についてもブロック会議として行っていくことになった。

ＣＳＷは講義や演習を何回重ねても研修から実践活動は生まれてこない。研修を契機に誰と誰が結び付き、そこに新たなメンバーが加わり多職種・多機関によるＣＳＷの推進チームが組織化され行政や住民からもこの推進組織が認められ、受け入れられて、新たな居場所づくりや見守り、支え合い活動の芽が出始めたところが、三観ブロックの実態である。１年目の成果としての目標到達度には達したと評価したい。

■香川県内の地域福祉活動

事例１　地域の見守り活動
－黄色い旗運動MINAMINO　絆－

南野自治会（東かがわ市）

事例２　ふれあい・いきいきサロン
－東ふれあいクラブ－

観音寺市社会福祉協議会
観音寺ボランティア協議会（観音寺市）

事例３　さぬき市子育ておうえんひろば　ぴょんぴょんカフェ

さぬき市社会福祉協議会
登録ボランティア（さぬき市）

ここまでは、地域にあるさまざまな生活課題やニーズをどう把握し、それらの解決のために地域での支え合いのしくみと絆をどう創っていくかについて考えてきました。

ここでは、実際に今現在、香川県内で取り組まれている地域福祉活動のいくつかを先進事例として紹介します。

どの地域の取り組みも、「住み慣れたまちで互いに支え合いながらいきいきと暮らしていきたい」という地域住民の思いがこもっています。また、その活動やしくみを継続・発展させていくために地域住民や関係者のさまざまな工夫がなされています。ぜひ、参考にしていただければと思います。

事例１：地域の見守り活動　－黄色い旗運動　MINAMINO　絆－

～住み慣れたまちで高齢者の毎日の暮らしを見守る～

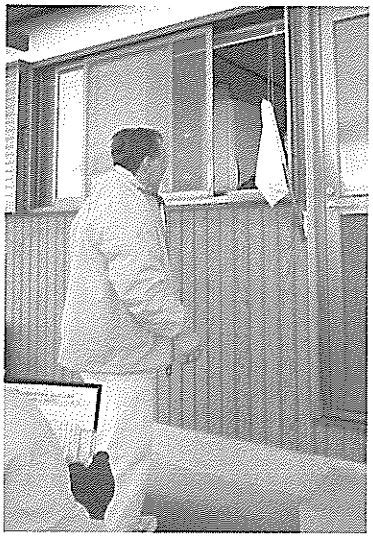
南野自治会（東かがわ市）

≪活 動 日≫　毎日
≪活動場所≫　自治会エリア内
≪活動者と対象≫
活動者：１人の高齢者に対し、２名の見守り支援スタッフ（自治会員）
対　象：一人暮らし高齢者（災害時要援護者）13名の体制
≪主な活動≫　声かけ・見守り運動

○活動の目的と具体的内容

東かがわ市相生地区（旧引田町）南野自治会は世帯数97、高齢化率45.14％ですが、３年後には50％に達する見込みです。

“自分たちのまちは自分たちの手”との考え方を基本に、「住み慣れた地域でみんながいつまでも生活していきたい」「それなら自分たちで！」との思いで、平成21年度頃から、地域に住む一人暮らし高齢者等（災害時要援護者）の方に、住み慣れた地域で安心・安全に暮らし続けていただくことを目的に、近所の支援員（２人一組）が日々の生活の中で安否確認を行う「黄色い旗運動」が始まりました。この活動のルールとして、一人暮らし高齢者等の方は、毎朝起きた時点で勝手口等に旗（黄色）を掲げ、元気である意志表示をし、支援員はその旗が掲げられていることを確認するとともに、旗の出ていない時は、高齢者からの無言のＳＯＳと判断し、体調など変わった様子がないか伺うことにしています。



○活動の効果

見守りに際して、自治会内の対象者の把握をするために独自で台帳を作成、整理しています。台帳には、自宅の見取り図に就寝場所を記載する等、夜間や緊急時に備えた情報も入れています。この台帳が、災害時の要援護者登録台帳にもなっています。毎日の見守り活動を行うことで、お互いの信頼関係が築かれ、小さな困りごとを早めに解決できることにつながっており、一人暮らし高齢者等の方からの感謝の声が聞かれています。

「黄色い旗運動」は南野自治会が行う地域福祉活動のごく一部分です。南野自治会は、〝地域全体のコミュニティ活性化〟を大きく掲げて、定例会、サロン活動、自主防災、運動会・イベント祭りなど小規模ではありますが、そこに住む一人ひとりがつながる“絆”をテーマに幅広い活動を行っています。

事例２：ふれあい・いきいきサロン　－東ふれあいクラブ－
～高齢者・障がい者の気軽に集える居場所と生きがいづくり～

観音寺市社会福祉協議会
観音寺ボランティア協議会（観音寺市）

≪活 動 日≫　月曜日～金曜日　13:30～15:00
≪活動場所≫　旧　観音寺東幼稚園遊戯室
≪活動者と対象≫
活動者：観音寺ボランティア協議会
対　象：高齢者や障がい者（住所は問わず）
≪主な活動≫
①高齢者や障がい者が気軽に集える居場所（ふれあい・いきいきサロン）
軽体操、リハビリの話、健康な食べ物の話、ミュージックベル、唱歌、リズム遊び、写経、手芸など曜日毎にプログラムを決めて、ボランティア講師とボランティアが実施
②会食　月２回
③サロン以外の空き時間は、高齢者のクラブ活動（フラダンス、ヘルマンハープ）の場として無料で貸し出しを行う

○活動の目的と具体的内容

「東ふれあいクラブ」は、地域で孤立しがちな高齢者や障がい者の閉じこもり防止と介護予防を目的とした、ふれあいの居場所です。「誰かと話したい」「ちょっと出かけようかな」と思った時に、そこに行けば誰かがいて、気軽に集える居場所となっています。地域を問わず受け入れており、ボランティアによる毎日のプログラムに高齢者も障がい者も楽しんで参加しています。

ふれあい・いきいきサロンである「東ふれあいクラブ」は、利用者を含む地域住民やボランティアが協働して企画・運営しています。その活動の支援と普及促進を観音寺市社会福祉協議会が担っています。

○活動の効果

月曜日から金曜日までプログラムを計画しているので、利用者が興味のあるものを楽しみに来るようになりました。継続する中で、参加者の特技を生かした抹茶や朗読のメニューもでき、内容が充実してきました。

毎日サロンを利用する人は、様子を日誌に記録することで、身体的変化がボランティアに分かるようになりました。初期の認知症の人に対しても、利用者どうしが自然にいたわり合う姿があり、家族からも喜ばれています。

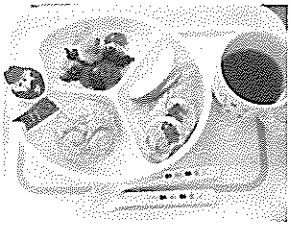
同じ建物内にある隣の施設「地域活動支援センター　あゆみ作業所（精神障がい）」や「小規模作業所　ぷちふらわぁ（身体・知的障がい）」の利用者も行き来があり、高齢者と仲良くレクリエーションを楽しんでいます。

事例３：さぬき市子育ておうえんひろば　ぴょんぴょんカフェ
～地域と子育て家族をつなぐ交流の場～

さぬき市社会福祉協議会
登録ボランティア（さぬき市）

≪活 動 日≫　毎週水曜日　10:00～14:00
≪活動場所≫　旧　志度幼稚園末分園
≪活動者と対象≫
活動者：事業の目的に賛同し登録した地域ボランティア　６名
対　象：子どもと子育て中のパパ、ママ、孫育てしている祖父母　など
≪主な活動≫
①子どもと一緒にゆったりできる居場所とランチの提供（週替わりメニュー）
②わくわくday（子どもたち参加の行事）の実施：月１回　第３水曜日

○活動の目的と具体的内容



さぬき市内の子どもたちを地域で豊かに育てることができるよう支援することを目的としています。

ボランティア考案の週替わりランチと居場所を提供し、親子及び孫と祖父母の交流の場、ゆっくり食事をし、話ができたりと楽しい時間を過ごすことができる場となっています。安価でおいしい手づくりのランチは人気があり、「レシピを教えて欲しい」と若いお母さん方から言われることもあります。

わくわくdayでは、地域ボランティアの方にお願いし、読み聞かせ・手遊び・楽器演奏・マジック・腹話術・パネルシアター・リズム遊び・クッキングなどをしていただき、毎回好評です。

ボランティアの活動支援と、場所の提供や広報などをさぬき市社会福祉協議会が担っています。

○活動の効果

「ぴょんぴょんカフェ」に定期的に参加してくれる親子も増え、母親どうしが子育てに関する情報交換を行ったり、子ども好きなボランティアさんと談笑したりと親子で顔見知りの方に会えるのを楽しみに来てくれているのがわかります。「ぴょんぴょんカフェ」に来た親子が、末地区での行事への参加することもあり、子育て世代が地域とのつながりをもちながら安心して子育てを行える雰囲気ができつつあります。

また、ぴょんぴょんカフェで提供するおやつは、さぬき市内の障害者就労支援施設より購入しており、間接的に障害のある方の就労の支援にもなっています。

ぴょんぴょんカフェは、地域と子育て家族をつなぐ交流の場・絆をつくる場になっています。

一年の取り組みから

本報告書は、今後さらに地域福祉実践が進められるのにあたり、専門職だけでなく地域福祉関係者が連携し、地域の課題解決に取り組む際の参考になるように編集したものです。

社会福祉のいわゆる高齢・障がい・子育て家庭等、分野に捉われることなく、「地域」を基盤に支援を必要とする人たちを支えるしくみを作り、それを維持する活動を担うコミュニティソーシャルワーカーの養成と、地域福祉を推進する主体者としての地域住民に対する啓発がますます重要といえます。

この取り組みでは、担い手となる人材の養成について、「基礎研修」から始め、それぞれの現場での実践を経て、解決が困難と思える事例を持ち寄る「スキルアップ研修」へと進めました。またその間、県内6圏域で専門職同士が「顔の見える関係づくり」をめざして、それぞれの状況に則した内容で研修に取り組みました。地域を基盤としたソーシャルワーク実践においては、関係者が連携し、それぞれの専門性を発揮して、チームとして有効な支援が求められるからです。職域、職種等が異なることで相互理解が十分とはいえない状況から、共通認識と信頼による連携が構築できることをめざしました。制度では対応できない事例に対して、行政、社協等が病院との連携により新しい取り組みを計画し、実践に繋いだり、また、地域包括支援センター、社協、病院等がそれぞれの立場で住民の課題発見のための連携のあり方について協議して、シート開発に取り組みました。コミュニティと地区社協という異なる枠組みの中で地域福祉に向けた住民活動をどのように展開していくことができるのかを模索しました。また、多職種による困難事例検討会を実施したり、地域福祉の推進役としての民生委員等住民リーダーの参加したニーズキャッチのシートの開発について協議しました。

本事業の取り組みにより、多機関多職種の専門職が一堂に会しただけでなく、住民のリーダーである民生委員の方とともに事例検討を実施することもできました。単年度の事業の中で成果を出す困難さを感じながら、参加者が連携の必要性・重要性を共有でき、生活圏域の中で互いに顔の見える関係の構築の重要性を認識しました。連携シート開発や困難事例検討会といったやり方の違いはありますが、目標達成以上にその取り組みの経過の中で共通認識を持てたことは、今後の活動につながる成果だと思います。ご指導いただいた日本地域福祉研究所の先生方からも多くの示唆をいただき、こうした取り組みを継続していく努力と決意を新たにしました。

個別支援の場面でお互いにどういった機能を担っているかもわからないままでいる状態であったこと、思い込みや、勘違いがあったことが一堂に会することで互いに理解し合えました。対人援助の専門職として、支援に際し連携するうえで、違いがあることを知ることは、地域を基盤として考えていくうえで重要な視点です。支援の視点も保健、医療、福祉とで、また行政の立場と社協や民間事業者とで、在宅と施設とでは違いました。制度内であってももちろんですから、制度外の取り組みについての意識の相違は大変異なっていることを認識しました。

顔の見える関係とは、安心して視点の違いを確認し、補い合える範囲を確認できることであり、実践を進めるにあたり、また、他職種と連携するうえでは大切であると思います。地域の中で関係者の連携を進めるコーディネーターとして社会福祉協議会の役割が求められ、社会福祉協議会職員の意識と組織のあり方を再考する機会となりました。

また、香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会としては一人ひとりのワーカーの実践を大切に複雑多様化している困難事例の集約と、その中からの学び、会員のスキルアップをめざす活動を継続しなければと考えています。

新たな生活課題や多様な生活ニーズに対し、制度だけでは対応が困難になってきており、事業者のみならず解決に向けた住民活動がますます求められています。その担い手をつなぎ、そうした活動にもつながり活力ある地域づくりに関わるコミュニティソーシャルワークに取り組みたいと思います。

香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会
代表　越　智　和　子

【執筆・協力者】

津野　正敏　東かがわ市社会福祉協議会

三谷　成浩　さぬき市社会福祉協議会

田中　幸代　土庄町社会福祉協議会

中野　恵子　社会福祉法人　サンシャイン会

辻　　章伯　医療法人　財団博仁会　キナシ大林病院

豊田　耕司　坂出市社会福祉協議会

大藤　千津　善通寺市社会福祉協議会

篠原　宝子　まんのう町社会福祉協議会

大西　康永　観音寺市社会福祉協議会

塩田　英一　観音寺市社会福祉協議会

大西　　潤　三豊市社会福祉協議会

越智　和子　琴平町社会福祉協議会

香川県社会福祉協議会　事務局担当（十河、竹田）

地域の絆づくり促進のための
コミュニティソーシャルワーク実践へのヒント集
～地域での支え合いのしくみを創り出す
ネットワークを構築するために～

平成25年3月発行

発　　行：香川県

著・協力：特定非営利活動法人日本地域福祉研究所

理　事　長　大橋（おおはし）　謙策（けんざく）

主任研究員　髙橋（たかはし）　信幸（のぶゆき）

主任研究員　國光（くにみつ）登志子（としこ）

主任研究員　青山（あおやま）登志夫（としお）

編集・著：香川コミュニティソーシャルワーク実践研究会

【連絡先】

社会福祉法人　香川県社会福祉協議会

〒760-0017

香川県高松市番町一丁目10番35号

香川県社会福祉総合センター内

TEL　087-861-0545　　FAX　087-861-2664

※　無断転載を禁止します。